真剣で私たちに恋しなさい！

黒亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私たちに恋しなさい！

【Ｎコード】
Ｎ１３７４Ｗ

【作者名】
黒亜

【あらすじ】
ある少年“流川海斗”がまじこいの世界で自由奔放の生活をおくる
目立たなかった少年の未来には何が待つのか
今、武士娘との波乱の日常が始まる！
※ご都合主義、駄文注意、ダラダラ小説
楽しめる方だけ読んでいってください
更新はできるだけ毎日を目指しております

プロローグ「退屈」（前書き）

主人公があまりにも贔屓される（ご都合主義ともいう）が嫌な方はご遠慮ください
出来る限り、キャラは崩さないように善処しますが、キャラ崩壊が嫌な方はご遠慮ください
先と似たようなことですが、世界観を崩されるのが嫌な方もご遠慮ください
あくまでまじこいの設定を使わせて頂いているという認識でご覧になってくださると幸いです
最後に自己満足の低レベル小説ですが、これでも楽しめるという方はお読みになってください
読んでくださるというので大変嬉しいのですが、感想などくれたら泣いて喜びます

プロローグ「退屈」

『退屈』…

それはこの世で一番恐ろしいものだ
ある奴はお化けが怖いのだという、またある奴は不良が怖いという
だが、退屈にはその怖いという変化すら訪れない、まるでリピート再生の
ように、ケツまで行ったら頭に戻される、そんな日常のループ

俺はそれを何よりも嫌った
中には代わり映えしない毎日に嫌気がさして、停止ボタンを押す奴もいる
だが、そんな奴等の仲間入りなんて、さらさらする気はない
人間は欠陥品だ、止めれば最期、二度と再生ボタンは押せない
なら、俺は何をすればいいのか
明確な答えなんてあるはずもなく、投げかけた問いは宙に浮いたまま

だから俺は赴く
―変化をもとめて

プロローグ「退屈」（後書き）

プロローグ短いんで前書きをガッツリ書いてしまいました、初投稿
感想欲しいです、でもメンタル弱いんで厳しい批判は…まあもらえ
てから言いましょう
大変綺麗な文章を書く方が沢山いらっしゃいますが、自分は素人の
毛が抜けた程度の才能しかないので
寛大な心で、ハードルを下げてご覧ください

1話　「俺の日常」（前書き）

若干、今回は長いです
主人公はオリキャラですが、モデルがいます
まあ、気づいた人はもう分かってしまったかもしれません

1話　「俺の日常」

「うぃーす、おはよう」
「おはよ、遅かったね」
「寝坊でもしたのか？」
「いや、それがよ…」

「ねぇ、昨日のドラマ見た？」
「見たわ、あのチョーどろどろのヤツっしょ」
「いや～、やっぱイケメンはいいわぁ」

今日も今日とて騒がしい教室だ、そういつもと何も変わらない
言うまでもなく、退屈だ
まあ、だからといって俺がその会話に参加することはない
俺が欲しいのは別に人間ではない、刺激だ
会話が嫌いというわけではないが、自分から話しに行くほどではない
まあ独りでも何も困らないが…
こんなことを言う奴を“ボッチ”と呼ぶとこの前読んだ本に書いてあった
だから、間違っても口には出さない……口に出す相手もいないが
あれ、俺ってすごい悲しい奴じゃね？

なーんて、全部俺自身が仕向けたことなんだよなー

「みなさーん、先生が来ますよー」
「おい、机の上のＤＶＤしまえ」

「起きろ、先生来るぞ」

クラスに委員長の声が響き渡り、その後数秒クラスは静寂につつまれる

ホント変わらないな、この流れは…もはや、テンプレだ
案外、俺は本当にゲームの中の登場人物とかなんじゃないだろうか
何を話しかけても二回目からは同じ言葉で返されるＲＰＧのような。
だとしたら、さっさとラダトームから出してくれ
もう、うんざりなんだよ、宝物庫のおあずけとか、王様とは思えない量の
軍資金とか、国を救わせるのにケチってんじゃねえよ
こちとら竜王と戦って、さっさとエンディング見たいんだよ
あっちは世界の半分、提示してくんだぞ
そらもう、王様は完敗だよ、主に器の大きさで

そんなしょうもないことを脳内で繰り広げていたら、教壇に女教師が佇んでいた、素人目に見ても隙はないだろう

「起立！」
「礼！」
「着席！」

「うむ、では出席をとる」

淡々と教師が名前を呼んでいく、小声だといちゃもんつけられるのは皆、嫌と言うほど身に染みているらしく、はきはきと返事をしていく

そして、最後の一人である

「流川海斗」
「おう」
「……」

教師が顔をしかめる。とはいっても怒るというよりは困った様子だ
最初の方こそ、クラスもざわついていたものの、この数秒の沈黙も
慣れたものだ、今じゃわざわざ俺の方を見る奴もいなくなった

「流川、再三言うが、その言葉遣いはなんとかならんのか」
「ああ」

最低限のやり取りを交わす
こんな形だけの叱責ももうすっかり日常の一部だ
教師は深い溜息をついて諦めたように次の話に入っていった
今でこそ、この対応だが最初の頃はひどいものだった

～1学期開始当初

「では、新たなクラスとなったところで出席をとることにする、呼ばれた
者はしっかりと返事をするように」

……

「最後に流川海斗」
「おう」
「…流川海斗」
「おう」
「貴様、教師に向かってその態度は何だ！」

素早い鞭が飛んでくる
側面から3発の打撃が入る
俺はその攻撃に対して何をするでもなく、沈黙していた

「お、おい、黙ってないでなんとか言わんか」

教師はびっくりしたような顔で俺に発言を促す
クラスメイトはざわざわとざわめいている
大方、俺が痛いと声を上げたり、顔を歪ませたりしないことを不審がっているのだろう

目立つのは御免被るのだが、これだけは性分だ、どうしようもない
それにこの対応ならば、クラスメイトが教師の去ったあとで「お前すごいな」と机のまわりに面白半分で集まってくることもないだろう
こんな鞭で叩かれて黙っているような奴は気持ち悪いだけだ
思えば、このときから俺の心象は、無口で、無表情で、根暗の気味悪い奴

という風になってしまったのだろう。いや、そうなるように仕向けたが正
解か

ともかく、こんな対応を来る日も来る日も続けていると、しだいに教師は
あきれたように形式上の注意をするのみとなった
クラスメイトも俺の人物像をしっかりと確定してしまったようだ
結構なことだ

～

ということで今に至るのだが、目立たないことが退屈につながるとは完全
に思慮の外であった

目立たないというのは意外に難しい

それこそヒーローみたいな良い奴でもいけないし、逆にヤンキーみたいな
悪い奴でも駄目だ、話しやすくても勿論目立つし、気持ち悪すぎてもイジ
メやネタの格好の的だ
目立つことを避ける一番の方法は他者との関わりを絶つこと
スポットを避けるのではなく、電源を落としてしまうという方法だ
それがまさかステージ全体の明るさを奪うことになるとは全くの想定外だ
ったわけなのだが…

まあ、つまりは他者に関わりたくないと思わせればいい
性格の良し悪しに関わらず、人間が最も嫌うタイプは無反応の奴だと思う
楽しく話しかけても笑わない、いじめても嫌がらない
それでもいいなら、それこそ、そいつは石ころでも相手にしていればいい
だからこそ、そういう奴は総じて相手にされない

見た目も視力が悪いわけでもないのに黒ブチの伊達眼鏡をかけているといっても、所謂おしゃれ眼鏡というのではなく、ダサ眼鏡だなんか、昔のアニメの受験生とかがつけてそうな、頭に日の丸のハチマキ
を巻いて、頬にそばかすがあるような…
また髪を前髪のほうに持ってきてぼさぼさと目に影がおちるようにしてい
て、陰気な雰囲気を演出している
要約すると、わざと少しダサく見えるようにしている
別にナルシストなわけではないが、人の好みなんて分からない
事実、この学校に来る前は街で誘われたことも数回ある
当然、告白されたとなれば、どんな奴でもその日の話題は独占だろうまた、告白した子からすれば、答えに関わらず、存在をすぐに意識しなく
なるというのは、どちらにしても無理な話だろう
実際、その二つだけで印象はだいぶ変化した
やり始めた当初は鏡を見る度、霊感に目覚めたのかと疑ったというわけで、見た目的にも注目されることはなく、正真正銘の気持ち悪
い奴と位置づけられているわけだ……言ってて悲しくなってきた
そんなどうでもいい自虐を延々続けていると名前を呼ばれた気がした

1話　「俺の日常」（後書き）

初めて長い文章を書いて、改行と話の切れ目が難しいということを知りました。話によって、おそらく長さがばらばらになってしまいそうです
主人公は元はイケメンです、ただ学校ではかけらも見せないといった感じです、いきなり主人公贔屓が炸裂していますね

2話　「兆し」（前書き）

前回は文章が長かったですが、前回が特殊です
大体これからは今回くらいの長さだと思います
そしてやっと、原作キャラの名前がちらちら出てきます
前回まで一言も名前は出してなかったんですね

2話　「兆し」

「流川海斗」

気のせいでもなんでもなく、呼ばれたようだ
どうやら色々考えている間にテストを返していたらしい
この問題の難易度的に７０くらいが平均だろうと思ったので、６２点くら
いにしておいたはずだ

「６２点なので、平均７２点にあと一歩だな、次はもっと頑張るように」

うむ、大方予想通りだ、勿論不正解の箇所は空欄だ
珍回答でわざわざユーモアを発揮することもない
平均より少し下くらいが一番目立たない
教師に褒められることもなく、叱られることもない、決まって出る言葉は
“次は頑張れ”だ
最高点数１００点と黒板に書いてある、すごい奴もいたもんだ
なんか毎回高得点取ってる奴がいるらしいが、生憎と名前は覚えてない
てか、会話もしないから、覚えられないし、その必要もない

「そして、今日はこの前のＳ組との件の処置について話がある」

S組とは隣のエリートクラスのことで些細なことでこのF組といさかいを
起こしている、ついこないだも何やら一悶着あったらしい、詳しくは知ら
んが、この俺の耳に入るほど、まさに犬猿の仲なのだ

ウウンと教師が咳払いをする

「学園長にも相談したところ、パフォーマンスも兼ねてタッグマッチ大会
を開催することとなった」
「たっぐまっち？」
「ああ、男女の二人一組でS・F混合のトーナメント戦を行う」
「男女か…」
「はいそこ、変な妄想に浸らない」
「まあ、その男子数名は置いておくとして、競技はなんですか」
「サドンデスの格闘技のようなものだ。フィールドの中で闘い、細かいル
ールなどは一切なく、ギブアップ、フィールドアウト、判定負けが起きる
まで、二対二での戦闘だ、勿論武器の使用も許可する」
「よくわからないけど、決闘みたいなものね。まぐまぐ」
「梅先生、そのペアはどうやって決めるんですか」
「基本、なりたいもの同士がなるのでいい。決まらない場合は、くじでも
なんでも、とにかくお前らに任せる」

教師の言葉でクラスがざわつく
大体は女子連中のかっこいい男子と組みたいという願望の声、またはその
逆の男子連中の欲望の声であったが、その中には案の定…

「流川君とは組みたくないよね」
「何考えてるか分かんないし」
「てか、運動神経もそこそこだし、守ってくれないでしょ」
「やっぱり強くてかっこいい、風間君とかでしょ」

本人達は小声で聞こえないと思っているのだろうが、自分の悪口というの
は何故かクリアに聞こえてしまう
そして、自分に都合のいい事は聞こえないと。
人間って、不便にできてますねー、ホント
…ん？なんか気まずそうな視線が突き刺さる
あぁ、どうやら他のクラスメイトにも普通に聞こえていたらしい
クラス中にクリアに響き渡っていたようだ
ただ、こういう二人組のイベントとかで嫌われるか
自分で仕向けたとはいえ、あまりいい気持ちはしないな
後悔すらもしていないが…

んー、誰か「その大会って参加しないことは出来ないんですか」という質
問をしてくれ、こんなことに口数を使いたくねえ、無口の印象が崩れる
多くの女子からは嫌悪の目、比較的良識を持った人も不審の目をし

ている
その他も関心のないものもあるが、同情などは一切なかった
うむ、予想はしていたが、このクラスに味方は一人もいないらしい
くそ、こんな予想もしない形で目立つとは…
誰だ、ダブルマッチとか面倒くさいことを考えたのは
もうオチが見えてる、最後まで余ってくじで一緒になった女子に疎ましが
られて、後日そいつの友達とかに愚痴られるんだろう、はい正解

「ちょっと待って」

2話　「兆し」（後書き）

今更ですが、ここって小説を読んでくださった方が見ているんですよね
ならば、最初に言うことはありがとうございますでしょう
本編では主人公はホントにクラスで孤立しています
委員長などですら、警戒といった感じです
そして、ようやく物語に動きが。
次回は、やっと原作キャラがガッツリ出てくるのではないかと（予定）

3話　「救世主は犬」（前書き）

なんと評価が頂けました
こんな小説に３ｐｔもくださった方、有難うございます
もっと遅く書こうと思ってたのですが、嬉しくて投稿しちゃいました
今度は感想もほしいなーなんて…

3話　「救世主は犬」

「ちょっと待ってよ」
「どうした、ワン子」
「アタシが流川君と組むわ」
「「「「は！？」」」」

思わず、俺まで声を上げてしまった、まさかの不正解か
余るのも嫌だったが、これは目立つんじゃないか

「アタシと組んでくれる？」

近づいてきてクリッとした大きな瞳で見上げられる
この赤髪ポニーテール少女の名前は”川神一子”
…俺が唯一このクラスで名前を知っている少女である

この打ち解けやすく、明るい少女は全く物怖じすることなく、俺に話しかけてきた、その姿は自然体であり、作った様子は一切なかった
邪気のない笑みを浮かべていて、俺を他の奴と区別していない

コミュ能力のない俺に意味不明な日直日誌というものが回ってきたときも
助けてくれたのはこいつだ

～

「ここはね、こうやって書くのよ」
「ふむ」
「で、ここは教科内容を書くの」
「な…」

聞かなくてもいいと思いつつも、「なんで、俺に関わるんだ?」という言
葉が口をついて出そうになった
うーん、こんな無垢な少女には少し気が緩む、下心が見えないからな…

「な…名前は?」

そう誤魔化すのが適当だと考えた
実際に知らないわけだし、二人のときに聞いたところで目立つということ
にはつながらない、何より俺にとって想定外の存在だった
だから、名前くらいは聞いておいても損はないと考えた

「川神一子よ」
「そうか」

ここで何の疑問もなく、答えてくれるところも性格が表れている
その後、俺が話すことはなく、ただひたすらに日直日誌の書き方を教わっ
ていた

～

「アタシと組んでくれる？」
「ああ、構わな……い！？」

了承の返事を返そうとしたら、突如、背後から鋭い殺気を感じた
嫌悪や軽蔑のような視線は浴びせられ慣れてるが、これは違う
気になって、そちらに視線だけを放ると、柄の悪い男が睨みをきかせてい
た。面識は当然ないので、恨みを買う覚えはない…
かといって、顔は強面だが無闇に殺気を飛ばすような奴ではなさそうだ
てことは、この女関係か？
まあ、すぐに手を出してくる様子もないし、俺はそこで思考を止めた

「どうしたの？」
「あぁ、別に」
「そう？じゃあ、これからアタシたちペアね」
「おい待て、ワン子。ほんとにそんな奴とペアを組むのか」

筋肉男が待ったをかける
それを皮切りに、川神一子のお仲間が口々に文句を言い出す

「そうだよ、ワン子、そんなの危ないしさ」
「知らない奴には付いてくなと教えたはずだが」
「知らない人じゃないわ、クラスメイトよ」
「そりゃそうだが、そいつは何考えてるのか分かんないだろ」
「そんなの話したことがないからよ、これから知っていけばいいわ」

少なくとも俺に声をかけたのは同情などの軽い気持ちではないようだ
仲間の忠告は素直に聞き入れるタイプだと思ったのだが、俺とタッグを組
むのに狙いがあるのか、とてもそうは思えない
純粋に優しいというか、そういった親切心からの行動で間違いないだろう
だがまあ、周りとしてはどうにかして、俺と組ませたくないんだろうな
その気持ちはよく分かるぞ、そういう印象を与えてきたんだからな

「ワン子、トーナメント優勝したいよな？」
「モチロンよ」
「だが、そいつは俺よりも弱いくらいだぞ、勿論ガクトなんかとは比べ物
にならない、それじゃ戦力にならないだろう」

お、考えたな、あいつは頭脳担当か？

確かにコイツは優勝を何がなんでも狙うタイプだろう
たとえ勝ち目が無い相手でも、「やってみなきゃ結果は分かんないわ」と
か言いそうだ
そんな負けん気の強い少女には最も有効な説得だろう

「そんなの私の力でカバーするわ」
「……」

おお、自信満々なこって
ほんとに俺とペアを組む気らしいな

「はあ、分かったよ」
「おい、いいのかよ、あいつにワン子を近づけて」
「今のワン子に何を言っても無駄だ、但し困ったことがあったらすぐ俺に
相談しろ、いいな？」
「うん、分かったわ」

どうやら決まったらしい
俺を訝しげに見つめる視線は変わらないが、一応認められたってとこか
こりゃ結構な番狂わせだ

「じゃあ、よろしくね、流川君」

3話　「救世主は犬」（後書き）

ありがとうございました
波線は一応、時間のずれを表してます、分かりにくくてすみません
分かった人もいるとは思いますが、殺気はゲンさんです、はい
あと、読みにくいとかあったら、どんどん言って下さい
改善するように努めますので（感想がほしいだけ）
ちなみに変なところで改行するのは、メモ帳で書いてるからです

4話　「ワン子の努力」（前書き）

初感想頂けました、感謝感激です
返信もさせて頂きましたので、くださった方はご覧ください
なんか、回を重ねるごとに矛盾が怖いです
あまり、固まってないのに衝動で書くからこうなるんでしょうね

4話　「ワン子の努力」

ペアが決まったとはいえ、その後の俺の扱いや生活に変化があるわけでも
なく、ほとんど誰とも話さず、学校にいる間は本を読んで、ごくたまに川
神一子が話しかけてくるという、なんら前と変わりない日々を過ごしてい
た

そして、あっという間にタッグマッチ前日となった

「では、残りの時間はペアで過ごすように」

話の流れからすると、午後の授業を明日のタッグマッチに向けてペア同士
の練習や打ち合わせにあてるようだ
当然、しらばっくれて帰るわけにもいかないだろう
さて、どうするか

肝心の川神一子は遠くで何か言われている

「気をつけろよ」
「何かあったら、すぐに連絡しろ」

うむ、警戒心はあいかわらずＭＡＸのようだ
そして、仲間にうなずき返した少女がこちらにやって来た

「じゃ、流川君、ヨロシク」
「ああ」
「明日はアタシが敵を倒すから、流川君は身を守るだけでダイジョブよ」
「おう」
「出来る限り、守りながら戦うわ、任せて」

胸をはって、自信満々に話す目の前の少女
やはり、この状況でも負ける予定はないらしい
勝ち上がることしか見据えていない、尊敬に値するほどの自信だ
まあ、当然か

この少女を初めて見たのは同じクラスになる前だった
やっと日が出てきた頃の早朝、川辺にタイヤをひきずって走る姿があった
ものすごく時代錯誤の光景に最初はなんかの撮影かと思っていたが、次の
日もその次の日も同じ姿がそこにはあった
その少女は休憩も少々に、登校時間ギリギリまで走り続けていた
その毎日の積み重ねが彼女の自信、支えになっているのだろう
自分で築いた土台だからこそ、安心して堂々と立っていられる
見ていて気持ちのいい生き方だった

目の前の少女は笑顔だ
あれだけの鍛錬をしていても、苦に感じていないのだろう

努力が好きなのだ

「…っと、聞いてる？流川君」
「あ？」
「だから、これから何しよっか？」

知らないうちに話が進んでいた
といっても、俺は話しすぎると目立ってしまうし、練習や特訓なんてする
のは論外だ
だが、仮にも授業の代わりの時間だ、帰るなんてことは出来ない
さて、どうしたものか

「じゃあ、しりとりでもしましょ」
「は？」

思わず素っ頓狂な声をあげてしまった
おそらく練習とかは俺がしたくないというのを察して、避けてくれたのだ
ろうが、まさか選択肢にしりとりがあるとは思わなんだ

「じゃ、アタシからいくわね、”りんご”」

なんか勝手に始まった

別に二人だけだし、目立つこともないか
だからといって、あまり危ない橋は渡りたくない、ここは…

「“ごはん”」
「・・・」
「・・・」
「勝ったわ、初めてしりとりで勝てた」

ものすごく笑顔だ、てか初めてなのか
相当、強い奴とやっていたのだろう

その後、何度か勝負をして2ターン目で必ず俺が敗北していた
そして、6度目くらいの勝利にさしかかろうというその時、

「アタシ、もしかして遊ばれてる?」

あ、ばれた
流石に気づかれたか

「ひどいわ、ひどいわ、そうやってアタシで遊んでいたのね~」

なんというか本気で悔しがっている
若干、涙目でこちらに訴えかけてくる
演技でもなんでもないその姿が妙に可笑しかった

「あ！」
「ん？」
「今、笑ったわよね」
「な…！」

なんだと、まずい、不覚だ
今まで根暗のキャラで通してきて、笑みなんて微塵も見せてこなかったの
に、まさかこんなとこでミスるとは…、油断しすぎたな
というか、この場をどうするか、否定するのもおかしいし…

そんなことを考えていると絶好のタイミングで終了のチャイムが鳴った

「それじゃ」
「あ、待って…」

僥倖と思い、静止を振り切り、すぐに教室から飛び出した
その後は目立たぬよう普通に歩いた
いよいよ明日がタッグマッチだ

4話　「ワン子の努力」（後書き）

ありがとうございました
感想でもあったのですが、今回ので少し分かるように
主人公は根暗とかではないです、あくまでキャラです
ただ、こうするのにも色々事情が…
会話も好きでしょうね、地の文の多さからして（苦笑
あと、主人公の設定おしえてという要望があったので
1つあげておくと、動物好きですかね（基本、何でも）
そんなんで次回いよいよタッグマッチです（早っ

４．５話　「大和のしりとり勝負」（前書き）

祝・評価５０ｐｔ記念　番外編
知らないうちにいっていました、大変感謝です
今回の話は本編とは関係ないので、読まなくても問題ありません
時間があるから、読んでやるよという方だけご覧ください
ですが、後書きは読んでくださると助かります

4．5話　「大和のしりとり勝負」

～一子の場合～

「おい、ワン子」

「んー、なに？大和」

「しりとりするぞ」

「えー、嫌よ、大和いじめるじゃない」

「勝てたら、このビーフジャーキーをやるぞ」

「やるわ！」

「じゃあ、“り”からだ。ワン子いいぞ」

「“りんじしゅうにゅう”」

「漢字で書けるか？臨時収入」

「んーん」

「だろうな、じゃ“薄絹”」

「出たわ、大和のぬ攻め、“ぬか床”」

「“狛犬”」

「うわーん、やっぱりいじめるわー」

～岳人の場合～

「岳人、しりとりでもするか」

「おう、いいぜ」

「じゃあ、“り”からだ」

「“りんご”」

「“五臓六腑”」

「“プロテイン”！！」

「・・・・・・」

～卓也の場合～

「モロ、暇だししりとりやろう」

「いいよ」

「しりとりの“り”からだな」

「リトルバ〇ターズ」

「……ああ、“ず”な、“ズワイガニ”」

「ニトロプ〇ス」

「…もういいか」

～岳人の場合　二回戦～

「よし、こい」

「俺様からいくぜ、“リング”」

「“グループ”」

「“プロテイン”！！」

「岳人にはしりとりで食券でも賭けようか…」

今日も風間ファミリーは平和です

4．5話　「大和のしりとり勝負」（後書き）

はい、もう意味わからん、読んでくださった方はありがとうございます
たぶんこの面子だと、こんな感じかなーと妄想しました
で、記念のこともあるのですが、この後書きでお知らせをしたいがために書いたというのもあります
今、ヒロインに関する要望を集めております
詳しくは活動報告を見ていただけると分かると思います
皆様のご協力が頂ければ、幸いです
ちなみに本編の続きは明日投稿しますので！そちらもよろしくお願いします

5話　「開戦！タッグマッチ」（前書き）

実は昨日１００ｐｔを達成しまして、今日の投稿でお礼を述べさせて頂こうと思っていたら、なんと今日１５０ｐｔ行ってました…
本当にここまで行くなんて、読んでくださっている方には感謝しきれません
余裕ができれば、この二つの記念の閑話も作らせていただきます
今回少し短いかもですが、これからもよろしくお願いします

5話　「開戦！タッグマッチ」

トーナメントというのは、面白いものだ
実力が必要なのは言うまでもないが、運も密接に関わってくる
例えば、優勝候補同士が初戦であたってしまえば、自分たちの順位が上が
ったも同然なのである
そんな運がよかったのか、大した苦労もなくこの次の試合に勝てば準決勝
進出というところまで来ていた

「では、準々決勝第一回戦を開始する、始めぇ！」

俺は初戦からそうしてきたように、開始の合図がかかっても、ポケットに
手を突っ込んだまま、フィールドの端から一歩も動かない
そして、川神一子が薙刀を振り回して、相手に向かう
もはや、観客からのブーイングも起こらない

Ｓｉｄｅ　百代

「おい弟、ワン子とペアの奴はなんだ」
「ああ、なんか得体の知れないクラスメイトでね、余りそうだったから、
ワン子が進んでペアになったんだよ」
「あいつは何をしているんだ」

「何もしていない」
「それは分かる」
「運動神経もなくて、弱いから、手は出さないんじゃない」

大和の言うように端にいて、戦いに参加するような素振りはない
身長は高いもののあまり強そうには見えない

だが、一つ不可解なことがある
どんなに弱い不良でも、文化系の部の女子でも、少なからず気というものを持っている、使えなきゃ全く意味のないものだが、とにかくどんな雑魚でも微量ながらも気を持っている、そう、そのはずだ

だが、目の前のあの男からはその微量すら感じ取れない
弱い云々という次元の話ではない、強くなる可能性すらないのだ
言うなれば、コンセントが入ってない電化製品のスイッチをいくら押したところで動かないのと同じだ
無と有…0と1には大きな隔たりがある
多くの人間の気を探ってきたが、こんな奴は初めてだ

…妹は大丈夫だろうか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

川神一子が怒涛の攻めを繰り広げる
いくら準々決勝まで進んできたとはいえ、無名のＳ組生徒が勝負に

なるは
ずもなく、追い詰めたところで一気に勝負を決めた

「勝者、川神・流川ペア」

会場から拍手が巻き起こる
まあ、全て一子へ向けてのものだということは最早分かりきっている
今回の試合も俺は一歩も動くことなく終わった
…本でも持ってくればよかったか

「いよいよ、準決勝ね。腕が鳴るわ」

準決勝に残ったのは、川神・流川ペア、井上・榊原ペア、直江・フリード
リヒペア、九鬼・忍足ペア、俺らの相手は井上・榊原ペアだ

フィールドにあがる両ペア、ハゲと白髪女が上がってきた。濃いな～
まあ、今までの奴らに比べて強さは段違いだ
さて、努力少女は勝てるのかね

「ワン子、頑張れ～」
「負けるなー、ワン子」

「準、ユキ、頑張ってください」
「F組の猿どもに格の違いを見せ付けてやるのじゃ」

おーおー、流石に準決勝ともなると外野が騒がしい
まあ、応援されてないのが４人のうち１人だけだというのは、触れまい

「両ペア、前へ」

学園長の言葉で場が静まり返る
フィールド、会場全体に緊張が広がる
ただ準決勝だからというのではない、これからぶつかるのは強大な力同士
今までのような一方的な試合ではないのだ
だが、二対一のようなこの状況ではそうも言えないのが悲しいところ
それでも今までのとは全く違う、いわば本番だ
学園長の開始の合図を俯いて待つ
１秒、また１秒、
そして…

「マシュマロたべる～？」

意味不明な言葉が飛び出した
視線を下から前へと戻してみると、マシュマロが白髪女から差し出されて
いた……え！？なに、俺に
その娘は初対面の俺に嫌悪を示すことなく、マシュマロをくれると

いう
なんか、地味に嬉しいが、戦闘前に機嫌をとろうったって、そうはいかな
い。まったく、裏がないように見えるからって、俺は騙されんぞ
そんな些細なことで俺の評価が変わるか、白髪乙女め

…あっさりと脳内の俺は買収されたらしい
意外に俺って、寂しがりやなのか、孤独が長すぎたか

「…いらん」
「そう?ざんねーん♪」

何故、そんなに笑顔なんだ
なんか、この笑顔…
いや、気のせいか

「仕切りなおすぞい」

咳払いをする
一度去った空気が戻ってくる

「では準決勝第一回戦、始めぇ！」

5話　「開戦！タッグマッチ」（後書き）

ありがとうございました
前書きでも書かせてもらいましたが、本当に吃驚で嬉しいです
ブログとかはやってないので、ホント2，3人に気づいて見てもらえればいいなーと思っていたので、感動です
活動報告にもコメントくださってありがとうございます
ちょっと調子に乗ると、感想も一言でもいいのでもらえるとエネルギーになります、でも読んでくださるだけで十分満足ですね
次回はいよいよ戦闘です、ＶＳユキ＆ａｍｐ；準　…書けるのか

5．5話　「タッグマッチ初戦」（前書き）

１００ｐｔ記念がやっと出来たと思ったら、２００ｐｔ行ってましたもはや、信じられません、本当にありがとうございますですが、１５０ｐｔ記念もまだなのに…
嬉しい悲鳴ですね
※番外編のため、飛ばしていただいても問題ありません
　５話の続きでは決してないのであしからず
　基本、小数点のつく話はこういう形でいきたいと思います
今回は特筆することもないかなと思った
初戦の話を気まぐれで書きました、よろしかったら読んでください

5．5話　「タッグマッチ初戦」

タッグマッチが始まったわけだが、正直ほとんどの奴らは楽勝なんじゃな
いかと思う
仮にもあれだけの努力を毎日している少女
エリートで人を見下しているような、いかにも汗臭いのを嫌いそうな一般
層のS組は相手にならないだろう

だから、俺は隅っこで大人しくしてよう
目立ちたくはないので、もとよりそのつもりだったのだが。
いや色々理由つけないと、一見、最低野郎だからな
少女を戦わせて、何もしない男という現実から逃避させてくれ

勘違いするなよ
俺だってそりゃ、ゴーレム級が出てきたら、戦線にたつぜ
俺が言ってんのは、ドラキーマくらいは自分で対処してくれってことだ

はあ、言ってて虚しい
どうせ、ゴーレム出てきても動けねえよ
だって、目立つもの、そんなことしたら確実に注目の的だもの

そして、初戦が始まった

俺は目立たないようにその場を一歩も動かない
案の定、ブーイングがとんできた
うっせーよ、俺の勝手だろうが

缶やらペットボトルやら、物が沢山とんでくる
どこで用意したんだ、こんなもん
審判は何も言わねえし…

いてっ
誰だ、このコーラのペットボトル投げたやつは
中身満タンで投げたら、もはや鈍器だぞ

そんな試合とは全く関係ないものと戦っている間に勝負は決していた
ご苦労さん

その後、二回戦目からは諦められたのか、何も飛んでこなかった
助かったが、男としては複雑だ

せめて、心の中で応援でもしとくか

5．5話　「タッグマッチ初戦」（後書き）

ありがとうございました
何とも手抜き感満載ですね
一応、記念というか形に残しておきたいので書かせていただきました
あと、ヒロインアンケートも活動報告にて、まだまだ募集中なので
お願いします。コメントもお待ちしております
本編の６話は明日、投稿します

6話　「揺るぎなき瞳」（前書き）

一日見ていない間に４００ｐｔって…
これは夢なのでしょうか
読者の方にはいくら感謝してもしたりません
今回は初の戦闘？シーンなので、いつも以上に前後不覚な文章になって
いると思いますが、寛大な心でお許しください

6話　「揺るぎなき瞳」

遂に始まってしまった
相手はおそらく格上、甘く見ても互角といったところだろう
今回も俺はフィールド端で待機なので、実質二対一となれば、そんな相手
との勝負の結果は見えてるのだが…
隣の少女は全く諦めていないようだ

「せいやぁぁぁぁっ！」

薙刀で果敢に突っ込んでいく
だが、今までとは違い、初撃を難なく回避される

「おうおう、勇ましいね～」
「ほいほーいっと」

二撃、三撃と薙刀を横に振るうが、それも空を切る

やはり、分が悪いか
まあここで終われば、これ以上目立たんし一向に構わんのだが

この俺をペアに選んで、優勝を目指そうという精神がもう分からない
この試合も相手が遊びをやめて、二人がかりで川神一子を獲りに来たら、

1分もって終了というのが、甘めの推測だ
そんな至極もっともな予測を立てつつ、視線を川神一子に向ける

―真っ直ぐだった

その瞳は絶望も諦めも不安も、一切の弱さを映してはいなかった
ただ目の前の敵を見据え、その先の勝利を見つめている
自信に、あの毎日積み重ねてきた修行による自信に満ち満ちている
おそらく、学園長に敗北の判定を受けるまで、その目には火が灯っていて
自分の勝利を信じて疑わないだろう

はぁ、なんつー顔してんだか

直後、回避され続けている横薙ぎから、持ち替えて、縦の攻撃に移行する
今までの攻撃がフェイントとなり、速く鋭い攻撃だった
なるほど、どうやらハゲ1人にターゲットを絞るらしい
なかなか、考えた作戦だ

だが…

受け止められた

相手は今までの奴等ではない、その程度でダウンなら苦労しない
技のキレは良かったが、速い分パワーが追いついていないようだ
一手、足りなかったか…

「ふふ、残念。あまり女は殴りたかないが…」
「川神流　蠍撃ち！」
「ガッ！？」

…驚いた
攻撃を受け止められた直後、あろうことか川神一子は得物を手放し、素早
く打撃攻撃へシフトした
まるで受け止められるのを予想していたかのように、というか予想してい
たのだろう
その目は自信に溢れているが、相手の力量はしっかりと測っているらしい
しかも、武器を受け止め、がら空きのボディに今の内臓をえぐるような正
拳突き。

頭を使えるような奴ではないと思ったのだが…
いや、これも実践を積み重ねた努力の結果なのだろう
ともかく、ノーガードにアレはきく。もう一発打ち込めば、ダウンだろう
川神一子も承知しているとばかりに相手が落とした薙刀で追撃を放つ
だが、その体は前に進むのではなく、後ろへ吹き飛ばされた

「ほっほほーい、やらせないよ～♪」

そこには、もう1人の白髪乙女がニコニコと蹴りを放っていた

そう、これはほぼ二対一の勝負だ
どんなに考えて、奇怪な動きで翻弄したとして、圧倒的に手数が足りない
なにせ、こちらは2本、相手は4本なのだから
それに実戦経験といったって、模擬試合のようなものだろう
とすれば、基本的に一対一の形式であることは予想がつく
つまり、3本目、4本目の腕から放たれる攻撃に対処できないのだ

「おお、助かった助かった」
「しっかりしろよぉ、ハゲー」

「ったく、油断大敵だぜ、お嬢さん」
「僕らは二人でチームだよん♪」

そのうえ、ハゲまで首をコキコキと鳴らし、体勢を整えてしまった
飛ばされた少女はフィールドの端で悔しそうに睨み付けていた
これじゃあ勝ち目は薄くなってしまう

…って、なんで俺は勝ち目なんて考えてんだ
川神一子があの二人に勝てるわけがないと分かりきっているのに

はあ、あの真剣な眼差しを見過ぎたか
毒されるのも大概にしないとな
ここで勝たれたら、晴れて決勝進出だ、少なからず目立ってしまう
そうだ、これは負けて当然の試合だ

「じゃ、そろそろいくぞぉ～♪」

突如、フィールド端にいる川神一子を二人がかりで叩きにくる
あー、こりゃ終わったな
そもそもここまで持ったのが奇跡だろう
相手がその気になってしまえば、挟み撃ちでも、同時攻撃でも、幾らでも
手はあったのだ、ただ今まで相手がそれをしなかっただけのこと

「…くっ！」

少女は薙刀を構えるが、もし二人の攻撃をどちらも運良く止められたとし
ても、反動を受けて、場外に出てしまう距離だろう
そんな心配こそ滑稽だ、格上の二人の攻撃を受けきれるわけがない

八方塞、ジエンドだ
流石に努力じゃ覆せなかったか、二対一は…
俺の予想は遥かに超えていたが、ここまでか

だが、その大きく見開いた瞳には相も変わらず、自信の炎が灯っている
ざわつく会場も気にもとめず、ただ前を見ている

はぁ、なんつー顔してんだか

そして、二つの拳は薙刀にかすることなく、突き刺さった

6話　「揺るぎなき瞳」（後書き）

ありがとうございました
えー、感想の方で、1話が短いと言われてしまったのですが
毎日今の長さでも更新と、日があいても長くするのは
どちらがいいのでしょうか？
活動報告も後につくっておくので、コメントか感想で教えてください
ちなみに、自分の勝手な意見だと毎日あげたいと思っております
しかし、読者の方の要望があまりにも強ければ考えさせて頂きます
長くなってすみません
次回に続きます

7話　「守る者、守られる者」（前書き）

はい、話の長さについてですが、皆様がやりやすい方をやっていいよと
言ってくれたり、毎日見たいと言ってくださるので、今の長さでいきます
しかし、余裕があるとき、特に日曜などは2つくらい上げられるように
なるのを目指します、本当にご意見ありがとうございました
これからもよろしくお願いします

7話　「守る者、守られる者」

Ｓｉｄｅ　一子

相手は今までよりもずっと強いのが肌で感じる
大変かもしれないけど、勝つしかないわ
無理矢理ペアにした流川君を守らなきゃ！

だけど、相手はアタシの予想以上に強かった
無闇に二人相手に攻撃を振るってもするりと回避される
かといって、１人に標的を絞ったら、この通り端まで吹っ飛ばされた
相手が逆の端から走ってくる、どうやら二人同時に来るようだ
すぐに体勢を整えようとするが、思ったより蹴りが深くまで入っていた

でも、絶対に負けられない！
アタシが諦めたら、誰の支えにもなれない！

～

アタシは2年生になって、ファミリーの皆とおんなじクラスになって、と
ても嬉しかった

当然、そこには知らない人もいて、そんな中ウメ先生に出欠確認でいきな
り、鞭で叩かれた生徒がいた、「おう」なんて答えたのだ

その生徒の名前は“流川海斗”
無口で無表情、誰に対しても他人相手の京みたい、ううん、それ以上にそ
っけなく、とにかく人と話してるとこを見たことがなかった
そんな彼のことが少しだけ気になった、何故だかは分からない
たまたま起きていた授業などは彼のことを観察していた

そして、気づいた、その瞳に。
あの誰も信用しようとせず、現実に飽き飽きしている気だるい瞳
眼鏡のせいでよく見えなかったが、何度も見てようやく気づいた

その瞳はアタシにはよく見覚えがあった
孤児院にいたとき、親に捨てられたばかりの子たちが一様に持っていたそ
の瞳、人がやってくるのを拒むようなその瞳
そこでアタシは何度も何人もそれを見た、あるいはアタシもそうであった
のかもしれない

これが気になっていた理由だったのだ

アタシはタッちゃんに守られて、川神院に引き取られて、ファミリーの皆
と遊んで過ごして、色々な人達に助けられて、支えられて、楽しい毎日が
ある。今のアタシがいる
だから、今度はアタシが助けて、支えになってあげたかった

実際に話かけてみると、２文字の返答ばかりで流石の無口ぶりだったけど
無視するなんてことは一度もされなかった
絶対に悪い人じゃないと思った、本当は優しいんだと感じた

だけど、表情だけは変わらないままだった

もっと知りたかった、彼のことを
そして知って欲しかった、毎日は楽しいことを

ウメ先生からタッグマッチの話があった
ペアは自由に決めていいようだった
途端にクラスの女の子たちは“流川君とは嫌だ”と言い始めた
ヒソヒソ話のつもりだったんだろうけど、静かなクラス全体にその声は聞
こえていて、気まずい空気が流れた
だけど、流川君はそれを大して気にした様子もなく、ただ現実として、受
け入れていた
そんな横顔を見たアタシはペアに立候補した
これでもっと仲良くなれると思ったから

午後の授業がタッグマッチの準備にあてられた
流川君は大和の話だと、あまり運動が得意でなく、力も強くないという
だから、アタシが守ってあげるといった

時間が余ったから、練習も嫌だろうと思ったアタシはしりとりを提案した
相変わらず、無口だったけど、アタシは見事に遊ばれた

せっかく勝てたのに、悔しくて必死に抗議した

そんなときに流川君が初めて微笑みを浮かべた
無機質でない、今まで見たことのない柔らかい表情だった
それを指摘したら、流川君はばつが悪そうに帰って行っちゃった

嬉しくて胸があったかくなった、手をあてると少しどきどきしていた
修行で走り回ったあとのどきどきも好きだけど、それとは違って、
でも、
何だか心地よかった

〜

目の前で何が起こっているのか分からなかった
二人の拳がアタシの前に立つ流川君に突き刺さっていた
守ってたはずの人に、今アタシは守られていた

別に一瞬でアタシの前に移動したとか、そんな離れ技をしたわけじゃない
見えていた、隅にいた流川君が、相手が攻撃のモーションに入る前に、こ
ちらに向かって歩いてくるのが。
ホントにゆっくりとアタシの方へ近づいてきた

そして、アタシの驚きで大きく開いた瞳を見て、溜息を吐いたかと思うと
何が起こってるのか分からずにざわめく会場も無視して、アタシの前で停

止した
状況が飲みこめずにただ前の流川君の背中を見ることしか出来なかった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

右のあばらと左のわき腹に二つの拳が突き刺さる
てか、この女の方がダメージでかいってどうゆうこっちゃ
だが、俺は声を上げることもなく、その場にとどまる

「あれれ～？」
「おいおい、こいつ攻撃が効いてねえのかよ」

馬鹿か、しっかり痛いっつーに
しかし、あれだ
我ながら馬鹿なことをしたもんだ
放っておけば、試合は終わって、目立つことなく終了したってのに…

本格的に自分が分からなくなってきた
偉い迷惑だよ、人の意志に干渉してくるなんてな
はあ、もうやってしまったものはしょうがない
腹くくって、これからを考えるか

守ったからにはこの勝負、勝たせてもらわねえとな

7話　「守る者、守られる者」（後書き）

ありがとうございました
なんか、前回の終わりに違和感を感じてくれた方は、全てすっきりしたの
ではないでしょうか
いよいよ、主人公の本来の性格が見え隠れし始めると思います
そして、戦いは次回も続きます…ダラダラですね

※活動報告にて、形式についての質問がございます
参考にさせて頂きたいのでご協力お願いします

8話　「力無き戦い」（前書き）

今回ついに激突です
では、散々ひっぱった海斗の戦いをご覧下さい

8話　「力無き戦い」

Ｓｉｄｅ　由紀江

おかしいです、あの方からは絶対に一般人にもあるはずの気が微塵も感じ
とれません
そういう方も私が知らないだけで存在するのかもしれません
ですが、今の問題はそこではありません

その彼は一子さんを守るために二撃を自ら受けました
いくら強い人といえど、攻撃を正面から無抵抗に受けるなんて、恐怖です
し、もちろん無事の保障なんかありません
それこそ、気が０の人が突っ込んだら、その危険はより現実的なものとな
るのは言うまでもありません

それなのに彼は何のためらいもなく、一子さんの前に歩みを進めました
それだけで、彼がとても優しく、仲間思いの人であると分かります
気がなくとも、本当の意味で強い人であると…

私も彼のようになれれば、友達ができるのでしょうか？

ですが、その彼にクラスメイトから歓声の１つも上がらないのは、一体、
何故なのでしょう？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、勝ちにいくと覚悟したわけだが…
こちらから手を出すのは少々危険だ
だが、これで勝負に負けては、何のためにしゃしゃり出たってことになる
ざわつく会場は思考の邪魔なので無視する

如何にして、こいつらを倒そうか
攻撃手段はこの一子しかいないのだが、作戦に他者の力を入れてしまうと
誤算が生じやすい

うむ、あまりダメージが蓄積すると、俺もやばいなので攻撃を多く受ける前に考えてしまわないとなかといって、避けたりしたら、相手を勢いづけるだけだ
相手もいきなり本気の攻撃なんて仕掛けてこない

その油断の隙に活路を見出してやる…

「あれれー、おっかしいな～」
「もう一発くらいやがれ」

また、二発の拳が…

いや、蹴りが飛んできやがった

なに、いきなりスイッチ入れてやがんだ、こいつら
あと三回くらいは拳の流れだろうが、普通は
避けるわけにはいかないので、そのまま受け……る！？

「流川君！」

危ねぇ、

蹴りが見事にヒットした
ハゲが腰に一発と、白髪乙女が首へのハイキックを見舞ってきた

あろうことか女は俺の意識を刈り取ろうとして来やがった
しかも、首で一番筋肉がない守りの薄い部分を正確に。
要するにピンポイントで俺の急所を狙ってきたのだ、加えて結構な威力

俺は誰にも認識されない程度の小さな動きで着弾点をわずかにずらした
攻撃が当たると、激しく脳が揺さぶられたが、無事気絶ポイントは回避す
るのに成功したようだ
それにしたって、首への攻撃だ、めちゃくちゃ痛い

ていうか、攻撃が何段階か飛ばして進化しすぎだろ
階段は一歩一歩を大切に踏みしめて上ってこようよ、お嬢さん

「あれー、これも効いてないのかなー」
「こいつホントに痛覚あんのか？」

まあ、それでも俺は声を上げず、表情も崩すことはない
ていうか、痛がったら、この後ろの少女にもっと心配されそうだ
あくまで、冷静に作戦を考えよう、…白髪乙女に注意しながら

「よーし、んじゃ連撃しちゃうよ～だ♪」

な！？
俺がその声を聞き取った瞬間、拳のラッシュが襲ってきた
無抵抗の体がサンドバッグにされる

しかも、こいつら段々手加減がなくなってきてないか
くそ、少なくともアザだらけなのは確定事項らしい

「おらおら～♪」
「流川君！」

はあ、マジで体中がいてぇ
何で俺がこんなに殴られなきゃいけないんだ
負けちまえば楽になれるじゃねえか

このまま後ろに倒れれば、場外に出て、負けとなり、こんな理不尽な一方

的な暴力から解放されるんだ

そうだ、別に俺が負けたところで何かが終わるわけじゃない
なら、楽になろうじゃねえか

こんな状況、真性のMしか喜ばねえっつーの
悪いが、俺には一方的にハゲと白髪乙女に殴られる趣味はない

こんなムカつくことはもう御免だ

「これでとどめだ！」

大きく伸びるストレートが俺の胸を強打する
俺は今までのように抗いはせず、力に身を任せて後ろに仰け反っていく

まあ、我ながら善戦したと思う
やれる手は全て尽くした

あと、俺に残された出来ることは…

「な！？」
「おろ？」

…この両の手に握った手首をしっかり掴んでることくらいだよな

殴られんのはもうウンザリだってーの
さっさと負けさせてもらうわ

ったく、油断大敵だぜ、お二人さん

「試合終了！流川・川神ペアの勝利」

学園長の判定が静まり返った会場に一際大きく響き渡った

8話　「力無き戦い」（後書き）

ありがとうございました
見事、頭脳戦で海斗が勝利しました（ずるいだけか
この調子で決勝だいじょうぶでしょうか
そんなわけで次回もよろしくお願いします

9話　「近づく距離」（前書き）

皆様、ご意見ありがとうございました
基本、今までのままでいきますが、会話に行間を入れるなど、
多少の変化はあると思います
前回の最後、分かりにくかった方はすみません
では、どうぞ

9話　「近づく距離」

Ｓｉｄｅ　百代

ワン子は来る日も来る日も努力していた

だから、その強さは私も認めているが、あくまでそれは一般の武道家たち
と比べてということだ、上には上がいる

そして、今回の相手は明らかに格上の相手
事実上、二対一の試合だったし、始まる前から結果は見えていた
それでも、ワン子は諦めることなく、果敢に攻め込み、相手の１人に大き
なダメージを与えた
予想より善戦したが、やはりそれまで

すぐに残りの１人に反撃されて、フィールド端まで追い込まれた
よく１人だけで準決勝まで進んだと帰ったら褒めてやろう

そんなことを考えていたら、目の前に信じられない光景があった

あの無気力男がワン子の前に立ち、攻撃を受けた
そいつはいくら攻撃を受けても、全く痛がる様子はなく、最後までワン子
に攻撃を通すことなく、対戦相手を道連れにして、場外負けとなった

気もない人間がまさかあの二人に勝ってしまうなんてな
やり方はどうあれ、なかなか面白い奴だ、流川

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ふぃ～、なんとか勝てたわ
てか、体がまじで痛いわ、まあ骨がイってないだけいいか

「流川君、大丈夫？」

一子が今にも泣きそうな顔で迫ってきた
なんか、こうして見るとワン子と呼ばれているのも頷ける

「ああ」

「でも、流川君のおかげで勝てたわ、ありがとう」

「ん、別に」

実際、一子がフィールドに残っていたから出来た作戦だし、何よりこの試
合で勝ち残っていたのは一子ひとりだけなのだが

まあ、こんな笑顔で感謝してくれてることだし別にいいか
一子には借りもあるし、こんな嬉しそうにしてくれるなら、まあやってよ
かったってとこか

「でも、アタシが守るって言ったのに、結局守られちゃったわ」

「男が女を守るのは当然だ」

「・・・・・・」

口をあんぐりと開けて、一子が沈黙している

やばい、なんかキザなこと言って、ひかれたか

でも、これは建前とかじゃなく、本心なんだが…

え、てことは何?他ならぬ俺自身にひいてるってこと?

これは正直、さっきの試合の傷より痛い

「…した」

「ん?」

「初めて文章を話した!」

「…はい?」

「いつも2文字くらいしか喋ってくれなかったのに」

ああ、分かった

俺が普通に話したことがかなり驚きなのか

まあ、俺もこのまま誰とも話さずに学校生活が終わると思っていたがこいつと二人で話す分には目立つことにはならないだろう

なんか予定が狂わされてるな、見事に

Ｓｉｄｅ　一子

本当に驚いた、私の前に立ったときもそうだけど、あの二人を全く手を出
さずに倒してしまった、そのことがすぐには信じられなかった
でも、じいちゃんの声が響き渡って、その光景が現実であることを実感し
た、本当に勝ったのだ

流川君がアタシの前で相手から一方的にやられてるとき、胸が張り裂けそ
うだった、アタシが追い詰められたことで流川君が犠牲になっているだけど…

何故だか、その守ってくれてる大きな背中を見てると嬉しかった
流川君が攻撃されて悲しいのに、その嬉しさも収まってはくれなかった
アタシが何もできなかったのはそのせいもあるのかも

でも、アタシが守るって約束したのに、守られてしまったのはやっぱり、

悔しいし、情けないし、申し訳ない
そのことを流川君に謝ると、真剣な顔で“女は男が守る”んだって

今まで、“おう”とか、“ああ”しか、話してくれなかったのに、
やっと
会話ができて、ちょっと仲良くなれた気がした
この調子でもっと、毎日を楽しいと思えるようになってほしい

でも、アタシの方が流川君に喜ばされることが多いような…

そして、さっきは嬉しさが先行して、なんともなかったが、後で流
川君の
言葉を思い出して、どきどきしていた

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

次が決勝か、ここまで来てしまった
俺の予想では勝ちあがってくるのはＳ組だろう
ちょっと優勝は流石にまずい、目立つとか最早そういう次元じゃない
やっぱり一応、きいてみるか

「なあ」

「ん、なーに？」

「棄権しｎ…」
「決勝、がんばりましょ」

俺の提案は会議にかけられる前に否決された

まあ、今更か
棄権もそれはそれで目立つし、普通にいって負けるのが無難か
次の相手には多少、警戒も生まれちゃってるだろうし

ああいうのって、不意打ちだからな、一発限りなんだよな
それに相手は決勝に上がってくるほどの実力者
あれ？よく考えるとなんの心配もないんじゃないか

負けても総合2位なわけだし、一子も文句ないだろう

Ｓｉｄｅ　大和

正直、“流川海斗”という男が分からない
人と関係をもっていない奴は俺にしても調べようがない
ただの陰気で孤独な奴だと思っていたので、ワン子とペアにならせるのは
正直、反対だった

しかし、今はますます分からなくなっている
ピンチのワン子を助けただけでなく、試合にも勝利してしまった
しかも、全く手を出さずにだ

今の行動、一部始終を見て、クラスメイトは困惑している

委員長やキャップは警戒を解いて、良い奴かもという認識に改めていると

いう感じだ、逆にそれ以外の人間は今のところ多少印象は変わるものの
根本に
あるクラスでのアイツのイメージを払拭できていないってところか
だが、ワン子は実際に守られた身、ある程度の信頼が芽生えている
と解釈
をして、まず間違いないだろう
相手がそれを狙っているということも考えられなくはない
十分に可能性はあるし、警戒するに越したことはない

今、俺の出来ることは奴の情報をなるべく早く集めて、仲間の安全
を確保
できるようにしておくことだけか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「では、これより最後の決勝戦を開始する」

思っていた通り、Ｓ組の九鬼・忍足ペアが勝ちあがってきた
ていうか、このメイドは少しやばい感じがする
なんつーか、試合への闘気っていうよりも、この冷たい感じは…

「始めぇ！」

最終試合が始まった

9話　「近づく距離」（後書き）

ありがとうございました
やっと、大量の地の文から解放される兆しが
見えてきたのではないでしょうか
そして、フラグは着々と準備します
ちょろいとかは言いっこなしです（笑
次がやっと決勝、のんびりですがよろしくお願いします

１０話　「破られた沈黙」（前書き）

初の１日に２話投稿
これは厳しい、慣れるまではあまり乱発できないですね
９話は新しく作ったのではなく、仮８話を編集で投稿したので
読んでない方はこれを読む前にどうぞ
読んでいる方は続きをどうぞ

１０話　「破られた沈黙」

「まさか、決勝の相手が一子殿とは」

「九鬼クン…」

「うぬぬ、S組の誇りがかかってるとはいえ、心苦しい限りである」

「英雄様、ここは私にお任せください」

「む、なんだあずみ」

「いくら試合とはいえ、英雄様が最愛の方と戦う必要はありません、この
忍足あずみが責任を持って勝利しますので、英雄様は客席でお休みになっ
ていてください」

「ふむ、あずみ、素晴らしい忠誠よ。ならば、我は信頼の元にそうさせて
もらおう、フハハハハハ」

「もったいなきお言葉です、英雄様～」

「・・・・・・」

そういって、メイドがデコバツにアイマスクを渡して、デコバツはフィー

ルドの外に出て行ってしまった

あれ、もう既に相手を1人倒しちゃった？
くそ、負けるつもりだったのに、なんでより有利な状況になってんだ！
…と思ったのも束の間

「はあ、ようやく始められるなあ」

「…！」

いきなり、口調が変わった、いや口調だけじゃない
二重人格ってわけでもなさそうだし、こっちが通常らしいなってことは、デコバツの前では猫をカブってんのか
だから、わざわざ目隠しまで渡して、睡眠を促したと…

やばいなあ、こいつから出てんの殺意じゃん

「お前、あれだけの攻撃を受けて、動けるってことは、ある程度強いって
認識していいんだな」

確実に俺に向けて、言ってるよな
無口キャラだが、強いとかいう誤解は解かないと後々めんどい

「弱者は頑丈じゃないと生きれん」

「はあ、まぁ強そうには見えないわな」

疑っては見たものの、俺の滲み出る弱さオーラの方を信じているようだ
つーか、こいつ女のくせに口わるいなー

「だからって、油断はしないぜ、あんな手に引っかかるなんつーのは御免
だからな」

そういって、小太刀を両手に構える
武器はレプリカだし、斬れることはない
だが、コイツの場合、武器より殺気の方がよっぽど鋭い

「んじゃ、戦闘開始だ」

途端、圧倒的な速さでメイドがこちらに向かってきた
なに、最初から狙いが俺かよ…！

凄まじい量の斬撃がわずか数秒の間に俺の体を襲う
痛みが先ほどの比じゃないが、ある意味これはチャンスか？
ここで倒れておけば、目立つことなく終了だろう

「せいやぁぁぁぁっ！」

そんな思考を割るように一子が薙刀を振るった
メイドはそれをかわし、懐に入って当て身を見舞う

今の動きは完全にただのメイドを凌駕していた
護衛っていうより、こいつはどちらかというと狩る側の人間だ
そんな奴の攻撃をくらった一子は薙刀でなんとか姿勢を保っている

これは圧倒的だな、悔いなく勝負が決まりそうだ

「不意打ちであたいの首がとれると思ったか、小娘」

「くっ…！」

「お前じゃ敵わねえよ、くぐり抜けた修羅場の数がちげぇ」

「それでも諦めないわ」

「はっ、努力だけで天才に勝てるなんて、いつの時代のスポ根漫画だよ。
どこまで努力したって、その人間相応の限度ってものがあんだよ、その器
が相手の大きさに足らなければ、いくら器いっぱいに水を注いだところで
量が覆ることはねえんだよ」

「…は？」

今、コイツは何を言った？
この腐れメイドは何をほざきやがった？

「おい…」

「あぁ？なんだよ、根暗ヤロー」

驚くくらい自分の声が震えていた
言葉から怒りを隠し切ることがまるで出来なかった

無口だの、根暗だの、地味だの、ひ弱だの、無感情だの、そんな設定は1
つ残らず、頭の中から追い出されていた

「お前は何、馬鹿なことを垂れてんだ？」

「え、どうしたの！？流川君」

「なんだなんだぁ、根暗が狂ったか？」

一子が練習しているのは毎朝見かけた
強くなるためにひたむきに努力し続けていた
自分の強さを誇りにしつつも、自分の未熟さも認めていて、まだま

だ強者
には届かないと知っていながら、それに絶望するのではなく、それさえも
糧にして、進み続けていた

その瞳は眩しいほどに真っ直ぐと前を見ていた
そんな鍛錬を多くこなし、自分に人一倍厳しい彼女は、いつも明るく、誰
にでも公平に接した、この俺にもだ
ペアができない嫌われた俺の前でも彼女は同じ笑顔を見せた

どんな困難な状況でも、明るく揺らがないその姿はまさに勇ましかった

「努力じゃ天才には勝てないだと…？」

「おいおい、お前まで熱血理論かます気かよ？勘弁してくれ」

この勇ましい少女は俺を狂わせた
俺と会話をしようとしたし、笑みまで引き出された

なら、徹底的に狂ってやる

「勘違いしてんじゃねえぞ」

「あぁん？」

どうせこのまま目立たないように暮らしたって、この退屈な日々が
永遠に
ループするってのは目に見えてる

どのみち、一度は絶望した人生
どうなろうが知ったことか
ならば、俺は自分の衝動に素直に従うまでだ

「努力が超えられない存在が天才なんかじゃねえ」

「流川君？」

「どんなに高い壁を目の前にしても、諦めずに努力し続けられる奴
のこと
を天才って呼ぶんだよ」

わざわざ、自発的に俺とペアになろうだなんてな
ホントに何で、わざわざ印象を変えてまで、人から避けられるよう
にした
んだか、物好きもいるもんだ

「ははっ、何いうかと思えば、ならその天才はあたいの実力とつり合
ってくれるのか……ねっ！」

俺の顔面に向けて、思い切り放たれたパンチを何もせず受ける

それが俺の覚悟だと自分に言い聞かせるように

これで変装グッズも壊れてしまったわけだ

戦闘に邪魔なウザい前髪をぐしゃぐしゃとかき上げ、地べたに転がった、

もはや本来の役割を果たさないであろう眼鏡も踏み潰す

口の中に広がる鉄の味を吐き出して、言い放つ

「だからよ、お前の相手はこの凡才の俺で十分だ」

さて、じゃあ手始めに俺の後ろでびっくりしてる物好きさんに優勝でも、

プレゼントしますかね

１０話　「破られた沈黙」（後書き）

ありがとうございました
やっと海斗のスイッチが入りましたね、熱いときには熱い
長い地の文とはお別れかな?↑たぶんそんなことないです
というか、あずみはこんなキャラじゃない。一子とのフラグのために
犠牲になっていただきました
次回どんな戦いになるのか、期待しないでお待ちください

11話　「四対二」（前書き）

皆さん、感想くださってありがとうございます
主人公を気に入ってくださった方がいらしたようで、
書き手としては嬉しいかぎりです
では、続きをどうぞ

11話　「四対二」

Ｓｉｄｅ　大和

Ｆ組の応援席は騒然となっていた

「あのイケメンだれよ」

「ていうか、流川君ってあんなに喋るんだ」

「なんか乗り移ったんじゃない？」

クラスの大半はその表情を驚きに彩られてるが、一部の単純な女子たちは
その容姿に騒ぎ立てている

本当にあいつのことが分からない
ただ…

あいつのことを見るワン子の目が若干取り返しがつかなくなっている…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「お前の相手はこの凡才の俺で十分だ」

さて、大見得きったはいいが、どう勝とうか
目立つのは仕方ないにしても、やはり弱く見られていたほうが何かと都合
がいい、相手の油断が俺にとって最高の武器だ
出来れば、手を出さずに片付けたいのだが…
攻撃を見舞うというのは、色々と気が引ける
しかし、さっきの方法は警戒されていて使えない

「なら、せいぜい楽しませてくれよ、凡才」

先ほどより、速い攻撃が一瞬のうちに5発繰り出される
俺はそれを全てかわすことなく、体で受け止めた
ただし、さっきと違うのは微妙に体をひねり、その威力を殺しているあくまで、相手に気づかれないほど微妙にだ
相手には同じように無抵抗で攻撃を受けているようにしか見えないなにせ、殴った感覚はそのままにあるからな
戦い慣れたものほど、あまり攻撃の際に視覚を頼りにしない
己の感覚を研ぎ澄まし、視覚はどちらかというと防御に用いる

「たいそうなことを言っといて、反応もできないのかよ」

いいぞ、もっと油断しろ
やはり、場外に出すのが一番楽か
そう思い、攻撃を受けつつもフィールド端に誘い込んでいく

「おっと、そっちには行かねえぜ」

…見抜かれていたようだ
どんなに油断していても、やはり二度目は無理か

なら、どうするか
一応、準備はあるが、敵があの警戒状態では手数に欠ける

「相手はアタシもいるわ、タァァァァ！」

「くそ、めんどくせぇ」

すぐさま、メイドは振り下ろされる一撃に対応して、素早い小太刀の連撃
で一子をこちらに吹き飛ばしてくる

…ん？
手数足りるじゃねえか
自分がついさっきの試合で考えたことだ、今の手数は四対二
俺は一子の腕を掴み、自分のほうに引き寄せた

「うわ、何!?流川君」

何故、そんなに焦る…
目すら合わせてくれないし
俺からアクションを起こすってことに慣れてないのか?

「今から言うことをよく聞け」

「う、うん」

「俺が合図したら、……れ」

「え、でも…」

「いいから、俺が頑丈なのは分かっただろ?」

「分かったわ」

「おい、あたいはそんなに気が長くねえぞ」

メイドが突っ込んでくるのを、二手に分かれ回避する
一子に難しい作戦は無理だと考えたので、一つだけ単純な指示を出した
これなら、失敗なんてこともないだろう

「フ、そろそろ本気で仕留めてやるよ」

案の定、俺の方に向かってきた
サポートである守りの俺から潰すというのは定石だ
だが…

「敵に背を向けるのは関心しないぜ」

「川神流　大車輪！」

「くっ！？」

薙刀の一撃が真後ろから突如襲う
メイドは多少、不意をつかれたものの、すぐに反転して、攻撃をいなす

「そんな大振りな攻撃じゃあたらねえよ」

「くっ…！」

「はん、雑魚は吹っ飛びやがれ」

「だから、背を向けるのは関心しないって」

「な！？」

メイドは今度こそ完全に不意をつかれた
そりゃそうだ、俺から手を出すことはないと思ってんだからな
回避は不可能とみて、俺からの拳をガードしようと構えるが…

俺は手を出さないんだっつーの
守ろうと前に出された片方の手に手錠をかける

「なんだこれは、アイテムは禁止だろ」

「何言ってんだ、これは俺が正式に申請した武器だ」

学園長はうなずいている
そして、悔しそうにするメイドの前でもう片方の錠を自分の手にかける

「あ、何やってんだ、テメェ」

「これでお前は逃げられない」

「何言ってんだ、近接戦闘なら、片手でもテメェに負ける気はしねえ」

「いや、もうお前の負けは決定だ」

「いくわ！」

後ろでは一子が薙刀を回していた
どうやら、あの技回すほど威力が上がるらしい
先ほどは急だったので少ないモーションだったが、今度は違う

「ふ、さっきはかわしたが、一度見た技なら止めることも容易い」

まあ、威力が上がっているとはいえ、少なからずその可能性もあるだろう。
だけどな…

「川神流　大車輪！」

「何！？」

一子の薙刀は迷わず俺の方に伸びてきた

俺が出した指示はひとつだけ

“合図を出したら、俺を思い切り吹っ飛ばしてくれ”

これならフィールドから若干離れていても、場外に届く
つまり、相手の警戒の外でチェックメイトができる

肺の空気を根こそぎ持っていくような攻撃が俺に当たったちと、キツイが十分な威力だ
刃の峰ではなく、柄でやったのは一子の優しさだろう

頑丈だといっても、多少心配だったか、嫌な役やらせちまった

このメイドはまだまだ力を残してるって感じだったな
まあ、学校のイベントごときで本気は出さないか
それにしても、油断しすぎだってーの
つーことで今回はあの努力少女に優勝をやってくれや

学園長は俺たちが場外に弾き出されたのをしっかりと確認すると、
高らかに
宣言した

「優勝は流川・川神ペア！！」

11話　「四対二」（後書き）

ありがとうございました
勝利したとはいえ、まだまだ主人公には何かありそうです
そして、ワン子は…
次回でタッグマッチ完結？

12話　「パートナー」（前書き）

タッグマッチ編終了です
なんか終始ダラダラしていましたが、
それはこれからも変わりません（断言

それでも構わないという方はこれからもよろしくお願いします

12話　「パートナー」

Ｓｉｄｅ　由紀江

見事…
その一言に尽きます

あの…“流川”さんでしょうか
全く手を出さずにまたもや勝ってしまいました
相手の忍足さんという方も見たところ相当なやり手です
それをあんな奇策で出し抜いてしまうとは

しかも攻撃を受けていたように見えて、全ていなしていました
気こそないですが、あの方は相当に強いのではないでしょうか
それに…

“高い壁を前にしても、努力をし続けられる人が天才”

心に響く言葉です
あの方の人間性が分かる一言でした

私ももっと努力しないと…
あうう、友達１００人できるでしょうか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「さっさと外しやがれ」

「はいはい…」

このメイド、めっちゃイライラしてやがる
そんな罠にはまったのが気にくわねえのか

「おらよ」

「はん！」

メイドは不機嫌を隠す様子もなく去っていった

「流川くーん」

「おう」

「大丈夫だった？」

「平気だ、頑丈だっつったろ」

「うん、良かったわ」

どの口が言うか
多少のことならいいが、今日は流石にダメージを受けすぎた
だが、少しでも弱みを見せると、こいつは罪悪感を感じちまうだろう

これから表彰式だが、あいにく興味はない
優勝を目の前の少女にプレゼントしたかっただけだしな

「おい、一子」

「はう、え、今なんて？」

「は？今なんても何も“おい、一子”としか言ってないが」

「か、一子…！？」

「ん？名前で呼んじゃいけなかったか」

「い、いや、そういうわけじゃないんだけど…いきなりだったから」

「今まで機会がなかっただけで、俺の中では最初から一子だったんだが」

「そ、そうなの…、別にいいんだけどね」

嘘だった
最初はフルネームだったが、おそらくコイツを守ると決めたときから、自
然と一子になっていた気がする

まあ、基本俺は誰でも名前呼びだ
今まで呼ぶ相手がいなかっただけのこと

「あ、そうじゃなくて、一子」

「はう」

「…お前は一子と呼ばれる度に、そう答えるのか」

「いや、なんか慣れてないだけで」

「まあいい、俺は表彰式出ないで帰るから」

「え!?なんで?」

「別に興味がないし、それに勝ったのは一子だからな。俺は最後の二戦以
外は手を出してないし、その二戦も負けてるしな」

そう言って、片手を上げて、颯爽とその場を立ち去った

…はずだった

なんか、思い切り、上げた手を掴まれてる

「勝てたのは、悔しいけど、ほとんど流川君のおかげだわ」

「・・・・・」

「アタシはせいぜいサポートよ、最後の二戦はレベルが違ったし、負けた
って言っても倒したのも流川君でしょ」

なんで、いつも元気なのに、こんな時だけ悲しそうな顔をするんだ
あの自信はどこへやらだな…
仕方ない

「海斗だ」

「え?」

「海斗でいいぞ、俺は名前の方が好きなんだ、最後の二戦は俺がいなくて
も、お前がいなくても勝てなかった、そうだろ?パートナー」

「あ…」

驚いたようにこちらを見つめる顔
その表情はみるみる笑顔に変わっていく

「そうね、海斗」

「ああ」

さっきの憂い顔はどこへやら、今は満面の笑みだった
尻尾でも振るような勢いだ

一子をもじって、ワン子とは言い得て妙だ
本当に周りを安らげる奴だ
マイナスイオンでも出てるのではないだろうか

こういう姿を見ていると、ペットのジロを思い出す
…いや、飼ったことないが

「よし、それじゃあな」

「ちょっと待ちなさい」

流れで帰らせてもらえなかった
ここは俺の巧みな言い訳で切り抜けてやる

「いや、一子、俺は…」

「表彰式に出るんでしょう、パートナー」

完全に墓穴を掘ったと悟った瞬間だった

Ｓｉｄｅ　百代

フフフ、面白い奴だ
やり方は弟のようにズル賢いがそれでも勝利を収めてしまった

それにメイドにやられていたときのあの体捌き
まだまだ何か隠していそうだ

本人はそれを知られたくないようだがな。
気がないことと、何か関係があるのか？

完全に未知の強さではないか

面白い、面白いぞ、“流川海斗”

一度、死合ってみたいものだ

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「では、流川・川神ペアにトロフィーの授与じゃ」

“じゅよじゃ”って、言いにくくないか

…そうでもないか

一子がガチガチになって、トロフィーを受け取る
そして、トロフィーを持って、やり場に困るようにこちらを見つめた

「ああ、やるやる」

「でも…」

「真剣でそんなの家にあっても、かさばるだけだから」

表彰式が終了する頃には日も暮れていた
絡まれる前にさっさと帰るか
そう思って、校門に向かおうとすると

「海斗ーー」

「あ？」

一子に声をかけられた
てっきり、お仲間のもとに戻っていったものだと思ったが

「あ、あのね、その～」

「？」

「け、携帯のアドレスとか、教えてくれたら嬉しいな～、なんて」

めっちゃ夕日に照らされた真っ赤な顔でそんなことを言った

そのくらい、別に構わなかったのだが…

「悪いな」

「あ、いや…」

「あいにく携帯とか持ってねえんだ」

「え！あ、そ、そうなんだ。それなら仕方ないわね、うん」

なんか、顔をうつむかせてしまった

「まあ、もし買ったら、そのときは必ず最初に教えてやる」

「あ…、うん！」

そう言うと、一子は笑った

そんなこんなで色々あったタッグマッチは幕を閉じる

やっと普通の日常が…というわけにはいかないだろう
だが、ある意味それこそ俺が望んでいたもの

“非日常”

さて、これからは少なからず注目されるようになった俺がどれくらい、手
札を隠していけるかだ

だが、今までは少しシビアすぎたか
元々、自由に生きるのが、俺の性分だしな

これから面白くなりそうだ

12話　「パートナー」（後書き）

ありがとうございました
ワン子が見事に…はい
次回からはしばらく日常ストーリーを書いてくと思います
変わらず、ダラダラです。いやむしろ、もっとダラダラかも
次のイベントは何にしましょうかね～

13話　「まゆっち推参」（前書き）

はい、今回からグダグダ日常編
いつまで続くのでしょうか
ゆるーりと進んでいきますので、ゆるーりとお読みになってください
では、どうぞ

１３話　「まゆっち推参」

「ふぁーあ」

昨日は飯食って、よく寝たら、傷が完治してしまった
我が体ながら、なんと逞しいことよ

エイリアンに改造とかされてないよな
それを俺に確かめるすべはない
結局、人間なんて自分の体でさえ、本当に自分のものか分からない
もしかしたら、これは他者の体で記憶を改ざんされているのかも
おーこわ

そんな感じで俺の頭の中には、朝からカオスが広がっていた
うーん、今日も平和です

Ｓｉｄｅ　由紀江

あわわ、どうしましょう
日直で早く来たら、前にあの流川さんがいらっしゃいます

しかも、人気者であろう流川さんが１人で登校中
これは神様が私にチャンスをくださっているのではないでしょうか

『そうだぜ～、まゆっち一発アタックしとけって』

そうですね、松風

流川さんみたいな優しい人と友達になれれば大きな一歩です
き、き、き、緊張しますが、めざせ友達１００人

「黛由紀江、参ります」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

あー、なんか昨日の熱も冷めてみると、今日学校行きたくねえな
後悔はしてないけどさ

なんで、眼鏡踏み潰したりしたかなー
結局、新しいの買ったしさー
うむ、あれだな。その場のノリって恐ろしい

ん！？後ろからの気配
俺は咄嗟に振り向き、襲ってくるであろう武器を止めようとした
だが、そこには

「あわーーーっ」

倒れこんでくる少女が。

俺は状況がよく飲み込めないまま、真剣白刃どりをしようとしていた手を
その少女の肩に添うような形に急遽変更した
そして、なるべく衝撃を与えないようにふわりと受け止める

俺は無事を確認するために腕に抱いた少女を覗き込むと、相手も状況を確
認しようとしたようで、目があった
その刹那、ボンッと音が聞こえそうなくらい顔が赤くなった

「あああ、あのですね、これはあの、こ、転んでしまって、決して悪気
とか、迷惑かけようとか思っていなくてですね、その」

な、なんだ、すごい早口でまくし立てられた

一応、昨日である程度、吹っ切れたとはいえ、初対面の人物には警戒をし
なくちゃいけないと考えていたのだが
この子から滲み出る守ってあげたいオーラはなんだ
思わずペットのジロを…
だから、飼ってないっつーに

「まあ、落ち着け」

ぽん、と軽く頭に手を置く
少女はそれによって、自分の存在する位置を再認識すると…

凄まじい速度で距離をとった
あ、めちゃくちゃ強いぞ、この子

「ど、どうしましょう、松風。いきなり先輩に無礼を」

「おー、落ち着くんだ、まゆっち。ここでチャンスを逃したら、次はいつ
来るかわからねぇ」

「そ、そうですね、ここが踏ん張り時です」

なんか馬のストラップと喋ってるぞ
お人形さん遊びみたいなもんか？

「その子なに？」

「え、はい、松風といいます」

「へえ、松風」

「おー、なんだか、オラの存在がナチュラルに認められてるぜ」

「あの、驚かないんですか？」

「君が松風って言ったら、そいつは松風なんだろ」

「おー、コイツすげぇいい奴じゃん、オラ気に入ったぜ」

「あの、ありがとうございます」

「おう？」

「つーか、まゆっち。オラの紹介より自分の紹介しなくちゃ」

「そ、そうでした、コホン」

咳払いをすると、いきなり怖い顔になった
怖いっていうよりかは、引きつったような

「私、黛由紀江と申します。友達の多い先輩に不躾なお願いかとは思いま
すが、私とお友達になってくださいませんか！」

「は？」

「うぅ、すみません、ごめんなさい、やっぱり」

「いや、そうじゃなくて！」

俺が断ると思ったのか、両目のダムが今にも決壊しそうだ
ホントに小動物みたいだな

この子を見てると、ペットの…
もうええっつーの
違う、天丼やってる場合じゃねーよ

「俺、友達なんて1人もいないけど…」

「え！てっきり、先輩は優しいから、多いものだと、すみません」

「いや、気にしてないし、全然いいんだけど」

「じゃ、じゃあ友達とかはいらないんですか」

わざわざ面識のない俺にこんなことを言い出すなんて、この子は友達があまり出来ないのだろう

容姿は悪いわけじゃないし、さっき感じた強さが原因ってとこか

そして、俺のことを優しいと勘違いする始末

先が思いやられる子だな

今もすごい不安そうな顔で俺の答えを待ってるし

本当にどうしようか

友達ってことは深入りされることも多くなる

それだけは、今でも越えちゃいけないラインだ

俺の過去を知られないためにも…

この子を傷つけたくはない

せめて、相手から引いてもらおう

「俺を優しいと思ってるみたいだけど、それは違うぜ」

「え？」

「それは君が俺の一つの側面をたまたまよく捉えているだけだ」

「・・・・・」

「俺はクラスの中で忌み嫌われているし、誰とも話さない人間だ。俺の席
は避けられて、クラスの中での位置づけは陰気で根暗、消極てｋ…」

「それでも！」

いきなり大きな声で遮られる

「それでも私が見た流川さんは優しかったです！人を思いやる“礼”の心
流川さんのそれは嘘には見えませんでした！私は私が見た流川さんを信じ
ています。流川さんの自己評価がどうであろうと、周りの人がどう思って
いようと、私は流川さんとお友達になりたいんです！！」

「は……」

「あ、ご、ごめんなさい、私つい取り乱してしまって」

真剣で驚いてしまった

話した印象からも挙動からも強く来る子ではないと思っていた
相手の言うことにも付和雷同する子だとも感じた
だから、すぐに引き下がってくれると。

でも、自己紹介のときの声量からは考えられない大声で、俺が言った全て
を否定された、自分の信念を持っていた

駄目だ、こりゃ
ますます傷つけたくないんだが
これじゃ、相手に引き下がらせるのは無理か

…仕方ない

「悪いな」

「あ…、べ、別にいいんです。最初から無茶なお願いをしているのはこち
らの方ですから、流川さんが謝ることなんて」

「そんな他人行儀な奴とは友達になれないよ、由紀江」

「え…」

だから、もう覚悟を決めた

傷つけないことは逃げることではない
ばれないように隠し通せばいいだけのこと。

そんくらいのリスク背負い込んでやらあ
多少のハンデがあったほうが面白いしな
それに…

「分かったか？由紀江」

「はい！よろしくお願いします、海斗さん」

さっきのぎこちない顔はどこへやら。
こんな笑顔を見れるなら、悪い気はしないな

13話　「まゆっち推参」（後書き）

ありがとうございました
今回何が一番難しかったって、松風です、松風
もう今のうちに言っておきますが、あれ、松風いないぞとかいうことに
なったら、それは忘れてるのではなく、書けないのです
そして、照れってどう書けばいいんでしょうね
そんな感じでまゆっちとお友達になりました

１４話　「必然の変化」（前書き）

まだまだ続くよ、日常編
ということで、あのタッグマッチから一日ですね
どうぞです

１４話　「必然の変化」

よし、状況を整理しようか
大体予想はしていたし、それなりに覚悟もしてきたけどよ…

「ねえ、流川君、眼鏡とってよー」

「おい、お前川神さんに気があるんじゃねーだろうな」

「あの手錠って、どこで買ったの？ハンズ？」

「君にはＭの素質がある我が殴られ部に来ないか」

「てか、ホントに昨日の怪我はだいじょぶなの？」

「はーい、流川の真似しまーす、“努力し続けんのが天才なんだよ”」

「コロッケ食べる？」

「お前、やっぱ見た目どおりずるいよなー、あの勝ち方はねえわ」

「なんで新しい眼鏡なんて買っちゃうのー、無い方が絶対いいって」

「流川って、日本語しゃべれたんだなー」

これは流石にねえだろうが！！

なんだ、こいつら
本当に昨日まで同じクラスに在籍していた奴らか？

だから、嫌だったんだよ、目立つのは
途端に馴れ馴れしくしやがる
今まで、厄介者として、邪険に扱ってきやがったくせに

「お前ら、うっとうしいんだよ、散りやがれ。コロッケはもらう」

サクサクのコロッケをもらって、しっしと追い払う
うむ、話せるようになったのもでかいな
口撃が出来るようになった、一応収穫か

クラスメイトは“なんだよ”だの、“やっぱ変わってねえじゃん”だの、
果ては舌打ちまでする始末だった

やはり、昨日の俺を見て、多少話しかけ易いと思ったが、根本での評価は
そう簡単には変わっていないんだな
結局、俺の立ち位置は無口な陰気ヤローから、話はするがとっつき辛い面
倒くさいヤローになっただけだ

これは助かった、俺だって誰彼構わずに仲良くするのは御免だ

しかも、こいつらは好意なんかじゃなくて、単なる好奇心で動いている

別にこいつらを最低だと責めはしない
人間誰しもこんなもんだし、ある意味人間らしい

俺にとっちゃ、一子や由紀江の方がよっぽどイレギュラーだ
あんな簡単に意志をねじ曲げられちまうんだもんな

「おはよー、海斗」

「ああ、おはよう」

噂をすれば影とは、よく言ったもので、一子が登校してきた

「あれ？眼鏡かけてる」

「ああ、昨日壊しちまったから、新しく買った」

「そうなんだ…」

「ん？どうかしたか」

「いや、ただ眼鏡かけてない方が海斗らしいなーと思って」

「・・・・・・」

なんで、こいつはホントに人の決定を曲げるのだろうか
俺は眼鏡を外して、窓の外に放り投げた
あばよ、特価１６８０円の二代目
先代の後を追ってこい

「え、いいの、高かったんじゃ…」

「いやいい、どうせ勝ち取ったものだし」

「勝ち取った？」

「気にすんな」

まさか、露天商と賭け勝負して、強奪したとは言うまい

Ｓｉｄｅ　大和

「どう思う？」

俺は岳人とモロに些かの希望をたくして、状況を問うてみる

「どう思うも何も完全にアレだろ」

「ていうか、アレなのは、大和が一番よく分かってるでしょ」

「だよなー」

最早、今となっては、他の可能性を探ることは現実逃避なのかもしれない
そう、昨日の秘密基地で恐れていたことはほぼ確定事項となった

～

「ワン子、優勝おめでとう」

「よくやったな、ワン子」

「すごかったよ、おめでとう」

基地には俺、岳人、モロが集まって、ワン子の祝勝会を開いている
色々驚くことがあったが、とりあえずはワン子を祝ってやろうということ
になった
何せ、これでワン子と流川のペアも解消なのだから

「みんな、ありがとう。でも、今日の勝利は私の手柄って言うより、海斗
の力だわ、悔しいけどね」

「ブッ」

「うわ、汚っ」

俺は飲み物こそ吐き出さなかったが、その表情は驚きを隠せていなかった
と思う
それは素直に飲み物を吐き出すという形で表した岳人も、つい反射的にツ
ッコミをしたモロにしても、同じことだろう

「ワン子、今“海斗”って、言わなかったか」

「言ったわよ、流川海斗だもん、おかしくないわよ」

「いや、そうじゃなくてだな」

「なんで名前で呼んでるのさ」

「だって、海斗がそう呼んでいいって…」

ニヘヘと表情を崩す
俺たちは顔を見合わせた

「でも、そういうのって、親密な関係の間で行われるものだろ」

「親密な関係…」

言葉は尻すぼみになっていき、へにゃりと紅潮した顔が緩む

「おい…」

「待て岳人、何も言うな」

「完全にそうだね」

……

「それでね“男が女を守るのは当然だ”って言われてね…」

この後も延々とワン子の自慢話が続いたが、ワン子があまりにも嬉しそうに
話しているので、誰も中断できないでいた
俺たちは精神的な疲労困憊の中で同じことを考えていただろう
“真剣で恋している”と

～

「はあ、どうしようもないよな」

俺に続いて、二人の口からも溜息が漏れる

あいつは真っ直ぐな奴だから
もう何を言っても無駄だろう

今だって流川と話しているだけで、花が咲いたような笑顔を浮かべていた

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「おいそろそろ、教師が来るぞ。席戻っとけ」

「分かったわ、またね」

そう言って、一子は自分の席に戻っていく

俺の日常は間違いなく変わった
それが良いことか悪いこと、どちらに転がるかは分からない
全ては自分しだいだ

これからは衝動のままに…

障害は叩き潰してやるよ

節度は守ろう、うん

１４話　「必然の変化」（後書き）

ありがとうございます
はい、もうなんか完全にワン子があれですね
それを見るファミリー男性陣…
あの立場には立ちたくないです（笑
こんな感じでまだまだダラダラいきます

１５話　「恋と食事と友達と　前編」（前書き）

今回なんと前後編に分かれてしまいました
日常編でこうなるとは…
なので、若干短いですが、どうぞ

15話　「恋と食事と友達と　前編」

朝こそ大変だったが、今は静かなもんだ
露骨に俺の机を迂回してくような奴は流石にいなくなったが、基本は昨日
までと何も変わっていない
休み時間には本を読んでいるし、わざわざ机に寄ってきて話しかけてくる
輩もいない

こんな空間もいいかもな
今までは嫌悪がこもった視線なんて、慣れていて、いちいち気にも留めて
いなかったが、ないならないで案外気持ちの良いものだ
俺って、意外に人間的なところがまだあるのかもな…

ははは、俺が人間的なんて悪い冗談だ

んー、本の進みも速い
印象アップ様々だな

おっと、集中してたら、もう昼か
そう思って、再び本の続きに目を戻すと、そこに影が落ちた

「か～いとっ」

その正体を確かめるべく、顔を上げる

いや、そう俺を呼ぶ奴なんて1人しかいないんだが

「なんだ、一子」

「一緒に学食いきましょ」

「あー、悪い、俺、金持ってないんだわ」

「え、じゃあお弁当なの？」

「いんや」

「え！？じゃあ、お昼ご飯どうするのよ」

「どうするも何も、食わないが」

「うぅぅ…」

俺がその旨を説明すると、一子は目を伏せて、うなり始めた

はあ、まったくこいつは1人で飯を食うのが、未だに寂しいとか抜かしや
がるのか？そうなのか？そのくらい独り立ちするべきだろ

「俺は食わないが、学食に着いて行ってやるくらいなら構わんぞ」

「え？」

「そこで読書しても、変わらないからな」

なのに、こんなことを言ってしまう辺り、俺も大概甘いんだろう

ホントに一喜一憂を体全体で表すから、犬みたいだ
こんな小動物系の仕草で懇願されたら、断れる奴はそういないだろう
ましてや、動物好きの奴なんかには効果覿面だな。ん?それって俺かお得なステータス持ってんなー、まったく

「ありがと、海斗」

「いいってことよ」

「じゃ、行きましょ」

一子に後ろから押されて、食堂へ向かった

Ｓｉｄｅ　大和

「大和ぉー」

「岳人、気持ちは察するが落ち着け」

そうだ、ワン子は昼飯はよく岳人と一緒にとっていた
それが、今日になった途端、これだ

それだけなら、まだよかったのかもしれない
ワン子が去り際に放った一言が岳人の心臓に深々と突き刺さったらしい

“今までありがとね、ガクト”

硬直する岳人に俺とモロは何も声をかけることが出来なかった
哀愁漂うＢＧＭが空で聞こえてきそうだ

なんか、嫁いで親元を離れていく娘ってこんな感じなのかな
見事なハートブレイクを決めていった

恋する娘は恐ろしい

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

食堂というのは初めて来たが、案外綺麗なもんだ
まあ、食事処が不衛生ってのもおかしな話か

「本当に何も食べないの？お金なら貸すわよ」

「いや、返せる保障がないからな」

「なんだったら、別にご馳走してあげるわよ」

「いや、いい。借りはできれば、作りたくない」

「借りなんて、気にしなくていいのに…」

「俺は一子とは対等でいたいんだよ」

「え…！あ、うん…」

「ん？」

「あ、アタシ、食券買ってくるわ」

そう言い残して、一子は逃げるように去っていった
どうしたっていうんだ

Ｓｉｄｅ　一子

火照る顔を抑えながら、券売機に並ぶ

さっきの海斗の言葉が頭の中で反響する
それはどんな他の音よりも心地よかったけど、同じくらいに恥ずかしさで胸
が締め付けられた

海斗と一緒にいるといつもそうだわ

今日だって、お昼に誘うだけなのにすごく勇気をふりしぼった
ガクトを誘うときは一緒に食べたいから誘う、ただそれだけだった

海斗だって、理由はかわらないはずなのに、どきどきした
苦しいんだけど、満たされた感じになる

これが何かは分からない
ううん、今までは知らなかっただけ

確証も根拠もそんなもの何もない
経験だってないから、答え合わせもできない
でも、自信をもって断言できる、今のアタシなら
この気持ちが“恋”っていうんだって

―アタシは真剣で海斗に恋をしているんだって

認めてしまうと体がすっと軽くなった気がした
さっきはコントロールできなくて、強張っていた顔も、自然と笑顔になる
顔の火照りもとれると、早く海斗のところに戻りたいと思った

これもアタシの素直な気持ち…

深く考えるとまた顔が熱くなっちゃいそうだったから、アタシは順番を待
ちながら、何を食べるかを決めとくことにした

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一子は食券を買いに行ってしまった
仕方ない、本でも読んでるか

「あの…」

「？」

誰かに呼ばれた気がした
そう思い、正面に視線を向ける

15話　「恋と食事と友達と　前編」（後書き）

ありがとうございました
ワン子が自覚してしまいました、はい
まずは一人目ですね
今回は最後がぶつ切りとなっていますが、明日この続きから投稿するので、お願いします

１６話　「恋と食事と友達と　後編」（前書き）

前回の続きです
というか、昨日ですね
忘れてしまった方は前回の最後からどうぞ
いきなり、始まります

16話　「恋と食事と友達と　後編」

「あ、やはり海斗さんでした」

「おー、由紀江か」

「はう」

「はう、って…」

「オイオイ、察してやれよー、まゆっちは友達すらいなかったんだぜ、ましてや、名前呼ばれることなんて慣れてないっていう次元じゃねえよー」

「でもま、これから嫌でも慣れなきゃな、由紀江」

「うぅ、はい」

「由紀江もここにいるってことは、学食か」

「はい、たまには学校のご飯も食べようと思いまして。“も”ってことは
海斗さんもここでお昼ですか？」

「いーや」

「え、じゃあお弁当なんですか？」

「いや、金がなくてな、昼は抜いてる」

「そ、それは…あれ、では何故ここに？」

「あー、それはクラスメイトの付き添いだ」

「そ、そうなんですか。あの、ご一緒してもよろしいですか」

「ああ、いいぞ」

由紀江が俺の前の席に腰を下ろす
一子もこのくらいでどうこう言う奴でもないだろう

「海斗さん、実はご報告がありまして」

「お、なんだ？」

「私、クラスの子とお友達になれました」

「へぇ、やったな」

「はい、伊予ちゃんって言うんですけど、頑張って話しかけてみたら、お
友達になってもらえたんです、これも海斗さんのおかげです」

「いや、そこに俺は関係ないだろ」

「いえ、海斗さんが私とお友達になってくれたので、勇気が出せた

んです
海斗さんが優しくしてくれたから」

「由紀江がそう思ってくれるのは嬉しいけど、本当に俺なんて優しくもな
んともないぜ、数歩でも歩けば、俺より優しい人なんてすぐ見つかる」

「私の中では海斗さんが一番です」

まあ、困った
思い込みっていうのは怖い
どう間違ったら、俺を優しいなんて思うのだろうか
俺は…

「え？まゆっち？」

「あ、一子さん」

どうやら一子が戻ってきたようだ
それにしても、これは知り合いか？

「なんで、まゆっちがいるの？」

「あ、私は海斗さんに許可を頂きまして…」

「“海斗さん”！？」

「ひ！」

いきなり一子が大きな声を出した
由紀江もびっくりしちゃってるし

でも、これは知り合いってことで、間違いなさそうだな

「2人はどういう関係なんだ？」

「あ、私は一子さんたちの風間ファミリーに入れてもらって」

風間ファミリー？
え、なに、ファミリーって、マフィアかなんかか
そんな危ないとこに所属してんの？
それとも何、欽ちゃんファミリー的なとこなの
フレンドリーって解釈でオーケー？

「風間さんという方がリーダーの遊びグループのようなものです」

俺が悩みの狭間に陥っているのを、表情で読み取ってくれたのか、
由紀江
が補足説明をしてくれる

うん、ええ子や

というか、由紀江は友達いたんじゃねえか
まあ、でも仲良しグループに入っていくと、なかなか馴染めなかったり、
するからな
一編に多く友達が出来るといえば、聞こえはいいが、実際問題、1人の人
と親密になる難易度は普通より高いだろう
それにあの性格じゃただでさえ、入っていけそうにないもんな

「ま、待って、海斗。それは今どうでもいいわ」

いや、どうでもよくはないだろ

てか、今まで黙ってたと思ったら、いきなり何だ
ちょっと過呼吸じゃないか

「なんで、まゆっちは海斗さんだなんて、親しげに呼んでいるの」

「あー、それは今日の朝、由紀江が」

「“由紀江”！？」

もうええっつーねん

「か、一子さん、それはですね、海斗さんが今日の朝、お友達になってくださいまして…」

「え、友達？」

「はい、それで一緒に座るのを、お願いしたんですが、迷惑でしょうか」

「い、いや、そんなことはないわ、そう、友達ね。…ふぅ」

なんだか、よく分からないが解決したらしい

そして、俺の席の隣に座り、食事を始めた

由紀江はそば、ワン子はおそらく定食のようなものを食べていた

「海斗さんは本当に食べないんですか」

「ああ」

「でも、お腹すくんじゃない」

「夜に目一杯食ってるから大丈夫だ」

「え、もしかして海斗さんは毎日そうなんですか？」

「そうだが？」

「そ、そうなんですか……」

「それでもやっぱり、お昼は食べた方がいいわよ。ほら、アタシのおしん
こあげるわよ」

「いや、これお前、好きだから残しといたんだろ。食えって」

「ア、アタシ、実は漬物苦手なのよね」

なら、そんなに涙目になんなっつーの
好物を人にあげるなんて、よく分からんやっちゃな
まあ、断っても永遠と言ってきそうだし
ありがたくもらうか

「じゃあ、もらうわ。あー」

「え！！」

なんか顔を真っ赤にして、驚いている
一体どうしたって、言うんだ
俺の後ろに面白い奴でもいんのか
俺もかなり見たい

いい加減、口開けてんのも疲れてきたんだが

「え、海斗さん！？」

「おい、一子くれるなら、早くくれ」

「あ、わわわ、分かったわ」

しかし、一子は漬物を見たまま固まっている
ったく、くれるって言ったしな

「もう、もらうぞ」

「あ…」

一子の手から箸を頂戴して、漬物を口に放り込んだ

うん、美味い。
空腹は最高のスパイスというが、人からもらったというのも結構なスパイ
スだな、とか思ったりしてみる

「むむむ…」

何をそんなに不機嫌な顔をしている

「サンキュ、ほら箸返すわ」

「え、お箸…」

また、みるみる顔が赤くなっていく

さっきから、よく赤くなったり、戻ったり…

もう3分経ってしまったのか、そりゃ光の国に帰りたくなるわ

「かかか、間接k……」

「海斗さんはお昼は食べない……」

色々騒がしかったが、楽しい食事だった

なんか呟いてる2人に一言ことわって、俺は食堂を後にした

・・・・・・・

「おい、流川海斗だな」

…ほーんと、楽しい食事だったなあ

16話　「恋と食事と友達と　後編」（後書き）

ありがとうございました
いやー、さすがの鈍感ぶり
物もらうときに口開ける人なんているんでしょうか、いないです。
そして、何やら不穏な空気が…

17話　「人間万事塞翁が馬」（前書き）

今までのなかで、一番長くなってしまいました
いやー、きりのいいとこまで進んでいたら、大幅オーバーです
ちなみに一行全部・・・・・みたいなのは場面転換です
これからもちょいちょい使うと思いますので、よろしくお願いします

17話　「人間万事塞翁が馬」

えー、この世には“塞翁が馬”という言葉がある
馬が逃げたり、足を怪我したり、うんたらかんたらのアレだ
良いことがあったら、悪いことがあると。

でも、そんなことないと言う人が大半だろう
悪いことばっかだと。

それは悪いことばっか覚えてるからだ
良いことも人は勿論覚えているが、何故か悪いことの記憶の方が色濃いな
んてことはよくあることで、結果、そんな風に思ってしまうのだ
人間っていうのはつくづく不便にできている

いや、そんなことはどうでもいいんだ
俺はさっきまで、楽しい時間を過ごしていた
久しぶりの人との食事だった

まあ、結局俺が何を言いたいかというと…

「お前が流川海斗だな」

今、俺には不幸の順番がまわってきたらしい

・・・・・・・・・・・・・・

目の前に女が立っている
見たところ先輩だとか、それって制服かとかはどうでもいい
こいつ、かなりデカイ気を持ってやがる

「俺はあんたのこと、知らないんだが」

「ほう、先輩にその口の利きかたとは、それに私のことを知らないと」

「なんだ、自分が有名人だとでも言うつもりか」

「フフフ…」

はあ、よく分からん

何故、俺に話しかけてきたのか
何故、俺の名前を知っていたのか
何故、そこで不敵に笑うのか

分からないことだらけだが、それでも分かることもある
こいつには関わらない方が吉ってことだ

俺はそのまま横を素通りする

次の瞬間、俺は思わず、頭を左にずらす

「ほう、今のをかわすことが出来るのか」

俺の頭があった位置に拳があった
というか、とっさのことだったので、回避行動をとってしまった
失敗したな

「弱い奴は、守りと避けが出来ないと生きていけねえんだよ」

そう言い訳をしておく

「なら、あのメイドとの戦いで見せた微動の回避はどう説明する」

ばれてたか

いくら、小さい動きとはいえ、攻撃の威力を受け流す動作だ
攻撃している相手に悟られないように工夫することはできるが、流石に客
席全方向となると、つわものには見切られてしまうだろう

「なんだそれ、もしそう見えたんなら、体が勝手に相手から逃げようとし

てたんだろ、何回殴られたか分かったもんじゃないからな」

いわゆるオート回避って奴だ
本当にそんなの実装してたら、ヌルゲーだな

「お前、何故隠している」

こいつ、人の話きいてんのか…

何故かだって?そんなの決まっている
もうあんな退屈は嫌だからだ

「本当に疑り深いな、そんなに俺が強そうに見えるか?」

「いや、見えない。というか、気も感じられないしな。だからこそ、その
弱いお前が、強敵を打ち破ったからこそ興味がある」

「あんな勝負は…」

「汚いと言ってしまえばそれまでだ。だが、それでもお前は勝利した。そ
れに決勝の相手は汚い手を使ったって、勝てるかどうかの相手だった」

うむ、困った
もう目立つことに関しては、ある程度吹っ切れたとこがあったが、
戦闘が
できると思われるのはなー

「まあ、勘ぐるのはいいが、ガッカリするのが目に見えてるぜ」

なので、もうこれ以上の否定はやめておいた
適当に一言を残し、その場所から去った

今度は拳は飛んでこなかった
代わりに後ろからは薄ら寒い笑い声が聞こえていた

・・・・・・・・・

ふふふ、この世には“塞翁が馬”という言葉がある
立派な馬が来たり、戦争に行かなくて済んだり、うんたらかんたらのアレだ
悪いことがあったら、良いことがあると。

でも、そんなことないという人が大半だろう
悪いことばっかだと。

それは悪いことのダメージが大きいからだ

良いことがあっても、その後の悪いことというのは結構堪える
逆に悪いことがあったら、後に良いことがあっても、尾をひいて、
素直に
喜べないなんてのはよくあることで、結果、そんな風に感じてしまう
人間っていうのはつくづく面倒なもんだ

いや、そんなことはどうでもいいんだ
俺はさっき、変な女に捕まって、問い詰められた
正直、色々な意味で危険だった

まあ、結局俺が何を言いたいかというと…

「ありがとうございましたー、またどうぞー」

現在、俺は幸せの真っ只中らしい

「僥倖、僥倖」

見慣れない屋台があったので、ためしに寄ってみた
クレープかなんかだろうと、結論づけていたが、嬉しい誤算だった

その屋台は珍しく、動物ビスケットなるものを売っていた
なんか沢山の動物の形を模したビスケットが袋詰めになっている
思わず、2袋も買ってしまった
その片方は左ポケットに突っ込み、残りの袋のリボンを解く
そして、羊を口に放り込む

「うむ、美味い」

動物の種類ごとに1つずつ残しておこうかなどと考えつつ、歩いていると
前方にコンビニが見えてきた

ちょうどいい、今日の晩飯でも買っておくか
そう思い、歩を進めると人の集団が視界に入った

はあ、またか
場所はコンビニの入り口の真正面
集まっているのは、町の不良たち
いわゆる、たむろっているというやつだ

今日は機嫌が良いからな
いつも通り、相手をしてやろう

ていうか、そんなとこに突っ立ってられると通れねえんだよ
考えりゃ分かるだろうが
いつもは空気読んで、もうちょい隅の方に居座ってんのによ
なんで今日は入り口に向かって立ってんだよ
どうした?遅れてきた反抗期か

俺はビスケットを片手に不良の1人の肩をちょいちょいとつつく

「あ?なんだ、てめぇ」

「そこにいると、通れないんだよ。邪魔だ、どけ」

「お前、えらいデカイ態度とってんなあ」

「なんで逆に、お前らに下手にでなきゃいけないんだ」

「てめぇ、戦力差わかってんのか？」

「５対１ってとこだろ」

目に見える形ではな
そう心の中で付け足しておく

「ほう、数が数えられねぇ馬鹿かと思ったが、戦力差が分かったうえで突
っこんでくるような大馬鹿だとは思わなかっ……」

ドサッと音を立てて、不良が崩れ落ちる
首に手刀を当てただけでこれだ
人間ってのはこんなにも脆い

「野郎、てめぇ！」

今度は俺に明確な敵意をもって、４人が次々と飛び掛ってくる

それを俺は受け流し、確実に1人ずつ手刀を決めていく

そして、わずか数秒後…
周りには意識を刈り取られた不良が5人地面に倒れ伏していた

終わった終わった
いい運動になったとコンビニに足を向けようとすると、動けなくなった
いや、倒れている不良が足を掴んできたとか、そんな胸熱展開ではない

そこには少女がいた
ああ、だから、こいつらコンビニの入り口になんか向かってたわけだ
視線の先にいたのはこの少女ってことか

いや、今までも絡まれている少女や女性を助けることがなかったわけじゃ
ない
むしろ、そんなケースは多いくらいだ

今、話し合うべき論点はそこではない

問題なのは、少女が川神学園の制服を着ているということだ
見たところ、一年生だろうか

やばい、口止めしないと
そう思い、声をかけようとしたら、相手が先に口を開いた

「あ…あ…あり……」

声が震えている
それもそうだろう
こんな少女が男5人に囲まれたのだ
怖くないはずがない

そんな子に俺は口止めだなんて…
自分のことしか考えてないのか
大体、そんなもの言うなというほうが怪しいだろう
俺は口止めをやめて、左ポケットに手を突っ込んだ

「ほら、これやるから、食え」

そう言い、動物ビスケットを渡す
ちょっと相手の顔に笑みが見えた

「じゃあな」

「あ…」

そして、その場を去った
晩飯を買いそびれたが仕方ないだろう

Ｓｉｄｅ　伊予

野球雑誌を立ち読みしてたら、すっかり日が暮れちゃって、帰ろうと思っ
たら、柄の悪い人たちに囲まれた

いきなりのことで驚いて、声もあげられなかった

そんな硬直する私を助けてくれた男の人
一瞬の出来事だったけど、不良を全員倒しちゃった

…確か、名前は流川先輩
タッグマッチで優勝したちょっとした有名人
あのときは全然そんな素振りは見せなかったのに、こんなに強かったんだ

私はすぐにお礼を言おうとした
だけど、声が震えて、上手く言葉にならなかった

そんな私を見て、動物のビスケットをくれた
微笑んでそんな可愛らしいものを出す先輩がさっきの強い先輩と違いすぎ
てて、ちょっと面白かった

そしたら、くれるだけくれて、何も言わずに行っちゃった
本当に何を考えているんだろう

「優しいな…」

ビスケットを一口かじった
とてもとても甘い味がした

17話　「人間万事塞翁が馬」（後書き）

ありがとうございます
正直、絡まれている子は誰でも良かったんですがね
とりあえず、武力を持っていない伊予ちゃんで
学校以外の素の海斗はこんな感じですかね
そして、日常編はいつまで続くのか…イベントどうしよう

18話　「ヒーローの噂」（前書き）

前回はある意味、新しい一面が見えたと思いますが
今回はちょっとした変化が…

18話　「ヒーローの噂」

「ねえ、まゆっち」

「なんですか、伊予ちゃん」

「えっとさ、昨日ね…」

「え?なに、何の話してんの?」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はあ、遅刻した、完璧に

まあ、なんで平日の朝っぱらから迷子なんていているかね

かといって、放っておくのは無理だった

この年で独りなのは、不安だろう

そうだ、独りはな…

そんなこんなで遅れてしまった

とはいっても、さっきのチャイムからすると、一時限目がさっき終わった

というところだろうか

そして、２－Ｆの前に行くと、何人かの生徒が入り口から中を覗き込んで
いた、見たことない顔だな
まあ、でも通り道にいるわけだし…

「ちょっと通してくれるか」

仕方がないので、そう断る
すると、その子たちはこちらを振り向き、俺の顔を見るなり、びっくりし
たような顔をして、一目散に逃げ出してしまった

「あれが、噂の流川先輩じゃない？」

「そうだよ、あのタッグマッチのときの人だもん」

「顔もかっこよくなかった？」

離れたところで何か話しているようだが、聞こえないし興味もないなんか、俺をちらちら見てくるので、気にならないと言ったら、嘘になる

「あれ、なんで一年生がこんなとこにいんだ？」

そんな声が耳に入った
なるほど、見たことないはずだ

気持ちを切り替えて、教室に入る

ん、若干クラスがざわついたのは気のせいか？
別にあれから好かれるような真似こそしていないが、特別嫌われるような
こともしていないと思ったのだが…

というか、視線を感じる
誰だと思い、そちらに目を向けると、あろうことか一子がすごい形相で俺
のことを睨んでいた
え？俺まじで何かしたか

疑問に思いつつも自分の席につく
そして、いつものように机に常備されている本でも取り出そうとしたとき
違和感を感じた
明らかに本の感触ではないソレを取り出してみた

…これは手紙？

これはあれか
都市伝説であると思っていたが、本当にあるんだな
不幸の手紙…

いや、そりゃ恨みを買う覚えは腐るほどあるが、こいつの餌食になろうと

は、思いもしなかったな
これって、やっぱりコピー機とか使ったらノーカンなんだろうか
カーボン紙とかは意外にセーフだったりすんじゃねえか

いや、待て
誰が従来のタイプだと同じだと決め付けた
もしかしたら、同じ文面ではなく、一語ずつ加えていきなさいという指令
が付加されているかもしれない
そしたら、後になるにつれて、労力は増えていくじゃねえか
やられたぜ…

うむ、随分と可愛らしい不幸の手紙だ
水色の封筒にハートのシールで止めてある
外見と中身の落差を激しくすることでダメージをより確実にしようという
魂胆か、今時のは進化しているな

封筒を開ける前に机の上に落としてみる
金属的な音はせず、パサッという軽い音だけが聞こえた
紛れもなく普通の紙だ
刃物の類は仕掛けられていないらしい

確認したところで開封し、手紙を読む

“流川先輩をタッグマッチのときに見て、とても惹かれました。
守りながら戦う姿はとても素敵でした。
また先輩がイベントに出るようなことがあれば、
絶対見に行きます。
かっこいい先輩の姿を期待しています。

また、お手紙出させてください。”

……は？

あれ、これって宛て先間違えてないか

いや、俺の名前書いてあんだけども。

これって、いわゆるファンレターっていうやつだよな

わけが分かんなくなってきた

俺なんて明らかにファンレターもらう奴じゃないだろ

しかもいきなり…

ん？もしかして、昨日のがバレたのか

いや、だが、たとえそうだとしても、俺が倒したなんてことにはならないか

大方、体を張って、守ったとか、浮かぶのはそのビジョンだろう

あの子の信用性は分からんが、その話は非現実的すぎる

深く考えるのはよそう

お！

ふと、手紙の下の方に目をやると、便箋に動物の猫がプリントされていた

こんなのがあんのか、いいな～

猫を見て、和みつつ、自然と笑顔になった

Ｓｉｄｅ　一子

今日の朝、登校すると、一年生の女の子が海斗宛に手紙を持ってきたよう

だった
なんか、気に入らないわ

海斗は結局遅刻してきて、アタシはつい睨みつけてしまった
そして、海斗が机の中の手紙を見つけて、読み始めた

今は手紙を眺めて、なんか笑っている
そんなに下級生からの手紙が嬉しいのかしら

なんか、海斗の笑顔を見てるのに、いらいらしてきた
いつもは海斗が笑顔だと嬉しいはずなのに

なんで、アタシばっかり振り回されるんだろう
よし、決めた！
今日はもう相手にしてあげないことにしよう

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　大和

「なんで、あんな奴がもてるんだ…」

ガクトの悲痛な叫びが聞こえてくる
いくら年下には興味がないガクトでも、野郎が女の子にもてているのは、

どんな状況であろうと、気に食わないようだ

そもそも、ことの始まりは今日の朝
いきなり見た目は可愛い1年生がやってきた
その手には手紙を持っており、明らかに飢えた男子たちの目は光っていた
そして、1人の男が突入していったが、返された言葉は

“すみません、流川海斗先輩の席ってどこですか?”

期待していた男子が一掃された
その1年生が頬を染めて、聞くものだから、男子たちは戦闘不能となった
まさに撃沈である

「あいつがなんで手紙なんてもらえるんだよ」

「いや、それがまゆっちに聞いた話だとな、流川は1年生の間じゃ、結構
人気があるらしいぞ」

「は!?」

まあ、言われてみればおかしくはない
容姿は普通に良いし、何よりそれまでの流川を知らない1年生にとっては
あのタッグマッチでワン子のために戦う姿こそが第一印象なのだ
条件は十分だろう

そして、今日の朝から1年生の間で急速に広まっている噂
“流川先輩が不良から1年の女子を救ったらしい”
それがきっかけとなったのだろう
タッグマッチで興味を持っていた女の子たちが、教室を見に来たり、手紙
を出したりという行動に出たわけだ
ワン子は前途多難だな…
あと、まゆっちは大丈夫なのだろうか
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
ふぁーあ、なんか驚きもあったが、ぼーっとしてたら、昼休みだ
一子はなんか今日は終始不機嫌だ
今ももう教室にはいない
俺、ほんとに何かしたか？
そこへ教室のドアが開く音がした
「か、海斗さん」

そこに立っていたのはよく知る一年生
由紀江だった

手は前に組んで…ん？
何か包みを持っている

「わ、私、お弁当を作ってきたので一緒に食べませんか？」

「へ？」

一日はまだ長い

18話　「ヒーローの噂」（後書き）

ありがとうございました
いや～、同級生にはそんなに歓迎されてませんが、
一年生には人気と。いますよね、年下に人気の人とか
ワン子はこんな風にすねるキャラでもないかなと思ったりしたのですが
まあ、大目に見てください
そして、次回はまゆっち！（松風はおそらくお休み）

19話　「暖かなひだまり」（前書き）

今回は前回の最後からも分かると思いますが
まゆっち回です
少し、短めですが（それはいつもですね
どうぞ

１９話　「暖かなひだまり」

Ｓｉｄｅ　由紀江

昨日は海斗さんに昼を食べてないということを確認しました
これはチャンスなのではないでしょうか
海斗さんにお友達として、お弁当を作っていきましょう

海斗さん…

お友達になってくださいとお願いしたら、いきなり名前で呼ばれて、
他人
行儀になるなって、私の緊張を解いてくれました

本当に優しい…

思いやりのある人です
本当に私はお友達として、お弁当を作るのでしょうか
最近、そんな自信もなくなってきました

海斗さんと一緒にいたいという気持ちは本当です
でも、それは友達としてというよりは…

学校に行くと、伊予ちゃんが私に話があるそうです
それは海斗さんに悪い人たちから守ってもらったというものでした

海斗さんは自分が優しくないと言い張りますが、やっぱり海斗さんは誰よ
りも優しいです
偽りなんかではなく、心の奥底から滲み出る優しさ
そんな暖かいものを持っています

海斗さんは1年生の間で結構人気があります
そんな素敵な人なのですから、当然のはず…
そこに焦りを感じていた時点で私の中では答えが出ていたのかもしれません

海斗さんのために作ったお弁当を持って、教室の前に立つ
この胸の鼓動が、他の人のときのような緊張とは違うのは、自分が一番わか
っていることです
心臓が刻むリズムが心地よい

いつからなんでしょうか
もしかしたら名前を呼ばれたあの時からかもしれません

私はお友達を望んでおきながら、海斗さんに恋をしてしまいました

海斗さんはどう思うのでしょうか
海斗さんには迷惑をかけたくありません

ですが、この思いをそんなことで消すことは到底できそうにありません

まずはこのお弁当を食べてほしい
…私の初めて好きになった人に

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺と由紀江は屋上に来ていた
天気は良好で絶好の弁当日和だ

教室で食うには、周りからの視線が痛すぎた
由紀江もあわあわ言ってたしな

「しかし、どうして急に弁当なんて作ってくれたんだ？」

確かに昼は食べてないと言ったし、由紀江の優しい性格ならば、そういった
気遣いに関しては何も疑問を感じない
だが、それでも弁当を１人分多く作るなんてな…
朝の忙しい時間にはどう考えても手間だろう

「それは、海斗さんは私のお友だ……」

何かを言いかけたと思ったら、由紀江は唐突に口をつぐんでしまった

しばしの沈黙のあと、
赤い顔を左右に振るとこちらを真っ直ぐと見て、言った

「海斗さんは私の大切な人ですから」

そんな、最初に友達になったくらいで大げさな
まあ、大切に思ってくれてるならいいか

「さんきゅ」

「あうあう～」

由紀江が精一杯の勇気を振り出して、変えた表現に含まれた意味は
海斗に届
ことはなかった

・・・・・・・・・・・・

Ｓｉｄｅ　一子

はぁ、変な意地張って、教室を出てきちゃったけど、気になって戻
ってきて
しまった
でも、教室の席には海斗の姿はなかった

あれ？おかしいな
海斗は食堂とかには行かないはずだから、席で読書でもしてると思ったのに。
どこに行っちゃったんだろう

ていうか、だめ。
今日は海斗のことは相手にしないと決めたのに…
アタシばっかりが気にしてる気がする

はあ…
こんなのアタシの方が不利に決まってるじゃない

惚れたほうが負けって、こういうことね

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

・・・・・・・・・・

由紀江から渡された弁当を開ける
中には色どり豊かなおかずが入っていた
どうやら和食中心のようだ

ていうか、マジで美味そうだ
人に作ってもらった料理を食べるなんて、久しぶり…
いや、初めてか…

はあ、今はそんなのどうでもいいな

せっかく自分のために作ってくれたんだし、もらうか
そう思い、箸を持とうとしたら…

「あ、あの…！」

うん、なんか凄まじい速度で箸をとられた
ほんと、こいつ強いと思うんだよなあ

「あのですね、海斗さん、く、口を開けていただけませんか」

「ああ、別に構わないが」

そうして、俺は口を開ける

そんな俺と弁当箱の間を視線が高速で行き来する
なんだ、視線で反復横とびでもしてるのか
思わず、そんなツッコミが出てしまいそうになるほどだった

「すみません、なんでもありません…うっう」

何を泣いているんだ
よく分からないまま、弁当を自分で食べ始める

「うん、美味いな」

「あ、ありがとうございます」

「この肉じゃがなんて、味がよく染みてる」

「あ、それは一回冷まして…」

由紀江が熱心に肉じゃがの説明をしてくれる

一子といい、本当に不思議だ

なんで、俺なんかに自分から近づこうとするのだろう

自分は人とは関われないものだと思った

だから、距離をあけるのは当然で、嫌な奴と印象づければ、当然、すすんで

近づこうとする奴なんていなかった

なのに、目の前の由紀江は本当に俺のことを友達だと考えてくれている

俺を1人の人間として、見てくれている

だが、それは結局ニセモノ

俺の本当を知ったら、目の前の少女はどうするのだろう？

友達ではいられないだろうな

ばれないようにするのが最善

そんなことは関わりを断ってしまえば、全てが解決する

ただ、それだけの話。

だが、俺はそんなことを容易に出来なくなっている
このつながりを失くしたくはない
本当に変えられているな…

俺はこのひだまりの中にいつまでいることができるのだろう

目の前の少女を見ると、笑顔で弁当の解説をしてくれている
その姿を見て、しょうもない考えを頭の隅におしやった

今は由紀江の美味い弁当を食おう。
そう思ったのだった

19話　「暖かなひだまり」（後書き）

ありがとうございました
まゆっちが一子に続いて、落ちました
まゆっちのタイプは優しい人じゃないかと
勝手に思っているので、今までの総合して惚れさせちゃいました
そろそろ日常編終わるんでしょうか

20話　「ドキドキデート？」（前書き）

前回はまゆっち回でしたが
今回は…もう分かりますね
どうぞ

20話　「ドキドキデート？」

―時は放課後

俺は由紀江の昼飯を食べて、今日に満足して学校を出ようと思った

だが、目の前からすごい圧力を感じる
いや、原因は分かっている
一子が無言でこちらを向いて、立っているからだ

最初はなんか用があるのだと思って、話し出すのを待っていたのだが、これ
がいっこうに口を開かない
かといって、俺が帰ろうとすると、“むー”とか唸りだして、こちらを見な
がら、体をぷるぷると震わせる

一体、どうしたっていうんだ
今日は朝から機嫌がよろしくなかったが、本当に俺が何か悪いことしたか？

「おい、一子」

しょうがないので、こちらから声をかけてみる

すると、一子は一瞬笑顔になったかと思うと、すぐさま表情を戻して、俺を

睨みつけてきた。本当になんなんだ…

「な、なに」

「なんか怒ってんのか？」

「別に怒ってないわ、私はいつも通りよ」

いや、そんな怒った声で言われても…

はあ、まったく

「一子、一緒に来い」

「え？」

「菓子買ってやる」

原因は分からないが、このままはよくないだろうったく、一子には笑顔の方が似合ってるしな

・・・・・・・・・

「いや、本当に悪かった」

「別にいいわよ～」

前に食った動物ビスケットを買ってやろうと思ったのだが、流石は移動販売
もう他所に行ってやがった

何が“菓子買ってやる”なんだか
数秒前の調子乗ってた俺を一発なぐりたい
今この時間をゆがめて、過去に戻りたい
でも、今より過去の俺を殴るわけだから、当然今の俺にダメージを与えるわ
けで…ん?逆に考えれば、今の俺を殴っても同じってことか
いや、時間軸の前に俺の頭がゆがみそうなので、これ以上考えるのをやめて
おく

だが、何故か一子はそんな不甲斐ない俺に対して、怒っている風ではなかっ
た。
むしろ、さっきのような刺々しさはなくなっていて、機嫌は良いようだ
今は汗をかきつつ、困った顔で笑いながら、俺の非を否定してくれている
やっぱり、一子はこうでなくちゃな

目的は達成できなかったが、問題は解決したので、良しとしよう

これからどうするかと思い、一子の方を見ると、右ポケットから何かがはみ

出していた
それは俺の興味を一気に持っていった

「おい、一子、それ何だ？」

「え、これ？携帯電話よ」

一子はそれをポケットから取り出して、俺に見せてくれる
うむ、実にいい

「一子、これ買いに行くぞ」

「え！今から？」

「俺は欲しいと決めたら、すぐ行動する」

そう宣言して、ワン子の手を引き、歩いていく
さっきは格好つかなかったからな、挽回だ

ん？
一子の手が妙に汗ばんでいる
少し、強く握りすぎたか？
そう思って、握る力を弱めると、慌てたようにあちらから強く握ってきた
何事だと思い、振り返ると、一子は俯いていて、髪の間から見える耳は朱に

染まっていた
そちらを見ても、黙ったままなので、そのまま握って進むことにした
…あ

「一子。携帯って、どこに売ってんだ？」

最後まで格好はつかなかった

・・・・・・・

「それでですね、こちらは…」

「へえ」

「むぅ…」

携帯ショップの中では何故か三つ巴が繰り広げられていた

俺が店に入ると、他の客の対応をしていた女性店員がこちらにやってきた
こちらが聞く前にどんどん話してくる
まあ、初心者なのでありがたいのだが、若干近い

一子は一子で、なんかまた不機嫌になってしまった

俺にどうしろと

「お客さまはどんな携帯をお探しですか？」

「一子と同じ奴がいいな」

「え！？」

「ちょっと、こっちに持ってこい」

「う、うん」

さっきまでとは打って変わって、照れたような笑顔だ
感情の起伏が激しいな

「これと同じやつを頼む」

「はい、それでしたら、この6色の中から選べますが」

「黒でいい」

そんな色なんかはどうでもよかった
俺は店員が早く持ってくるのを待った

「こちらになります」

「ん？」

「よかったじゃない、買えたわね」

「一子のと違わないか？」

「え、そりゃ色は違うけど…」

「じゃなくて、それが付いてない」

そうして、海斗が指差したのは、一子の携帯に付いた犬のストラップだった

一子も一瞬、理解が追いつかなかった

「え、これ？」

「それ。」

「じゃあ、アタシと同じのが欲しいっていうのも…はぁ」

「それが俺の携帯にはないんだが」

「これは別売りなのよ、アタシが後から買って付けたの」

「なんだと」

じゃあ、俺は何のために、これを買うんだ

くそ、俺もその柴犬みたいな奴、ほしいんだよ

「あの、お客様、ストラップなら購入した方に差し上げていますが」

「どういうのなんだ？」

一子は“自分で買った”と言っていた
ということは、柴犬が出てくる可能性はないだろう

「人気なのは、この十字架とハートになりますが、他にも3種くらい用意し
ております」

いや、そんな十字架なんて、もらってもしょうがないんだよ
俺、別に何も信仰してないし、神なんて存在はないと思っている
占いなんて、絶対に信じないしな
勿論、運勢が良いときは別問題だ、全力で肯定してやる

もはや、何の望みも持たず、並べられたものに目を向けると、その内の1つ
が目に留まった。
というよりか、目が合った

「おい、これは？」

「あ、それはちょっと不人気でして、すみm…」
「俺はこれをもらう」

「え、海斗、それにするの？」

「ああ」

俺が選んだのはトカゲをモデルにした銀色のストラップ。
なんだよ、良いものあるじゃねえか

・・・・・・・・・

「ありがとうございました」

とても満足して、店を出る
良い買い物ができた

「海斗って、動物好きなの？」

「まあ、そうなのかな、嫌いではないことは確かだ」

「ふーん」

「さてと…」

俺は一子の目の前に携帯を突き出した

「え？」

「最初に教えてやるって約束しただろ」

「あ……うん！」

一子は約束を思い出したようで、満面の笑みで頷いてくれた
一日の締めくくりにふさわしい良い笑顔だった

・・・・・・・・・

同日、夕方
某廃ビルにて

「じゃあ、様子見っていうことでいいんだな」

時刻は一子と海斗が別れた少し後。
一つの机を9人が囲う

「では、ここに宣言する！」

「風間ファミリーに“流川海斗”を新メンバーとして迎える！！」

男の声が響いた

20話　「ドキドキデート？」（後書き）

ありがとうございます
ワン子はなんか嫉妬キャラとして、定着しつつある気がします
感情を素直に表しそうなので、やりやすいんですよね
そして、やっと日常編が終わるかも？

20．5話　「ドキドキデート？　Ｓｉｄｅ一子」（前書き）

感想で要望を頂いたので書かせて頂きました
即席なので、いつものに加えて、低クオリティーになっていることも否めませんが
よろしければ、読んでください

20．5話　「ドキドキデート？　Ｓｉｄｅ一子」

―時は放課後

昼休みは見つからなかったので、海斗を待ち伏せすることにした

なんか、このまま海斗を無視してても、アタシだけが損するような気がする

海斗なんて、気にもしてくれないかも…

そんなことを考えたら、行動に移すしかなかった

だけど、その向かい合った状態で沈黙が続く

当然、アタシからは声をかけられるわけがない

だから、海斗から話すのを待つしかないんだけど…

海斗はしばらくその状態が続くと、あろうことか、席を立って、教室の外に

向かおうとしてしまった

話すことが出来ないアタシは無言の圧力を飛ばす

そうしたら、海斗もなんとか止まってくれた

これは酷いんじゃない？

確かに今日は朝からアタシの海斗に対する態度が冷たかったけど。

けどさ、それだって全部、海斗が好きだからなのに…

「おい、一子」

大好きな人の声が自分の名前を呼ぶ
中途半端で煮え切らないアタシに海斗から声をかけてくれた

アタシはつい、笑顔で応えてしまいそうになるけど、今までのそっけない感
じを咄嗟に思い出し、表情を強張らせる
なんで素直になれないんだろう

「な、なに」

「なんか怒ってんのか？」

「別に怒ってないわ、私はいつも通りよ」

そう、海斗は何も悪くない
ただ、海斗の人の良さが人気につながっただけのこと。
そんなのは分かっている

分かっているのに、どうしても怒ったような気分になっちゃう
いらないのに、消せないもやもや。
でも、この怒りを海斗に向けるのは、おかしい
消せない怒りは素直になれない自分へ。

「一子、一緒に来い」

「え？」

「菓子買ってやる」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いや、本当に悪かった」

「別にいいわよ〜」

海斗はなんかアタシに買ってくれる予定のものが決まっていたようだったけど、あたりが外れて、それは手に入らなかったらしい
そのことをさっきから、ずっと申し訳なさそうにしてる
だけど、アタシにとってはもうそんなことはどうでもよかった
海斗がアタシを誘ってくれたこと。
面倒くさい態度をとっているのはこっちなのに、気にかけてくれたこと。
それが感じられただけで、アタシの気分が晴れるのには十分すぎた
もう、今は海斗の隣で自然に笑みがこぼれる

「おい、一子、それ何だ？」

「え、これ？携帯電話よ」

突然、海斗がアタシのポケットを指差して、言い出した

アタシはそれを取り出し、海斗に見せる

「一子、これ買いに行くぞ」

「え！今から？」

「俺は欲しいと決めたら、すぐ行動する」

急にそんなことを言い出して、びっくりした
いや、そんな驚きはすぐに忘れてしまった

次の瞬間、海斗がアタシの手を握って、歩き出した
アタシの手を…、海斗の手が包んで…
もはや、びっくりを通り越して、形容しがたい衝撃に襲われた

海斗が自分から、アタシの手を握ってくれてるんだ
そう考えただけで、体全体は熱を帯び、つい引かれている手にも汗をかいてきてしまう
好きな人と触れ合うだけでアタシの体はこんなにも素直に反応してしまう
そんな反射のような現象は止められるはずもなく。
それを自覚して、さらにアタシの体は熱くなった

突然、海斗の手が離れそうになった
アタシの頭は恥ずかしさでいっぱいだったはずなのに、その変化にはいち早
く反応して、考える間もなく、海斗の手を今度はこちらから強く握

ってしまった。
本当に欲望に忠実な自分の行動が恥ずかしい

だけど、海斗はそれについては何も言わずに、また手を握りなおしてくれた
アタシはそんな海斗の優しさに触れて、海斗が前を歩いているのをいいことに緩む頬を隠そうともしなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それでですね、こちらは…」

「へえ」

「むぅ…」

携帯ショップに入った途端、女性店員が海斗に近づいてきた
それだけなら、まだしも明らかに距離が近い

本当に海斗は無駄なくらい人気がある
確かに海斗は見た目もかっこいいかもしれないけど、アタシは海斗の内面の優しさだって、知ってるんだから

「お客さまはどんな携帯をお探しですか？」

「一子と同じ奴がいいな」

「え！？」

海斗がアタシと同じのがいいって…
それって、お揃いってことだよね
え、そういうのって、恋人同士とかでするものじゃないの？
いや、アタシは全然構わないっていうか、大歓迎なんだけど。
そんなことを海斗から望んでくれたってこと？

「ちょっと、こっちに持ってこい」

「う、うん」

「これと同じやつを頼む」

「はい、それでしたら、この６色の中から選べますが」

「黒でいい」

「こちらになります」

「ん？」

「よかったじゃない、買えたわね」

「一子のと違わないか？」

「え、そりゃ色は違うけど…」

「じゃなくて、それが付いてない」

そうして、海斗が指差したのは、アタシの携帯に付いた犬のストラップだった

一瞬、理解が遅れるが…

「え、これ？」

なんとか、そう聞き返す

「それ。」

返ってきたのは肯定。

要するに、海斗がいきなり携帯を欲しいなんて言ったのは、このストラップ

が欲しいと思ったからなんだ

結局、目当てが携帯じゃなくて、これってことは…

「じゃあ、アタシと同じのが欲しいっていうのも…はぁ」

「それが俺の携帯にはないんだが」

「これは別売りなのよ、アタシが後から買って付けたの」

「なんだと」

「あの、お客様、ストラップなら購入した方に差し上げていますが」

「どういうのなんだ？」

その後も海斗と店員が何かやり取りをしてたんだけど、正直アタシは喜びの丘から、絶望の谷に突き落とされたようで、あまり内容が頭に入らなかった

その落差はしっかりとショックに比例していた

結局、海斗は銀色のトカゲのストラップをもらうことにしたみたいで、早速それを携帯につけると、その場をあとにした

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「海斗って、動物好きなの？」

「まあ、そうなのかな、嫌いではないことは確かだ」

「ふーん」

でも、なんか海斗って、優しいイメージがあるから、動物好きそう
好きな人の好みは覚えておきたいものだし。
今日のことはしっかりと記憶しておこう

「さてと…」

「え？」

海斗がいきなりアタシに向けて、携帯を突き出してきた
最初、意味が分からなかったんだけど。
次の言葉で全てを理解する

「最初に教えてやるって約束しただろ」

「あ……うん！」

海斗は覚えてくれていた
あの日の約束を。
アタシが海斗のパートナーになれた日の約束を。

些細なことなのかもしれない
だけど、アタシはそれだけで嬉しすぎて、笑顔になってしまう
それがとても幸せ。
これからも好きな人の隣で笑っていたいな

２０．５話　「ドキドキデート？　Ｓｉｄｅ一子」（後書き）

ありがとうございます
こんな感じじゃないでしょうかね
こうして見ると、もうワン子は海斗にべた惚れですね
だが、それがいい
次は２０話の続きからです、よろしくお願いします

21話　「風の男、動く」（前書き）

投稿おくれまして、申し訳ございません
頭痛という名の自己管理不足に襲われておりました

地の文は一人称、三人称を混ぜた形がこれからの主になると思うので
読みにくいかもしれませんが、慣れていただきたいです
では、遅れましたがどうぞ

21話　「風の男、動く」

Ｓｉｄｅ　翔一

タッグマッチの決勝戦
あいつはワン子を馬鹿にした相手に対して、声を荒げた
いつも喋らないで大人しい奴だと思っていたのに、こんなに熱い男だとは、
思いもよらなかったぜ

あれ以来、ワン子とも仲がいいみたいだし、まゆっちもお友達になったと秘
密基地で嬉々として語っていた

それならば、新メンバーとしていいんじゃないだろうか
ファミリーの2人とも仲がいいわけだ
何より、ああいう真っ直ぐな奴は好きだぜ

だが、俺1人の意見では決められない
俺たちは“ファミリー”だからな

～

「今日ね、海斗と携帯電話、買いに行ったの」

「あぁ、また始まった」

「今日のお昼にですね、海斗さんとお弁当を食べたんです」

「へぇ、そうなのか…」

ファミリーが集まる秘密基地
そこでは大和と岳人が恋する乙女たちの犠牲になっていた

本人たちは仲間として、現状報告しているつもりなのだろうが、彼女のいな
い男たちにとっては、ただの惚気以外の何者でもない
そして、悪気がない分、無視もできないということだ

2人の少女はライバルが偉大な戦果を成し遂げているのも知らずに、別々の
ところで、各々自分の嬉しさを語っていた

そんなこんなで時間が過ぎていくと、基地には続々とメンバーが集まり始める
そして、最後にキャップこと風間翔一が来た

「あー、今日は皆に話がある」

「なになに、また旅行でも行くの？」

「ハハハ、それはいいなぁ」

モロと百代が反応してくるが、翔一は続ける

「実はまた新メンバーを入れたいと思う」

「え！？」

さっきまで読書をしていて、我関せずだった京が一番に反応する

「またか、まあいい。それで誰なんだ？」

「ああ、“流川海斗”だ」

ワン子とまゆっちの肩がビクリと震える

京や大和からしてみれば、なんと分かりやすいという感じでしかない

もはや、誰が見ても明らかなバレバレの状態だった

クリスなどの例外もいたが…

「流川海斗とは、あの犬と共に優勝した奴か」

「フフ、あいつか。面白いじゃないか」

「俺はあいつをファミリーに入れたい。だから、多数決をとる」

「私は反対」

京が間髪入れずに即答した

「もう新しいメンバーはいらないよ」

「今回は俺も反対だ」

大和がそう言うと、岳人とモロが続いた

「わ、私は…」

「ア、アタシは…」

ワン子とまゆっちが慌てて、自分の意見を述べようとするが、二人の答えが
火を見るより明らかなのは言うまでもない

「で、まゆっちとワン子は仲いいから、賛成でいいよな」

恋愛感情に気づけないリーダーもいるが…

「私も賛成だな、アイツは何かと面白い臭いがする」

そう言って、目を輝かせる百代
それはまるで戦いに飢えた獣を彷彿させるようだった

「俺はもちろん提案者だから賛成だ」

「てことは、今んとこきっちり４：４で分かれてるわけか」

「クリはどうなんだ」

そう、残るはクリスの意見だけだ
すなわち、この決定がファミリーの決定となる

「自分は正直、少し前までなら迷わず反対だった。
教室では無関心で、教師への態度も悪い。
だが、犬と共に戦っている奴の姿からは義を感じた。
自分はどちらが本当のあいつなのか、判断できない。
だから…」

「どちらともいえないってことだな」

「結局、決まらなかったってこと？」

「まあ、また入れてみて様子見っていうのが妥当だろうな」

反対派の皆も仕方ないと頷く

「よし、じゃあそれで決定だ！」

～

てな感じのことが昨日あって、晴れて今日からお試し期間だ
楽しくなりそうだぜ

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「嫌だ」

男の計画は破綻した

「なんでだよ！」

「いや、いきなりファミリーに入れなんて、断るに決まってんだろ」

「楽しいじゃん、即ＯＫじゃん」

なんだ、こいつは駄々っ子か
なんで、登校直後にこんなこと言われてんだ、俺は

「大体、一子と由紀江がいるからって、俺が入る理由にはなんねえよ。
あいつらとは、別にファミリーじゃなくても関われるだろ。」

「いいじゃねぇか、一緒の方が楽しいって」

こいつ、本当に人の話きいてんのか

ちょっと顔がいいからって、何でも許されると思ってるんじゃないか
そんなのが通じるのは単純な女だけだぞ
悪いが俺にはそんな趣味は皆無だ

「とにかく、その話は断る」

「どうしてもか？」

「ああ、そうだ。分かったら、席に戻れ」

「よし、分かった。なら、俺と勝負しろ」

「嫌だ」

「即答かよ！！」

いや、そんなものするわけないだろ
目立たないようにしようという考えは一子や由紀江によって、結構
変えられ

てしまったが、そんな意味のない勝負をする必要性は全くない

「勝負くらいしたっていいだろー」

「じゃあ、今日の昼飯をおごれ」

「なに、そしたら…」

「俺が嬉しい」

「勝負してくれるんじゃないのかよ！」

はあ、ほんと子どもみたいでいじりやすい
こちらのS心がくすぐられる

「んじゃ、俺の指定した時間までに菓子買ってこれたら、いいぞ」

「そんなことならお安い御用だぜ」

「じゃ、柿ピーでいいか、タイムリミットは…昨日だ」

「思いっきり、過ぎてんじゃん！！」

「キャップ、もとから入る気なんてないんだって」

あらら、遊んでたのに、もう終了か
まあ、そういうことだ

頭脳担当君の言うとおり、諦めてくれや

「だから、俺に任せてくれ」

「大和、なんか作戦があるのか」

「ああ、あいつのことはワン子からリサーチ済みだ」

ほう、随分と自信があるようで
確かに一子や由紀江とは他の奴らよりも多く接している
だが、俺が人の前で弱みを見せるなんて有り得ない
そんなへまは俺に限って…

「これを勝負に勝てば、やるっていったらどうだ？
モロにネットで買ってもらった」

そう言って、俺の机の上に置かれたのは、あの一子の携帯に付いてたものと
非常に似た柴犬のストラップだった

いや、確かに弱みではないな、これは
というか、物ごときで俺の揺るぎない心を動かせるとでも思ったか

「直接戦闘以外なら受けよう」

簡単に揺らいだ

「おお、大和でかした」

「いや、俺もまさか、これで成功するとは…」

「なんだ、これは。目のつくりが職人入ってんじゃねーか」

「完全に聞いてないし」

一子のとは、若干毛の色や耳の形などが違っていて、まあ、１つ言えること
は愛嬌が半端ないということだ

色々な角度から見ていると、取り上げられた

「これは勝者への景品だ。お前の物になるのは、キャップとの勝負に勝って
からだ。負けたら、当然ファミリー入りだな」

「分かってるっつーの、で、何の勝負をするんだ?」

「それは…川神戦役だ!!」

またもや、大変なことが始まりそうな予感である

21話　「風の男、動く」（後書き）

ありがとうございました
前回の終わりに対するコメントがまさに皆様一致していました
そうですよね、予想がつきますよね
海斗がそう簡単に受け入れるわけはないと、まさしくその通りです
そして、次回からイベント開始ですかね、
まあ日常編同様、ダラダラに変わりはないでしょう

最後に、今回自分の体調不良で迷惑をかけてしまった方がいたら、
すみませんでした

22話　「前哨戦」（前書き）

書くペースがだんだん遅くなり
書く時間も日に日に減っていく始末。
毎日更新、いつまで続けられるんでしょうか

22話　「前哨戦」

―川神戦役

それは本来、クラスでの決闘法に用いられる。
くじ箱の中から出た様々な競技で戦い、それに応じた様々な力が問われるのである。
団体戦ではないので、自分一人の幅の広さが試される。
そして、先に5本先取した方が勝ちという、シンプルかつ分かり易いルール。
要するに今で言うバラエティ番組みたいなものである！

よし、説明もバッチリ決まった

結局、勝負はその日の放課後に行われることとなった
わざわざ、引き伸ばす必要性も感じなかったし、何より早いところ、あのス
トラップをゲットしたい
トカゲの“シロガネ”に友達ができるのだ

場所はグラウンド
多くのギャラリーが集まっていた
これから、勝負が始まる

Ｓｉｄｅ　大和

まさか、ストラップで釣れるとは思いもしなかった

ワン子が昨日、話しているのを聞いていて、
“いや、そりゃ多少は好きなんじゃないの”と相槌を打っていたが…
勝負を受けるほど、好きだったとは。

これは覚えておいたほうが良さそうだな

そして、今まさに勝負が始まろうとしている

ギャラリーも多く、活躍するキャップ見たさに同級生の女子などが多く集まっている
そして、他にも大量の１年生が見に来ていた

これはあれなんだろうな
流川の人気が１年生の間で凄いというのは、どうやら本当らしい
あの噂もあったしな…
やはり、頼れる年上というのは下級生に人気があるのか
こいつの守ってもらえるイメージはもはや定着しているからな

そして…

まあ、まゆっちは１年生だしな、分かるよ
何故、君もそっち側にいるんだい？ワン子よ…

大和の口からは溜息しかもれなかった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

はあ、よりにもよってこんなイベントみたいになってしまうとは。
おまけに…

「えー、司会は小さい娘の味方　井上準と…」

「みんなのアイドル　川神百代だ！」

なんか司会まで付いてきやがった

「えー、今回は放課後ということにより、時間もないので、３本先取で決着
をつけまーす」

「大人の事情というヤツだな」

すげぇ、大がかりになってしまった

まあ、合計で３回勝てばいいのだ
嫌な勝負はギブアップすればいいだろう
格闘なんて来たら、速攻ギブアップだ

周りを見渡してみると、こちらに向かって、大きく手を振る一子が
見えた

その隣で由紀江も控えめに手を振っていた
俺は自然に顔が緩み、そちらに手を振り返した
途端、近くにいた1年生がドッと沸いた
なんだ、どうしたってんだ
俺が手を振るのがそんなにおかしいか

「では、もうそろそろ1回戦の競技を決めてしまおう」
「じゃあ、先攻・後攻を決めてくれ」

正直、先攻・後攻なんてどうでもいいのだが、もらえるものはもらっておく
とするか
ジャンケンなんて負ける可能性がないからな

「よーし、それじゃ順番を決めようぜ」
「あ、俺はチョキを出すから」
「なに!?」

会場がざわめく
まあ、これで俺の負ける可能性は“限りなく0に近い”から0になった

Ｓｉｄｅ　大和

同じだ
これは俺がクリスと勝負したときに使った手と全く同じ
突飛な行動をとり、相手の裏をかく戦法だ

初見の相手には意表をつくし、ペースを乱す常套手段といえる
しかし、キャップはそのときの一連のやりとりを見ていたから、この手には
引っかからないだろう

だが、何故だ
本来、このような作戦は相手の思考レベルをよく知っていて、こいつはどこ
まで裏をかいてくるというのを予測できるうえで、初めて有効な手段といえ
るものだ
ましてや、あいつは俺とクリスの勝負なんて、これっぽっちも知らない

こいつはキャップとは今日話したのが初めてだし、会話の内容だって、決し
てお互いのことを知るとか、親交を深めるものではなかった
それどころか、こいつはキャップ以外にも全く興味を示してはいなかった

それなのに、この作戦を使ってくるということは相当な自信があるというこ

と。
あの短い時間でキャップのレベルを計れたのか
分からない。
この俺のような混乱が狙いだとしたら、それは意味がない
キャップはここまで深く考えるような奴ではないからだ
なら、何故だ
何故、その作戦を使う、流川
気まぐれか、確信があるのか
それは勝負の結果を見なければ、知りようがなかった
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「は、その手には乗らないぜ」
「ふーん」
（大和がやっていた作戦だ、これは。
こいつはチョキを出すといった。
俺にグーを出させるために、だから、相手はパーを出す。
それを読んだ俺がチョキを出すことを誘導しているのだから、
相手はグーを出す。
なら、パーを出せば、俺の勝ちだ！）
「いくぜ！」
「おう」

「「ジャンケン、ほい」」

風間翔一はパー
そして、海斗は…チョキを出した

「ま、俺の勝ちだ。運がよかった」

「くそ、なんでだ」

意外にこいつ、ひねった出し方してきやがった
単純にグーでも出してくるかと思ったが、ひっかけられたことでもあんのか

まあ、いくら考えたとこで俺には勝てない
別に俺は思考の裏をかいたわけでも何でもないからな

ジャンケンなんて、大抵の奴は出すものなんて、決めないで、その場の勢いで出すのが普通だし、所詮“運”。
そんなことで勝敗が左右されるわけじゃないし、気にすることではない
だが…

“俺は〇〇を出す”

こんなことを言ったらどうだろう

普段、考えないのに、何を出すかを思考してしまう
そして、脳内討論の結果、これを出すと決定してしまうのだ

すると、どうだろう
普段は不可思議な動きを経て、形になる手が、一つの形に向けて、
一直線の
単純な動きとなってしまう
そんな動きなら、何を出すかくらい、俺の目なら捉えることが可能だ
別に不可思議な動きでも出来ないことはないが、確実に越したこと
はない

さらに、自分が出すものを宣言しといて、勝利を収めた
これは相手に“自分の思考を読まれているのではないか”という不
安を植え
つけるという便利な付加効果つきだ

まあ、相手はお気楽で、どう考えても、そんなことを気にしそうな
奴ではな
いので、もとから後者は期待していない

だが、予想に反して、色々考えて出す手を決めてきたようなので、
腑に落ち
ないモヤモヤ感くらい感じているだろう
それだけでも、十分な収穫だ

負けたときの言い訳にでも上手く使ってくれたまえ

「まあ、先攻を奪われただけだ。勝負はこれからだぜ！」

「では、流川、くじを引いてくれ」

「ど、どうぞ、ここから引いてください」

「ああ、これでいい」

「ありがとうございます……きゃー／／／」

なんかくじ箱を持ってきたと思ったら、一目散に離れてしまった
そのスタッフみたいな一年生の娘がくじを開く
なんで、スタッフいるんだよ…

勿論、一年生の有志の集まりであることは言うまでもない
そんなことを海斗は知る由もなく、競技が伝えられる

「第一回戦は適応力対決だ」

22話　「前哨戦」（後書き）

ありがとうございました
やっと川神戦役スタートです
日常じゃないですが、変わらずダラダラなので
そこはご了承ください（笑
いきなり無駄に心理戦があったり、なかったりですね
次回より試合がスタートということで、お願いします

23話　「退路は断たれた　前編」（前書き）

すごく台詞が多いです
読みにくさはいつも以上かもしれませんが、
よろしくお願いします

23話　「退路は断たれた　前編」

うん、“適応”ね、“適応”。
知ってるよ、うん知ってる

“その状況によくかなうこと。ふさわしいこと。あてはまること。”

だよな、新村　出も言ってたぞ
それに“力”がついて、“適応力”
俺、何も間違ってないよな

その一回戦の適応力勝負が何故ゲームなんだ…

「さーて、一回戦目はこのゲームで勝負してもらうぞ」

「何故、これが適応力勝負なんでしょうか」

「ああ、これはとてもマイナーなゲームでな…、そこら辺の詳しい説明は特
別ゲストを呼んである」

「おぉ、いきなり台本にないことを…」

「モロロとそのクラスメイトだ!!」

「モモ先輩、大串スグルだってば!さっきも言ったじゃん」

「ん〜、そうだっけか」

「名前も覚えられんとは、これだから三次元は…」

「まあ、ということで2人には解説についてもらう」

「俺の出番、ただでさえ少ねえのに」

「早速、このゲームについて説明させてもらうよ」

「聞いてないしね…」

「さっき、モモ先輩が言ったとおり、これはマイナーなゲームなんだけど、
マニアの間じゃ、とっても有名なゲームなんだ。というのも、色々な要素、
つまりはシューティングや格闘、アクションといったもので全体が構成され
ていて、まさに適応力が試されるんだよ」

「ただ、このゲームの製作は素人が個人で作ったもので、そのクオリティー
こそ尊敬はできるが、その変態じみた難易度、作者の偏った趣味がゲームの
中に盛り込まれているという点から、クソゲーとも烙印を押されている、ま
さしく、やってみたくはあるが、買いたくはないゲームなのだよ」

「はあ、説明されても、さっぱりわからねえ。結局、小さい娘は出てくるの
か、どうなんだ!?」

「いや、今そんな話してなかったよね」

「まあ、聞くより見たほうが早いだろう、始めてくれ」

俺と風間翔一が電源をつける

すると、変なムービーが流れ始めた
その奇妙なセンスはピカソを彷彿とさせた
というか、見様見真似のゲルニカって、リアルにこんな感じじゃないだろうか

「なんかカオスなムービーが流れ出したぞ」

「ああ、人によってはあれでリタイアするそうだ。しかも、嫌がらせなのか
スキップは出来ない仕様だ」

「鬼か！！」

「さっき、スグルが変態じみた難易度なんて、言ってたけど、それはノーマルからの話で、イージーなら普通のゲームより少し難しいくらいなんだ」

「まあ、日が暮れても困るしな」

「キャップは大和とかと、よくゲームしてるけど、流川君はなんか、

やった
ことすら無さそうだよね」

「ああ、間違いなくアイツはギャルゲーの最初の選択肢で、上の“早く起きて学校へ行く”を選ぶタイプだ。そこは間違いなく、下の“まだ眠い、二度寝でもするか”だろうが。何故、遅刻しそうな転校生と巡り合う可能性を考えることができないのだ、素人が！！」

「俺は何も押さずに、ロリっ娘の妹が起こしにくるのを待つぜ！そして、階段を降りていくと、“お兄ちゃん、目玉焼き失敗しちゃったの。ごめんね”と言うのを優しく撫でてあげるんだ」

「おい、美少女の私がここに居ていいのか、心配になってきたぞ」

「あ、そんな変な熱弁をしている間にムービーが終わったみたい…って！」

「おーっと、なんということだ！キャップは当然のごとく、イージーを選択したが、なんと流川海斗は最高難易度ハードを選択だー！」

「えー！！ハードは本当に理不尽なほど難しいんだ」

「これは勝負する前に結果が見えたようなものだな」

いや、なんかよく分からんが、そりゃ一番難しいのを選ぶだろう
何故、俺が逃げなきゃならんのだ

そりゃあ、確かにゲームなんて、生まれてこの方やったことはない
しかし、ただボタンを然るべきタイミングで押せばいいだけのこと。
何も難しいことはない…よな

(何!?あいつ、ハードでやりやがった。大和と協力して、このゲームやっ
たことがあるが、イージーで精一杯だぞ)

「さーて、予想外の事態が起こったが、1ステージ目は…これは格闘か?」

「そう、最初は相手の体力をなくせばいい格闘ステージ」

「だが、このステージには相手キャラをイケメンにして、操作キャラを女性
にして、ボコボコにさせるという、もてない男である作者のしょうもない憎
悪が早速こもっている」

「ああ、このゲームがクソゲーなのが、何となく分かってしまった…」

「残念ながら、私もだ」

「まあ、そういうゲームだから……って!!」

司会・解説の４人、いや会場全体が目を疑った

翔一が単調な動きの相手に慣れを生かして、コンボ技を入力しているだが、その横で海斗は敵を圧倒していた

というのも、翔一のようにコンボ技を決めているわけではないそれ以前に、今日初めてやっている奴が知っているはずもないだろう

海斗は敵の攻撃に対して、ぴったりとタイミングを合わせて、ガードをする
“ジャストガード”という高等技術を連発していて、自身のキャラの体力は
微塵も減っていなかった
そして、攻撃の隙を狙い、相手のゲージを削っていく

決して派手なアクションではないが、その凄さは理不尽な攻撃を繰り出す相
手を完璧に捌いていることが物語っていた

「おい、ハードの敵は遠距離攻撃、近距離攻撃、なんでもありのチートキャ
ラなんだぞ！倒すという目標でさえ、何人ものゲーマーたちが挫折したとい
うのに、あの男は…無傷だと！？」

「なんか分からんが、凄いのは分かるぞ」

「なんだなんだ、あいつは天才ゲーマーだったってことか」

「いや、いくら上手い人でも無傷っていうのは、ありえないよ。未来が見えるとかでもないと、とても対処しきれない攻撃数だもん」

「おい、“ジャストカウンター”まで使い出したぞ…！“ジャストガード”よりもさらにタイミングがシビアになるというのに」

いや、専門用語は分からんが、要は相手の攻撃に合わせて、ボタンを押せばいいだけのこと。
これで終了だ

俺は敵キャラを撃破した
隣もちょうど敵に勝ったところだった

「体力だって、イージーとハードじゃ段違いなのに、まさか一緒に終わっちゃうなんて…」

会場は一回戦目の序盤から騒然としていた

23話　「退路は断たれた　前編」（後書き）

ありがとうございました
変なところで切れていますが、後編に続きます
というか、毎日更新が風前の灯火に…いえ、なんでもありません
次回もお願いします

２４話　「退路は断たれた　後編」（前書き）

中途半端に終わった前回の続きからです
いきなり始まります

24話　「退路は断たれた　後編」

「なんか、よく分からんが、勝負はまだ分からない！モロロ、次のステージはなんだ？」

「あ、次のステージはいわゆるシューティングだね」

「これは典型的な縦スクロールシューティングだ」

「今度は変なところないだろうな…」

「それが、敵キャラが全て作者の嫌いな食べ物というシュールな感じになってて…。しかも、特に牡蠣には相当恨みがあるらしくて、他と比べて、異常に出てくる量が多いんだ」

「画面いっぱいに牡蠣が広がってるのを想像してしまった…」

「本当にカオスだな…」

「ていうか、なんか会場が騒がしくないか？」

「僕はもう嫌な予感しかしないんだけど…」

勿論、ざわつく会場の理由など1つしかなく、モロの予想は当たっていた

海斗はその圧倒的な量の敵、というか食べ物の数々を、弾をかわしつつ、確
実に仕留めていった
この程度なら、ざわつくこともないなんて言える難しさでもないのだが、海
斗は最小限の攻撃しか撃たず、また敵を倒すことで得られるパワーアップア
イテムを何ひとつ取る事がなかった

「やっぱり…」

「おいおい、パワーアップアイテムを取らないっていうのも、確かにすごい
が、あいつ無駄撃ちを一切やらないぞ。長押ししてれば、連射する仕様にな
っているというのに」

「そもそも、初期の弾の威力なんて相当低いんだよ」

「というか、そんなわざわざ自分に不利なプレイをするってことは、相手を
挑発でもしてんのか？」

「パフォーマンスとしては、非常に面白いがな」

そんな高評価をされていたが、当の本人は…

何だ、これは
ちょっと多すぎないか
とにかく、相手から出たものに当たらなければいいんだよな
ていうか、倒しても弾が出てこないか、これ

アイテムも本気でよけていたのだった

Ｓｉｄｅ　一子

海斗がいきなり、ハードを選択をしちゃったときはどうしようかと思ったけ
ど、なんか凄い動きでどんどんクリアしてっちゃう
やっぱり、海斗はすごいんだなー

ていうか、夢中になって、海斗の応援をしてたわけだけど、よく考えてみる
と、キャップが勝たないと海斗がファミリーに入ってくれないんだよね

でも、気づいたら海斗を応援しちゃってる自分がいる
結果のことなんか忘れて、今目の前で勝負してる海斗に“頑張れ”って、言
いたくなっちゃう
そう、いつの間にか、目なんて離せなくなってる

この前、大和に“大丈夫か”とか、“重症じゃないか”とか言われて、思い

きり否定してたけど、アタシ全然だいじょぶじゃないかも

それにしても、隣のまゆっちもずっと海斗を見てる気がする
まあ、友達だって言ってたし、まゆっちも賛成だったもんね
仲良しだったら、つい応援してしまうのも分かる気がする

だから、この変な胸騒ぎは気のせいだよね、うん

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その後も海斗はイージーとハードの差を感じさせることもなく、逆に少しリ
ードしているくらいで、次々とステージをクリアしていった

「次が最終ステージだよ」

「もう、なんかこのゲーム見てるだけで疲れるんだが…」

「で、最後のステージはなんなんだ？」

「最後はガンアクションだよ」

「また、ろくなものじゃないんだろうな…」

「ああ、この面は作者が極度の猫アレルギーだったことから、猫が敵だ。し
かも、最終面で作るのも疲れたのか、絵ではなく写真だ」

「よりによって、ガンアクションにそれを持ってくるか」

「もうツッコミも疲れたのだが、一応言っておく。何故、操作キャラが犬なんだ」

「作者が犬派らしい」

「ホント、どうでもいいな」

「まあ、すぐに決着がつくだろう」

「例によって、会場が騒がしいよ…」

「え、おい！大変なことになってるぞ！」

そこには相手の攻撃をひたすら避ける海斗のキャラの姿があった

やはり、その回避センスは見事だったのだが…

「その面は倒さないと、先に進めないよ！」

そう、このステージは避けるだけでは先に進まない

それを聞いた海斗は…

「そんなの分かってんだよ」

くそ、そうだ。そんなことは分かっている
だが、なんで、猫を撃たなきゃいけねえんだ
しかも、何ゆえ写真なんか使ってんだ
こいつらが一体何をしたっていうんだよ

「攻撃はできねぇ」

そう言い、相手の攻撃を避け続けることしか出来なかった

「もしかして、海斗、猫だから、手を出せないんじゃ…」

「え、そうなんですか!?」

そして、硬直状態が続いたまま…

「よし!クリアー!」

隣の画面に“ゲームクリアー”の文字が

「第一回戦は風間翔一の勝利!!」

同級生連中が揃って、歓声をあげた

「まさかの大逆転、というか最後はなんで、手を出さなかったんだ？」

「謎だけど、ハンデってことかな？」

「まあ、時間もないし、第二回戦にいくぞ」

今度は風間翔一がくじを引いた

「第二回戦は画力対決だ！」

「まあ、これはそのままで絵の対決だな。判定は美術の先生に任せている。
そして、モデルは2人にあまり差が出ないような人ということで、まゆまゆに決定だ！」

「わわ、私ですか！？」

「というか、この勝負、キャップの絵を見たことがある奴なら、もう勝負は
見えているようなものなんだよな～」

「というと？」

「キャップの描く絵はまるで写真のようだからな」

由紀江が出てきて、椅子に腰掛ける
すると、風間翔一はすぐに描き始めた

俺も描こうか
どうせなら、正面から描いてやりたいよな
それにちょっと緊張しすぎじゃないか

「由紀江、こっち向いてくれ」

そう笑って話しかける

「あ、はい！」

そうそう、やっぱり笑顔の方が女の子は絵になる
由紀江の無理している感じの顔もそれはそれで面白いがな

深く考えても、絵なんて習った記憶はないので、さらさらと適当に見たまま
筆を走らせていく

「よし、出来たと」

「俺も出来たぜ」

このときは、ファミリーの皆は誰もがキャップの勝利を確信していただが…

「じゃあ、一斉にオープン！」

2人の絵が観衆の前に並べられる
それらは、両者ともハイレベルな出来だった

「な!?流川も上手いじゃないか」

「本当にどっちも写真みたいですね…ははは」

本当にその通りでほとんど同レベルだった
違いといえば、風間の描いた物は少しひきつったような顔
海斗が描いた物は満面の笑みであった

「では、判定をしてもらおう」

「ふむ、どちらも非常に良く出来ていて、甲乙つけがたいが、この

娘はこん
なに笑顔ではない。よって、より忠実に再現されている風間の勝ち
とする」

おい、そんなことないだろ
由紀江は俺に向けて、こんくらいの顔してくれたぞ
よく見ろや、おい

勿論、そんな柔らかな表情は海斗の前でしか、見られなかった
自身が意識していなかろうが、その違いは顕著にあらわれていたのだ
そんな乙女の恋心が美術教師の判定に反映されるわけもなく…

「第二回戦も風間翔一の勝利!!」

またもや、同級生軍が声を上げる
一年生たちはジャッジにケチつけているようだ

おい、待て
3本先取で俺が2回負けたってことは

「早くも風間翔一、勝利にリーチだ」

やばい

出たくない競技はギブアップとか、そんな悠長なことをどの口が言っていた
まさに後に退けないじゃねえか

しょうがねぇ
くじで出た競技に全力で取り組むとするか

残された道はその進路のみ

２４話　「退路は断たれた　後編」（後書き）

ありがとうございました
いきなり後がなくなってしまいました
ここからどうなっていくのか
次回もよろしくお願いします

25話　「前進あるのみ」（前書き）

前回早速、ピンチに追い込まれました
では、三回戦目からです
どうぞ

25話　「前進あるのみ」

くそ、まさか追い込まれるとは思っていなかった
せめて、取って取られてのシーソーゲームを繰り広げたかったぜ

「くじをどうぞ…」

「ああ」

なんで、そんなに心配した顔をしている一年生スタッフ
このボロボロの状況に同情されてるのか

だとしたら、最悪だ
同情されるくらいなら、軽蔑された方が百倍ましだ

いや、言える立場じゃねえって話だよな…

「あ、じゃあこれで」

「はい……あの、頑張ってください」

“あの”の先は聞こえるか聞こえないかくらいの声だった
だが、どうやらあの子は純粋に応援していてくれたらしい
いやー、良い人もいたもんだ

「では、第三回戦目は自立力だ」

自立力？
そんなもの、俺には溢れてるぞ
なにせ、今までほとんど人と関わることなく、生きてきたんだからな
負ける気がせんわ

「ということで、料理対決だー」

は？料理
無理無理、生まれてこの方、料理なんてやったことないわ
負ける気がせんとか、言ったの誰だ。

おい、俺これで負けたら、本当にやばいんだが

「作る料理は自由だ、用意された食材から一品を作ってくれ」

「これはどちらが有利なんでしょうね」

「うーん、キャップは何でもそつなくこなすが、特別料理が得意というわけ
でもないしな。かといって、流川もどうみても料理したことないって感じだ
し、案外わからんな」

「といっても、風間はこれでリーチ！次で決まってしまうのか」

よし、包丁なんかは短刀と同じだと思えば良い
道具は初めて見るものもあったが、大体使えることが分かった

だが、問題はそこではないのだ
料理をやったことがない奴がいきなりやれと言われても、そもそも作るもの
がないのだ、そうレパートリーが。
これは出来がどうこう以前の問題だ

せめて、レシピでも読みながら、することが出来れば、それなりのものを作
ることが出来ると思うのだが…
何故、俺はそういう物を読んでこなかったのだろう
一度でも読んだことがあれば、記憶の中から引き出したのに

そう、レシピさえあれば…

「俺は本場で漁師さんに教わってきた海鮮丼を作るぜ」

…ん？
そうか！別にレシピがなくたって、作れるじゃねぇか

早速、俺は調理にとりかかる

まずは材料だ、そう材料はシンプルにだ。

にんじん、じゃがいも、玉ねぎ、肉。
こんなものでいいだろう

それらを適当な大きさにカットして、さっと軽く炒める

砂糖、醤油、みりんの量は正確に。
この量でＯＫだったはずだ

「ん、流川も何か迷いなく作っているな」

「あれは…」

そして、よく煮込む

最後に一度冷まして、また熱するのがポイントだったな
味が染み込むんだとさ

これで、完成だ
俺の人生、初めての料理
“肉じゃが”だ

「さて、両者完成！」

「審査員は料理部の生徒２０人だ」

風間翔一の料理は既に完成していたらしく、さすが本職に習っただ

けのこと
はあって、要となる盛り付けはほぼ完璧だった

「見た目的には完全にキャップの方が華があるな」

「では、いただきます」

料理部が両方の料理を食べ終える
公平な判定を行うため、私語は禁止されているらしい

「美味しかった方の札をあげてくれ」

結果は…
海斗　２０　ＶＳ　翔一　０

「おーっと、これは圧勝だ!!理由を聞かせてくれ」

「はい、こちらの方の料理は確かに盛り付けも素晴らしく、味も美味しかっ
たです。しかし、そちらの方の肉じゃがからは、何か優しい味を感じること
が出来ました。純粋に美味しいと思いました」

「すごい高評価だ、これで勝負は2対1!まだまだ終わらない」

良かった、なんとか勝てた

まあ、これは自分の力でもなんでもないな
今回勝てたのはあいつのおかげだ
だから、俺はそちらに向かって、笑って、親指を突き出した

ありがとな、由紀江

Ｓｉｄｅ　由紀江

海斗さんが作り始めたのは、肉じゃがでした
しかも、その作り方は私と全く同じでした

あのとき、屋上で恥ずかしさをごまかそうとして、何を話していいのか分か
らなくて、ずっと言っていた肉じゃがの作り方。
無駄に細かに話してしまった調味料の分量。
海斗さんは全部、聞いてくれていました

本当に長いだけの面白くもない話。
海斗さんは覚えてくれていました

そして、勝負に勝った海斗さんはこちらに向かって、笑顔でグーサインをし
てくれました

それだけで嬉しくなってしまう
海斗さんの言葉一つ、行動一つですぐに笑みがこぼれてしまいます

それは隠すことなんて、不可能で。

私は自覚してしまいます
海斗さんのことが真剣に好きなのだと…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「よーし、では四回戦の発表だ。四回戦目は集中力！」

「えー、これは大音量の騒音の中で集中力を乱さずに、的の真ん中に矢を射
てもらうという戦いです」

「勿論、先に達成したほうが勝ちだ」

ふむ、なんか今までで一番まともじゃないか

だが、弓矢は扱ったことないな
こういうのは初見でやるのは、きついぞ
俺には後がないってのに…

「そんな状況で本当にできんのか？」

「ん？どうした、流川」

「いや、ただでさえ、中央に当てるって難しいのを、そんな状況下で本当に

できんのかと思ってさ。不可能なことを延々とやらせられたくはないんでね。
出来るっていうことの証明が欲しいんだが」

「やる前から、何を言っているんだ。はぁ、まあいい。京、頼めるか？」

「しょーもない」

司会が誰かを呼んだかと思うと、紫髪の女が出てきた

その女は大音量の中で弓を構えた
目を閉じ、的に全神経を集中しているようだ
そして、ぶれのない動きで矢を放った
その矢は一直線に的の中央に突き刺さった

「これでいいか、不可能じゃないってことが分かったろ」

「ああ、十分だ」

先に達成したほうが勝ちならば、先攻をとらない道理はないだが、どうやら、くじを選んだ相手が先攻らしい

「いくぜ！」

これで決められたら、お終いだが、そんな心配は杞憂に終わった
矢は的にすら当たらなかった
まあ、初心者ならこれが当たり前だろう

ともあれ、俺の番だ
俺は大音量が流れるその場に立つと、目を閉じて、頭をクリアにした
先ほど、見たばかりの映像を脳内で再生する

そして、同じ呼吸で動作をなぞっていく
波長を合わせて、一挙一動を流れに預ける

ヒュンという風切り音が耳に入った

目を開けると、矢はしっかりと中央をとらえていた

俺がふぅと息を吐き出すと、会場がわいた

「おぉっと、なんということだ！一発クリアーー！」

「なんなんだ、アイツ。ゴタゴタ言ってたくせに決めやがった」

客席の一年生や有志のスタッフからは黄色い声があがっていた
逆に翔一のファンは驚いて声も出ないという感じだった

「やっぱり、流川先輩ってスポーツも出来るんだね」

「でも、部活入ってないんでしょ、何でなんだろ」

「ていうか、ホント、かっこいいなぁ～」

相変わらず一年生には大人気であった

「海斗、すごい…」

「やはり、海斗さん、見事です」

この2人もファミリー入りのことなど忘れて、海斗に目が釘付けになっていた、恐るべき恋のパワー。

そして、違う意味で声を出せない少女もいた

Ｓｉｄｅ　京

今の動き、完全に私の模倣だった…

さっきの見本の一回で盗まれたってこと?

弓使いは目がいいなんて、思ってたけど、あいつは一体?

ていうか、私の動きを見るためにあんなことを言った…

つまり、私はまんまと誘導されたんだ

本当に謎ばかりで実態がつかめない

そんな男にワン子とまゆっちは恋しちゃってるんだよね…
しょーもない

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「いやー、小さい頃にやってたからかな」

まあ、嘘だけど。
流石に初心者が一発っていうのはまずいからな
切羽つまっていたとはいえ、少々やりすぎた感が否めない

だが、これで勝負は五分五分
どうあっても、次で決着だ

25話　「前進あるのみ」（後書き）

ありがとうございました
海斗のいいとこ、少しはあったんじゃないでしょうか
なんとか、最終戦までもつれこみました
次回、やっと決着です（たぶん

26話　「男の意地」（前書き）

ついに川神戦役決着です
果たして、どちらが勝つのでしょうか

26話　「男の意地」

「さて、こんな大接戦になるなんて、誰が予想したでしょう。二回戦を立て
続けにとられた流川海斗選手でしたが、その後の二回戦を圧倒的な結果で勝
利し、ついに勝敗は第五回戦にまでもつれこんだーーー！」

「ハゲの無駄に気合が入った実況も許そう。これは本当に面白くなってきた
な、フフフ」

そう、これに勝てば、最初の失敗はどうでもよくなる
俺は最後のくじをひいた

「では、発表する。最後の戦いは脚力対決だ！！」

え、なんだって
ここにきて、キックの対決とかはやめてくれよ
もうギブアップできねえんだからさ

「競技内容はこのトラックを先に5周したほうが勝ち。ただそれだけだ」

ほう、よかった
まじで蹴りあいなんて洒落にならんからな

「これは流川は相当なはずれくじをひいたな」

「ああ、なんとなく分かります」

「キャップは本当に風のような男だからな」

Ｓｉｄｅ　一子

とうとう最後の試合まできちゃった
本当に海斗は意外なところで凄いときがある
弓矢だって、長期戦になると思ってたのに、京みたいに一発で決めちゃうし。

最初はあんなに心配だったのに、もう勝っちゃうかもしれない
そう思った直後だった

第五回戦目は競走の勝負。
キャップの一番の得意分野だった
最後の最後でこれが来るなんて、本当に…
キャップは運もいいからなぁ

流石にこれでは圧倒的にキャップが有利だ
このままではキャップが勝ってしまう

それはアタシにとっては、海斗のファミリー入りを意味しているん

だから、
本来喜ぶべきだったのかもしれないけど。
それでも最後まで海斗を応援しちゃうのは、好きなんだからしょうがないと
思う

でもこの勝負ばかりは正直不安だった
キャップの速さはみんな認めている
海斗はどうするんだろう？

アタシは色々考えたけど、結局これからの試合を見届けることしか出来なか
った

“頑張って、海斗”

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺たちは既にスタートラインに着いた
あとは合図を待つだけの状況だ

しかし、さっきの司会の言うことや会場の様子から見るに、対戦相手は随分
と足には自信があるらしい
それがどの程度のものなのかまでは、流石に会場の様子などからは想像する
ことは難しいが、用心に越したことはないだろう
最初は相手と並走しながら、様子を見るというのが、最善だろう

「風間ー、頑張って」

「一周差くらい、つけちゃえー」

いや、一周差は流石につけられたくないんだが…
まあ、慣れたもんだよな、アウェーなんて

「流川先輩、頑張ってくださーい」

「応援してまーす」

え、俺を応援してくれてる子なんて、いるのか
しかも、むさい男などではなく、女の子が。

そりゃ、若干機嫌が良くなるのは、男として仕方ないだろう
いやー、単純単純。

「では、位置について」

いよいよ、来るらしい
まあ、負けない程度に頑張るか

「よーい、……スタート！！」

ヒュン

いや、洒落じゃなく、そんな音が俺のすぐ隣から聞こえた
そして、風間翔一がありえないスピードで走り出しているのを認識した

…いや、まずいだろ！
俺もすぐに後を追う

速いというのは、予想していたし、警戒していたが、ここまでとは思っていなかった
こいつ、本当に足が速いじゃねえか。
いや、皆そう言ってたっつーの。

くそ、俺としたことが…！
警戒はしていたとはいえ、これは油断としか言いようがない
相手の実力を見誤っていたんだからな
油断にはあれだけ、危機感をもっていたにも関わらず…

作戦変更だ
並走なんて悠長なことは言ってられない
俺は相手のすぐ後ろ、背中に張り付くようにして走る

「なんか、流川は変なところを走ってますね、走りにくそうですけど」

「いや、あれはたぶん…」

スリップストリーミング。
カーレースなどでは、協力して使われるような有名な作戦だ
相手の車の後ろに付くことで、自分は空気抵抗を受けずに走ることができる
それをただ単に人間同士でやっているだけだ

ていうか、本当にこいつ速いな
もう、三週もしやがった

俺は肩で息をして、加えて息を切らせて走っている
足の動かし方も不規則にする
いや、流石に疲れてないのはおかしいからね

「流川の奴は相当疲れているみたいですね。それでも、付いていってるのは
凄いですが。」

「フフ、本当に凄いよなぁ」

見るからにヘトヘトな俺は、一定の距離を保ち、追い続ける
今は片手でわき腹辺りを押さえて、限界って感じだ

「流川先輩、頑張ってください」

「諦めないでー！」

「あと少しですよ、倒れないでください」

客席の一年生も心配してくれている
どうやら、完全に俺は今にも倒れそうっていう風に映っているらしい
いい感じだ

そんな状態でとうとう最終ラップに入ったらしい
そこで少し、前方のスピードが上がる

おいおい、勘弁してくれ
俺も距離を離されないようにピタリとその後につく

耳を澄ませてみる
前からは、スタート直後に比べて、多少乱れた息遣い。
やはり、若干の疲労の色が見てとれる
流石にこの距離をそのスピードで走って、疲れないなんてのは困るしな

これなら、いけそうだな

「いけー、風間ー」

「このままゴールだ！」

もう負けられないんだって

そして、本当に最後の直線に入る
ここだな…

俺は今まで絶対に位置を守っていた背中から横に出る
そして、不安定な姿勢はそのままに、急激にスピードをあげた
そう、あたかも最後の力を無理矢理振り絞ったかのように。

実際はスリップストリーミングで温存していた体力を使っているので、別段
疲労を感じるようなことはなかった
ま、地道な節約の勝利ってとこだ
悪いな、この勝負は俺がもらった

そう思った直後、何かに抜かれた
いや、何かではない

“風間翔一”

俺の競走相手しかいない
そいつは風のような速さで走っていた
どこにそんな力を残していたんだ

最後まで楽しませてくれる奴だ
本当に面白い
こちらの予想を悉く裏切ってくれる

こんな奴が率いるファミリーか…

さぞ、はちゃめちゃで騒がしいのだろう
だが、それだけに面白そうだ
そんな中に混ざるなら、少しは楽しめるかもな

“風間ファミリー”

入ってみてもいいんじゃないだろうか

残念ながら、そんなことは思わない
俺はあくまで自己中野郎だからな
団体なんかに所属して活動したら、そこを滅ぼしかねない
一子や由紀江は別として、よく思わない奴も絶対いるだろうしな

そんなことしなくとも、俺は自分で楽しみを見つけていく
ファミリーに入らなくとも、面白い奴らとは関われるしな
それに…

さらに走るスピードをあげて、追い抜く

…応援してくれてる子たちの前で敗北は御免だな

「1着、流川海斗！よって、川神戦役、勝者は流川海斗！！」

会場から割れんばかりの歓声が上がる

決着はついた

26話　「男の意地」（後書き）

ありがとうございました
走りで勝ってしまいましたね海斗が。
ファミリー入りはしないという方向でまあ決まってましたうだうだ引っ張ってきましたがね
では、次回もお願いします

27話　「正義の使者」（前書き）

さて、戦いも終わり、
その後の話ですね
では、どうぞ

27話　「正義の使者」

会場からの歓声はまだ鳴り止まない

「さすが、流川先輩！」

「はぁ、かっこよすぎます～」

「あんなに疲れながらも勝っちゃうなんて」

「でも、最後のほう、凄く速かったよね」

うむ、なかなか手こずってしまった
スリップストリーミング作戦をとってなかったら、やばかったかもな。なー
んつって。

ていうか、不自然な動きで長距離を走ってしまったから、なんか足が重い。
自分で作った策に溺れるとは…
まだまだ、修行が足りんな
いや、ほんとにあんな格好で一番最後のスピードを出したのは、確実に失敗
だったな、うん。足が訴えてるもの。

だが、俺にはやらなければならないことがある
足が痛くとも、そんなことは気にしてられない

男には果たすべき瞬間がある。それが今だ！

・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、ストラップよこせ」

「あ、ああ、はい」

「うむ、よろしい」

「本当にキャップに勝っちゃうなんてな、しかも走りで。俺も含めて、ファ
ミリーの皆は信じられない光景だったと思うぞ」

「いや、俺、体ボロボロだし。火事場の馬鹿力って奴よ、いや真剣で冥界見
えたね、ありゃ」

「え！？海斗、だいじょぶなの！」

「海斗さん、どこか怪我なさってるんですか！？」

おい、いつの間にやってきたんだ、君たち…
そんな大げさにとらないでくれよ、なんか嫌な予感しかしないから、本当に

怖いんだよ

「アタシが保健室まで連れてってあげるわ、ほら肩貸してあげる」

「私もお供します、海斗さん。肩をどうぞ」

「え、いや大丈夫。そこまでじゃないから。帰って寝れば、俺って大抵のこ
とは自己再生しちゃうし」

なんだ、どうした
2人とも、なんかキャラ変わってないか？
こんなにグイグイ来る感じだったっけか。

Ｓｉｄｅ　大和

今現在、目の前で2人の恋する少女による物理的な男の取り合いが絶賛開催
中である。

キャップに勝ったこの男。
やはり、キャップと同じように、何かしらの人を惹きつける力があるのかも
しれないな
しかし、キャップとは、全く違った性質の魅力なのだろうな
だが、あるのは間違いない
実際に引っかかった事例が2件も目の前に並べられてるなら、もは

や否定し
ようがないだろう

それにしても、今の2人の様子…

大方、キャップに勝った流川が一年生にもっと人気が出ると思って、危機感
でも持ち始めたってところだろうな
あの声援や歓声の量は流石に無視できない事態だもんな
“かっこいい”なんて言われてたら、そりゃ焦るだろうな、自分たちは思っ
ていても、絶対に言えないようなことだろうからな

いや、それだけじゃないか
なんか、互いに視線を数回交わしているような気がする
これはあれか
やっと、すぐ近くに恋敵がいるってのに、薄々気づいてきたか？

今更すぎるだろうが、恋は盲目って奴なのか

まあでも、そんなに危険が散らばっていたら、そりゃこんだけ、積極的にも
なるよな

というか、こんな空気の場所は非常に居心地が悪い
俺はあきれ半分に二人の健闘を祈りつつ、その場をあとにした

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「いや、だから保健室はいいって」

いまだ、少女たちとの攻防は続いていた
どうする、元気を証明するためにタップダンスでもするか
ステップを刻んでしまおうか

「止まれ、流川海斗！」

誰かの声が前から聞こえた
非常に真っ直ぐと通った声。
そして、呼んでいるのは俺の名前。

俺を呼ぶ奴なんて、限られている
だが、その筆頭であるお二方は俺の隣に陣取っている

ということは、誰だ？
そして、前にはその答えがあった

前に金髪の嬢ちゃんが立っていた
まあ、明らかにハーフだろうな、そんなオーラが出ている
そんな子がブロンドを風になびかせ、俺の眼前で仁王立ちという、
なんとも
おかしな状況に陥っている

てか、こいつクラスメイトだっけ
なんか見覚えあるんだよな…

あ！思い出した
こいつ馬に乗ってた奴だ
そうだ、そうだ。
俺って、結構人の名前とか覚えられるタイプなのかもな
こういうのって、人に好感もたれるだろ
世渡り上手ってやつか、俺そんな称号もらえちゃうか

「それで浜千鳥が何の用だ？」

「それは自分の馬の名前だ！！」

ありゃ、みすったみたい。
浜千鳥が馬の名前なら、こいつの名前はなんだよ

馬の子だろ……馬子？
え、まさかの蘇我氏だったりしちゃうわけ。
あれ、でもあいつって男じゃなかったっけ

「クリスティアーネ・フリードリヒだ！！一応、クラスメイトだろ！」

俺が思案顔で長い間沈黙していたのに、しびれを切らしたらしい
凄まじい勢いでそんなことを言われる

しかし、言われても全くピンとこないんだが…
うん、俺には永遠に社交的と呼ばれる日は来ないのかもしれない

「で、その蘇我スティアーネなんちゃらが、何の用だ」

「クリスティアーネだ！！お前は馬鹿にしているのか」

思っていることが口に出てしまった

いや、でも案外良い名前なんじゃない、蘇我スティアーネ。
ほら、なんか和洋折衷な感じが滲み出してさ。
これなら、戦争とか起こらないんじゃないかな、うん

「本当にふざけた奴だ、流川海斗」

「だから、用件を言えっての。俺も暇じゃねえんだ」

「お前、なぜ先程の試合で疲れている演技などした」

な！？
おいおい、なんでばれてんだ
自分で言うのもなんだが、完成度は高かったと思うんだが
実際、みんな心配してくれたしな

「クリ、どうしたの急に？」

「何のことだ？」

「とぼけても無駄だ。自分は父様の軍の訓練を幼い頃より、見てきた。本当
に疲れた者の動きは目に焼きついている」

おい、可憐な女の子がそんな汗臭いものを幼い頃より見てるんじゃ
ないよ
こんなことでばれるなんて、計画破綻もいいとこだ

「いや、疲れてないわけないだろ。今だって、足が悲鳴あげてんだよ」

「大方、慣れない走り方をしたから、痛めたのだろう。演技だとしか思えん
が、それでもあの走り方であのスピードを出せることは、今でも信じられな
いからな」

こいつ、エスパーか
なんで、そんなに見抜けるんだよ
これは嘘をつき続けても無駄なようだ

「ああ、確かに少しおおげさになっていたところはあるかもしれな

い。だが
疲れていたのは本当だし、何より、それでお前に文句を言われる筋合いはな
い。勝負に負けて、言い訳に使ってるわけでもないしな。」

「お前は真剣に勝負しているキャップに対して、ふざけた態度で臨み、あた
かも苦戦しているように演技した。これは相手への侮辱だ。自分はそれが気
に入らないと言っているのだ！！」

「だから、俺は…」

「本気でなど走っていない！キャップには悪いが、あれはまぐれでも何でも
ない。お前の走るスピードの方が遥かに速かった。実際には接戦なんかじゃ
なかった。ただ、お前が手を抜いていただけだ！そんな実力を持っていなが
ら、お前は…！」

なんか、怒りかたが尋常ではない
手を抜いたことがそんなに気にくわないのか

「だが、それはお前の主観的な意見でしかない。それを証明するものはない
し、もう過ぎたことだ」

「ああ、そうだな。だから…」

一呼吸をおき、言い放った

「流川海斗、お前に決闘を申し込む！」

27話　「正義の使者」（後書き）

ありがとうございました
やっと終わったと思ったらという感じですね
どうなることやら
次もよろしくお願いします

28話　「義の心」（前書き）

いやー、話数を重ねるごとに毎日更新の辛さが分かりました
いつまで続くんでしょうね
さて、海斗とクリスはどうなったのか
どうぞ

28話　「義の心」

翌日、俺はデジャヴに陥っていた

「だから、嫌だっつーの」

「駄目だ、自分と決闘しろ」

昨日も全く同じことがあったような気がする

あれ？一日経ったよな。
今日は昨日の明日で間違いないよな
意味が分からなくなってきた

そうだ、結局あの後…

～

「流川海斗、お前に決闘を申し込む」

「は！？なんで、そうなる」

「自分がお前と戦えば、実力が分かるだろう。自分との戦いで、その速さを

出せば、手を抜いていたことの証明になるし、たとえ出さなかったとしても
キャップの仇をとれる。自分は中途半端で勝てるほど、弱くはないからな」

「断る」

「なに！？」

「そんなもの俺にメリットがねぇじゃねぇか」

「だが、そうするのが最善だろう」

「だから、それはお前にとってだろうが！」

「むー、とにかく、自分と決闘をしろ！」

「絶対に嫌だっての」

埒が明かないと思った俺は、もう日が沈みかけ、すっかり暗くなりかけてきた校庭を足早に走り去った
正直、足の痛みなんて気にならなかった

〜

まあ、そんな一時的な逃避なんて、こうして翌日に登校してしまえ

ば、全く
意味をなさないわけだが…
そして、朝からこの昼休みまで、ずっとこんな感じが続いている

「自分と勝負するんだ」

「断るって、言ってんだろ」

「1回だけでいいから」

なんだそりゃ。
悪いお薬の販売でもお前はしてんのか
その1回で人生は駄目になるんだぞ。

そうかと思うと、突然なにかを閃いたように、ニヤニヤと俺に話しかけてきた。
何か、いい作戦でも浮かんだのか?

「ふ、お前は勝負から逃げるというのだな。この自分に恐れをなして、戦う
前から、敵前逃亡というわけだ。」

「別にそれで結構だが…」

「なに!?」

本当にどんな作戦かと思えば…

確かに逃げるなんて言われ方は癪だが、ここで勝負に乗ってしまったら、この目の前の知能指数が低そうな少女に、まんまと乗せられたということになってしまう。

なんか、そっちの方が不名誉じゃないか

俺の一瞬の間の脳内会議ではそういうような結論に至った

「ちょっと、クリ！なんでまた、海斗に絡んでるのよ」

そんな硬直状態にあった俺たちの間に一子が入ってきた

「なんだ、犬。自分は決闘を申し込んでるだけだ、あのふざけた試合は犬も見ただろう。何故、犬こそ、昨日からそちらの肩を持つ？」

「え！別に肩なんて持ってないわよ。た、ただ一生懸命走ったかもしれない相手に少し言いすぎじゃないかしらってだけで、別にクリと海斗が2人で話してるのを邪魔しようとか、そういうんじゃなくて…」

なんか最後の方はもごもご言っていたが、どうやら一子は俺の味方でいてくれるらしい。
俺なんかのために、あんなに顔を真っ赤にして、勢いよく怒ってくれるなんてな。
本当に良い奴だよなぁ

「自分はこの学校のルールに則って、決闘を申し込んでいるだけだ。どうあっても、受けてもらう」

「でも、海斗は迷惑してるし…」

だが、相手の意志も相当固いようだ
一子が仲介に入ってくれたまでは良かったが、またすぐに元の硬直状態に戻ってしまった
ふむ…どうしたもんか

永遠にこのときが続くのではないかと思ったそのとき、教室の前方のドアがひとりでに開いた
いや、外側から誰かが開けただけだな

「流川先輩、お弁当作ってきたので、私たちと一緒に食べてくれませんか！」

そこには緊張した面持ちの少女が三人くらい居た
どうも一年生らしいが、俺と面識はない
そう。知らない子なのだが…

「悪い、俺この子たちと昼飯食べる約束してたんだわ」

「え！？」

「じゃ、行くか。屋上でいいよな」

「あ…。は、はい！」

「え、ちょっと海斗！」

「おい待て、逃げるのか！」

使わせてもらわない手はないよな
一子には悪いと思ったが、こんな居た堪れない空気の中にいるのは、疲れる
んだ
あとで、ビーフジャーキーでもやるから、許せ

そして、海斗が居なくなった教室。
そこには取り残された2人がただ佇んでいた

いや、正確には…

「うう、海斗さんにお弁当を作ってきたのに、中の険悪な様子が変わるのを待っていたら、先を越されてしまいました〜」

「おー、大丈夫だ、まゆっち。次があるぜ〜」

廊下にももう1人いたのだった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今日は色々と大変だったな

結局、あの後はポテトサラダやら、アスパラのベーコン巻きやらをご馳走になって、去り際に礼を言ったら、なんか騒がれた

いや、終始なんか変なテンションではあったんだが。

一子にも、理由を話して、今度菓子でも買ってやると言ったら、安心したよ

うに"なら、しょうがないから許してあげるわ" なんてことを言われた

何はともあれ火種は解決だ

「流川海斗、自分と決闘をしろ！」

いや、しっかり燃え盛ってんじゃねえか
校門前にもう小火くらいまでいってしまったのではないかと思われる、ご存
知、元火種の蘇我ちゃんがいた

「お前も大概、しつこいな…」

「当然だ、たとえお前がつれない態度をとったところで諦めることはない。
自分の意志は曲げないからな」

「はあ、随分と殊勝な心がけだな。何がお前をそうさせる？」

「自分が信じるものは義の心だ。だから、その義は何があっても、貫き通す
と決めている。お前の曲がった行為はキャップへの侮辱であり、自分の義の
道に反する。だから、決闘をすることで道を正してやるのだ。それこそが自
分の信じる義であり、今の自分の動く理由だ」

まったく…

この学校はこんな奴等ばっかなのかよ

お節介と正義感、直情的性格にこの頑固さ、全部が欠けることなく集まって
こいつを構成しているらしい
あ、あと、少しアホなところもか。

―愚直
なんか人を小馬鹿にするときなどに使われる、融通のきかないばか正直。
だが、これはとんでもない美点じゃないだろうか
たとえ、その姿が愚かでも、真っ直ぐに。
自分が信じるもの“芯”を一本通して、ぶれることなく、前を向いて、立っ
てやがる

おまけにこの瞳だ
なんか、こんな真っ直ぐな瞳、つい最近も見た気がする
そう、タッグマッチで俺を見事に変えてくれたあの瞳。
ほんと、迷惑なもんだ

「分かった分かった」

「ふん、お前などに義の心が理解できたとは思えんがな」

「ちげぇよ」

「む？」

さながら、人の意志を変える魔眼ってとこか？
えらく危険なものだな

ていうか、こいつの意志が本物なのは、今確認した
断り続けたところで、ループするだけだろうな

ほんと、俺も変わっちまったよな

かばんを地面に放り投げる
そして、俺はクリスに向き直る

「決闘したいんだろ？やってやるよ」

じゃ、お望み通り、その意志に付き合ってやりますか

28話　「義の心」（後書き）

ありがとうございました
文中でも言ってますが、海斗結構変わりましたね
本質的なところは最初から不動なのですが、
なんというか考え方の方向といいますか、しっかり影響されてますんじゃ、次回も戦闘？ですかね

29話　「真剣勝負」（前書き）

なんだか、小説って難しいですね
おそらく、回を重ねるごとに自分のボキャ貧が露見するのでは
今回、戦闘ですね
どうぞ

29話　「真剣勝負」

―クリスティアーネ・フリードリヒ
ほんと、迷惑なほど真っ直ぐな奴だ
一子といい、由紀江といい、目の前のこいつといい、穢れのない奴が多すぎ
るな、俺の周りは。
迷惑なんだが、願わくばこいつらにはこのままの瞳でいてほしい
思っていてほしい、世界は綺麗なものなのだと…

「今すぐ始めようぜ、わざわざ観客の前でやる必要はない」

「だが、教師の立会いのもとでなければ…」

「だとよ、学園長」

「何を言っている？」

さっきから気配が感じられていた
いや、違うな。気配はなかった
そう、不自然なほどにその空間には自然の気配すらなかった

どんなに隠れるのが一流な奴でも、それは一部、つまり自分だけだ
広い視野で全体を見渡せば、違和感がどうしても露見する

「ほっほっほ、ばれておったか。やる気に満ち溢れた闘気を感じた

のでな。
気になって、見にきてしまったわい」

「確か学園長には特権があるんだよな」

「ああ、ワシがこの勝負、責任をもって見届けよう。決闘を許可する」

「だそうだ。武器のレプリカは持ってきたか？」

「相変わらず、生意気な小僧じゃ。当然、持ってきておる」

「自分は勿論レイピアを使わせてもらう」

「俺は…」

俺の本来の武器は己の拳。
だから、いつもならば、ここで何も選ぶことなく、戦闘突入なのだが…
それでは、あまりにも早く終わってしまう

こいつは正々堂々勝負することを望んでいる
眩しいくらい、自分の道を貫き通しているのだ
だから、俺はこいつに本気で応えてやると決めた
一切、手を抜かず、遊びは無しで、正面からぶつかってやる

「俺もレイピアでいく」

「なに！？」

ならば、使ったことのない得物で。
相手の得意とするフィールドで。
存分に戦って、勝利をもぎとってやろうじゃねえか
―だって、俺の本気を見たいんだもんなぁ。クリス。

「レイピアのレプリカは一本しかないんじゃが…」

「クリス、お前、実物持ってるだろ？」

「ああ、確かに所持しているが」

「お前はそれを使え、俺がレプリカを使う」

「な、お前自分が何を言っているのか分かっているのか！当たり所によっては、大怪我どころじゃないかもしれないんだぞ。最悪、死に至る可能性もある。そんなのは危険すぎるだろ！」

「馬鹿じゃねえのか、お前」

「なんだと？」

「慢心も大概にしとけよ。あとで恥をかくのはお前だぜ？」

「だから、なんだと言っている！」

「はあ、いいか？お前は俺のした勝負が侮辱だと言った。だから、俺はこの
勝負、真剣でいく。手加減なんてしてやらない」

「当然だ、それで？」

「だから、お前の攻撃なんて、一撃も当たらないから安心しろって、言って
んだよ、考えりゃ分かるだろ」

「何を言っている！慢心はどちらの方だ。それこそ、お前が自分の攻撃を全
て避けられる保証がどこにあるというのだ。そんなものを信じて、易々と引
き受けた結果、殺人者にでもなったらどうするんだ！」

「おい、学園長。そのやり方でいいな？」

「ふむ……」

「学園長？」

「俺は本気だぜ」

「…分かった、その勝負を許可しよう」

「本気ですか！？学園長」

「ほら、許可も下りたんだ。さっさと始めようぜ。それとも何か、いざ勝負
が始まるとなったら、お前が逃げ出したくなってきたか？」

「死んでも後悔するなよ。今から上がるのはリングだ。責任は取れない」

「絶対に取ることのない責任より、負けたときの格好良い言い訳でも考えて
おいたらどうだ？」

「く…、つくづく馬鹿にしている奴だ」

クリスと俺が数歩の間隔を空けて、対面する

クリスはレイピアを前に突き出すように構えていた
あれが、正しい構え方なのだろう
対して、俺は普通の長刀を扱うように体の横に構えた

レイピアは初めて扱うが、別段特殊というわけでもないだろう
結局は刺突に特化した剣だというだけだ
刀剣の類には変わりないだろう

得物の間合いは把握した
剣の長さは1メートルよりも少し長い程度
現在の立ち位置から、いきなり攻撃を仕掛けるのは少し難しい

ていうか、放課後の校門前なんて目立つところだから、若干のギャラリーが

集まるのは覚悟のうえだったんだが、人影は見当たらない
これは学園長がなんかやってくれたっぽいな
ありがたいかぎりだ

「それでは、これよりクリスティアーネ・フリードリヒ対流川海斗の決闘を
開始する。始めぇ！！」

その合図の瞬間、クリスが物凄い勢いで間合いを詰めてきた
それはスピードだけで相手が強いということが分かるほどだった

そして、俺が武器の射程に入ると、連続突きを繰り出してきた
その数もキレも、日ごろの訓練が垣間見えるような、質の高いものであった

俺はそれを、体全体を大げさに使ってかわしていく
ここでカウンターなどを狙うようなことはしない
まずは相手の力量をしっかりと見定め、その推測の強さにいくらか上乗せし
た力を持っているとして扱う
慎重に辛抱強く。
臆病者だろうが、結局これが最善の策である

「かわしているだけでは、自分には勝てないぞ」

「お前こそ喋ってる余裕があるのか？一発も当たってないぜ」

安い挑発には乗らない
そして、また避け続ける

攻撃の速さ、攻撃の間合い、次の攻撃までの間隔、攻撃の向き、相手の癖、
技の数、時折見られる例外の動き。
あらゆる事象を見極め、分析する

―準備は完了した

相手の連続突きが一旦止む
相手は次の攻撃に備えて、少し後退するが…

俺はその間を一気に詰める
カウンターの素振りも一度も見せなかった
そんな突飛な行動には対処ができないだろう

だが、クリスはそれに動じることもなく、真っ直ぐと俺にレイピアを突き出
してきていた
俺はかなりの速さでクリスに向かっている
当然、そんなカウンターに急には、人間では反応出来ない

しかし、予想していれば、無理なんてことはない

用心深いとでも言おうか
クリスは攻めの最中も、欠かさず俺の手の動きに目線をやって、気を配り、

カウンターを警戒していた
そんな防御重視のクリスならば、この攻撃に反応するのは明らか。
そのカウンターは予想済みだ

俺は今までのようなモーションの大きい回避ではなく、首を少しだけ傾け、
その突きを受け流した
首筋にレイピアのひんやりとした感触がある
レイピアの側面が斬れないからこそ、出来るギリギリ。
両刃付きのレイピアもあるっていう話だから、それは流石に試合前にしっか
りと確認済みだ

「なに!?」

いくら、クリスでもあの速さのカウンターを避けられるとは思わないだろう
驚いた声をあげている

俺は相手の懐に入ったところで、レイピアの柄でクリスの得物を掴む手の甲
を強打した
そして、握力が抜けたところで相手の武器に思い切り、横薙ぎの一閃を放つ
無論、それはクリスの手を離れ、遠くの地面に弾き飛ばされる

呆然とするクリスに俺は武器を振り上げ…

それを人の居ない方に放り投げた

「俺の勝ちだ」

完全な勝利のあとに言い捨て、去ろうとする

「待て、何故突きの一撃も放たない？それをしなければ、とどめとはならないぞ」

「別に必要があれば、何でもやるが、好き好んで、女に手をあげようとは思わねえよ」

「それは戦士としての自分への愚弄だ。本気で来ると言っただろう」

「お前は“本気でぶつかってくる奴には本気で応える”、それをしなかった俺がお前の言う義に反するといって、俺に立ち向かってきたな」

「ああ…」

「一本通った芯のようで、それが気持ちが良かったから俺は勝負を受けた。俺にしてみれば、無闇に人を傷つけないっていうのが、通したい筋なんだよ。だから、クリスが侮辱だ、愚弄だの言ったところで、俺がそれを曲

げること
は絶対にありえない。それが俺にとっての“義”だからだ」

「……お、お前は」

目をパチパチと瞬かせて、信じられないような顔をしている
疲れも出てきたのか、汗や顔の紅潮が凄い
というか、なんだか嬉しそうに見えるんだが…

「流川…海斗…」

「ま、要するに弱いものいじめはしたくないってことだ」

「な、なんだと!?」

「ん?俺に完膚なきまでにやられた分際で言い返す言葉でもあんのか?」

「む、むむむむーっ!腹立つー、海斗腹立つー!」

「は、悔しかったら精進しやがれ」

嬉しそうにしてやがると、からかいたくなる
なんかクリスはリアクションが逐一面白い
故になんかいじりたくなってしまうキャラであった

からかわれたクリスは顔を真っ赤にして、怒りを表していた

しかし、最初の刺々しさや敵対心はないようで。
言葉の端々からは幸せそうな感じが滲み出していて、ついこちらも笑顔にな
ってしまっていた

「…勝者　流川海斗」

その言葉は決闘に対してのものだったのだろうか
学園長の呟きは2人の空間を邪魔することなく、虚空に消えた

29話　「真剣勝負」（後書き）

ありがとうございました
きりのいいとこまで書いてたら、結構長くなりました
そして、クリスのフラグはどうなんでしょう
次回こそまた日常に戻れるようなそんな気がします

３０話　「人気と嫉妬は表裏一体」（前書き）

なんだかんだで３０話です。
結構書きましたね。
もうここまで積み重ねると、矛盾や重複が心配になります。
絶対ありますね、はい。
そんな感じですが、どうぞ

30話　「人気と嫉妬は表裏一体」

翔一、クリスとの連戦を終えた俺には、やっと安息が戻っていた

「海斗、今日一緒に二人でお昼食べましょ」

「ん？一子か。別にいいが、食堂か？」

「え、えっとね、今日はなんていうか、作ってきたっていうか…」

と、そこへ…

「海斗、おはよう！」

クリスがやってきた

「ああ、おはようさん」

「ちょっと、クリ！なんで、クリが海斗って呼んでるのよ」

「別に犬が呼んで良くて、自分が駄目だなんてことはないだろう。
なあ、そ
うだろう？海斗」

「俺は全然構わないが。むしろ名字より名前で呼ばれるほうが俺は好きなん
だ、前にも言っただろ」

「むー、確かにそうだけど…」

なんか、一子は何かに納得がいかないらしい
なんだっていうんだ

Ｓｉｄｅ　クリス

昨日の勝負。
海斗は宣言どおり、手を抜くようなことはせず、本来の戦い方をしてくれた
ように感じた。
自分の攻撃をかわしつつも、余裕があるように見えた

しかし、最後の最後で自分にとどめをささなかった
決闘は誇りをかけた勝負。
女、男と言う前にそれは戦士同士の戦いであり、当然自分も覚悟をしたうえ
で、戦いに臨んでいた

だが、海斗はそれは海斗自身の“義”であると。
絶対に曲げたくない自分の確固たる信念であると言っていた
まあ、その後に弱い者扱いをされたが…
完璧に負けた自分としては、言い返せる立場ではなかったのは事実だ

そして、海斗は言ってくれた
自分の生き方が気持ち良いと。
芯が通った生き方だと。

自分が信じる道だった
だから、誰になんと言われようが変えるつもりはなかったし、人の言うこと
なんて気にもとめなかった

でも、海斗はそんな自分の生き方を認めてくれた
人の評価なんてどうでもよかったはずなのに、とても嬉しかった
それは海斗が自分よりも強い者だったからなのだろうか。
それとも…

だが、まだまだ海斗は人をなめていて、自分の望む“義”には程遠い
これからも、傍で道を正してやらねばな

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　大和

「大和ーーーっ」

「分かったから、岳人何も言うな」

「ていうか、その顔を見れば、誰でも分かりそうな気もするけど」

そう、岳人はもはや涙目もいいとこだった
その原因は言わずもがな、前で笑っている金髪お嬢様なんだが…

「なんで、あいつばっかり、モテやがるんだ」

「世の中なんて不条理だらけだ」

「来世に期待しようよ」

「お前らはフォローというものを知らんのか」

まあ、岳人のダメージが大きいのも無理はない
今までは確かに、ワン子やまゆっちやその他の一年生、モテているのは男と
して、腹が立っていただろうが、岳人にしてみれば、彼女らは恋愛対象では
なかったのだ。
だから、まだ抑えられていた部分があった。

しかし、クリスは違う。
同級生で外人さんで、おまけに美人ときた。
岳人も勿論、恋愛対象というか、あわよくばなんて、狙ってもいただろう。

だが、今のクリスの目は完全に流川しか捉えていない
昨日までは敵意しか込められていなかったのに、1日で恐ろしい変

わりようだ
今の流川を見る目はまるで…

「はあ、なんていうかさ、大和」

「ああ、さらに基地に居づらくなりそうだな」

ワン子やまゆっちと同じ、恋する乙女のようだった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

よく分からないが、前の２人は何故か火花を散らし始めた

「いいわ、なら決闘よ、クリ」

「受けて立とう、犬」

「なんでもかんでも、すぐに決闘にもってくんじゃねえ」

「で、でも…」

「ならば、また海斗が相手になるか？」

「“また”？」

「おい、クリス」

変なことを言う前にクリスを引き寄せる
そして、小声で言った

「昨日の決闘のことはあまり口にするな」

「別にいいだろう」

「わざわざお前は自分の負けを言いふらしたいのか」

「な、なんだと！」

「いいから無闇に話すな。あれは俺とお前だけの秘密だ」

学園長も見ていたとか、そんなツッコミはスルーだ

「二人だけの秘密…」

「いいな？」

「あ、ああ、承知した」

何故か顔は赤いが、なんとか了解してくれたようだ
これで無事争いはなくなったわけだ

「かーいーとー」

うん、全然なくなってないな。
一子はお怒りの様子だった

「なに、二人だけで楽しそうに話してるのかしら？」

「いや、別になんでもないよな、クリス」

「・・・・・・・・・」

おい、黙るなや。
完全になんかあったと思われるだろうが。

「おい、クリス。おーい」

「・・・・・・・・・」

返事がない、ただの屍のよ…じゃなくて。
駄目だ、なんか明後日の方向を見て、心ここにあらずのようだ。

「秘密…」

え、なに?俺の話きこえてないの。
ちょっとお嬢さん、そのスタンス貫いちゃう感じ?

「かーいとっ♪」

いや、♪とかじゃないからね。
めちゃめちゃ不機嫌オーラが出てるから、なんか黒いから。
その後、一子をなだめるのに苦労したのは言うまでもない

Ｓｉｄｅ　一子

アタシの初恋、その相手が海斗なのは分かりきったことだ。
そう、恋を知ったのはついこないだの話。

それまでは恋なんて考えたこともなかった
興味がないとか、そういうのじゃなくて、本当に考える機会がなかったって
だけで、それでアタシの生活は普通に過ぎていた

でも、海斗に会ってから、守られてから、名前で呼んでくれてから、
…アタ
シのことを“パートナー”って言ってくれてから。
アタシの世界はそれまでとはガラリと変わった
恋がなかったアタシの世界は、海斗への恋する気持ちで溢れてしまった

今じゃ、まぶたを閉じれば、海斗の顔が浮かんでくるし、目を開けても、海
斗の姿を探しちゃう
本当に今じゃアタシの一日は始まりから終わりまで、海斗で埋め尽くされて
ちゃってる
修行のときでさえ、海斗のことを考えている自分がいる
まあ、それでおろそかになるようなことはなくて、逆に海斗のことを考えて
元気をもらってるくらいなんだけど……

い、いや、そんなことはどうでもよくて！
恋をすると、今まで見えてなかったことが見えてくる
自分の行動や思考が変わるっていうのは当たり前だけど…
そう、周りの変化にも気づくようになってしまう
つまり、分かっちゃう

“クリスも海斗を好きになったんだ”って

まゆっちのときも、そうだった
最初は自分のことでいっぱいいっぱいで周りを見る余裕なんてなかったんだ
けど、今見れば、はっきりと断言できる
まゆっちも海斗を見る目が恋をしている目なんだ
たぶん、アタシもおんなじ目をしてるんだろうな

そして、海斗は一年生にも人気があって、次はクリスだ
なんで、アタシはこんな大変な人を好きになっちゃったんだろう
でも、その道からアタシは外れない、どんなに険しくても…

―心から、好きだから

海斗が一筋縄でいかないのなんて、分かりきっていたことだなんかクリスと二人で話していて、何かを隠してるみたいで、つい
つい言葉
にいらいらが表れちゃうけど。
今日のお昼で挽回してやるもんね、だから今は許してあげる。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

30話　「人気と嫉妬は表裏一体」（後書き）

ありがとうございました
クリスはまだはっきりとは自覚してはいないです
というか、恋と認めてはいない？みたいな。
自分で書いてて、わけわからんですね、どうぞスルーしてください
（笑
そして、次回はまたお弁当ネタ。
このワンパターン思考回路をどうにかしてください

31話　「愛の形」（前書き）

先に言っときますと、今回最長です
まさに衝動で書いてたら、止まりませんでした
では、どうぞ

31話　「愛の形」

数時間前の一子の決意。
“今日のお昼で挽回してやるもんね”
それは目の前のカオスな状況によって、かき消されていた。

「・・・・・・」

「海斗さん、どうぞ食べてください」

「海斗、自分のいなり寿司をやろう」

そう、約束の昼休み。
屋上には何故か当初の予定より多い、少女3人と彼女たちに囲まれる男子学
生の姿があった。
そもそも、こうなったのも…

～

チャイムが四時限目の終わりを告げる。

「じゃ、早速いきましょ、海斗」

「おう、屋上でいいな」

「うん」

そう、朝の約束通り、一子と海斗は一緒に食事をするのだ。
場所にいつもあまり混んでいない屋上を選び、いざ教室を出ようとしたとき
のことだった。

「む、どこへ行くのだ、海斗」

教室から一緒に出ようとした二人を呼び止めたのはクリスだった。

「屋上で飯食べてくる」

「なら、自分も行こう」

「な!?駄目よ、クリ。今日は海斗と……ふたりで」

「なぁ、海斗はいいだろう?」

「まあ、何人で食ったって、味は変わらんしな」

「よし、ならば決定だ。早速、行こう」

「ちょ、ちょっと!」

若干一名、納得していない者がいるのだが、海斗がそれに気づくはずもなく、
三人が教室の外へ向かおうとする。
そして、ドアを開けると…

「あ、海斗さん」

「おう、由紀江か」

「あの、海斗さん、今日もお弁当作ってきたので、一緒に…」

「え!?まゆっちまで」

「今日は一子とクリスも一緒だが、いいか?」

「あ…、はい」

「じゃあ、屋上に行くぞ」

〜

そして、現在の状況が出来上がっているわけである

「海斗、どうだ、いなり寿司は。美味いか?」

「ああ、普通に美味いが」

「それなら良かった」

「海斗さん、今日は魚の煮付けを作ってきました」

（うわ、まゆっちのお弁当レベル高い）

「うむ、由紀江は料理上手いな」

「あ、ありがとうございます」

（やっぱり、味も美味しいんだ…）

「一子は何も食べないのか？」

「え！？あ、アタシは……今日は食欲ないから…」

「ん？そうなのか。具合でも悪いのか」

「いや、朝ごはん一杯、食べちゃっただけだから。本当に心配はいらないわ」

「なら、いいけど」

（まゆっちのお弁当に勝てるわけないよ…）

一子が持ってきたお弁当は昼休みが終わるまで、出されることはなかった。
そのことは一子しか知らない。

昼休み前の決意は空しく、一子の初めての頑張りは伝わることがなかった。
そのことも一子しか知らない。

（なに、やってんだろ…アタシ）

―涙すら流せなかった。

Ｓｉｄｅ　一子

「はっ！」

目が覚める。
どうやら、四時間目の授業中に寝てしまったっぽい。
今日、いつもより早く起きたからかな？

それにしても…
本当にひどい悪夢だったわ。
なんか、妙にリアルだったし…
海斗の鈍感さから言えば、正直ありえなくないと思う。

ていうか、アタシ持って来ちゃって、誘ったけど、海斗にお弁当渡せるのかな？
そりゃ、早起きして、なんとかちゃんとした物になったはずだけど…
まぁ、そのおかげで、今寝ちゃって、あんな悪夢を見たんだけどね。

いや、でも今の夢のおかげでいい危機感を持てた。
もし、どんなことが起こっても、絶対に海斗にお弁当を食べてもらおう。

たとえ、海斗の口に合わないかもしれなくても、誰かのものに劣っているか
もしれなくても、このお弁当はアタシが海斗のことだけを考えて作ったもの。
初めての好きな人に受け取ってほしい。
詰め込んだ思い、伝えたいから。

かといって、出来れば邪魔はされたくない。
アタシだって、その……海斗を好きなわけだし。
二人っきりでご飯とか、食べれたら嬉しいなんて思うわけで。

キーンコーンカーンコーン

四時限目終了のチャイムが鳴る。
アタシは目的のために、すぐに海斗のもとへ行く。

「海斗、屋上にいきましょ」

「お、一子、早いな。んじゃ、行くか」

よし、成功！
やれば出来るじゃない、アタシ。
これも事前に知らせてくれた夢のおかげかも。

「海斗さん」
「海斗」

…全然、成功じゃないじゃない。
教室を出た途端、まゆっちとクリスに声を掛けられた。

待って、こんなにベタなことって、あるものなの？
これが大和が言ってた、“まさゆめ”とかいうやつかしら。
でも、絶対海斗にお弁当は食べてもらうんだから。
そんなとこまで、夢の通りにするわけにはいかないわ。

「お昼一緒にどうですか？」

「自分と食べに行こう」

「悪いな、今日はあんま食欲ねぇんだ」

「え！？」

驚いて、声をあげてしまったのはアタシだった。

「そうですか、分かりました…」

「なら、仕方ないな」

そう言って、クリスとまゆっちが去っていく。
これは予想外のラッキー

…じゃなくて！
え？どういうことなの？

「え、海斗、食欲ないの？大丈夫？」

「は？なに、言ってんだ。普通にあるぞ」

「だって今…」

「今日は“二人”で食いたいんじゃなかったのか？」

「あ…／／／」

こんなの反則だ、ずるいずるいずるい。
ただでさえ、嬉しい言葉なのに。
夢があんなだっただけに、不意打ちもいいとこだ。
顔だって、真っ赤だと思う。

「じゃ、今度こそ行くか」

「う、うん」

そして、アタシたちは“二人”で屋上に向かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺たちは屋上にあがってきた。

「で、俺は何も持ってきてないんだが。」

「あ、アタシがお弁当作ってきたから。」

「お、そうか。サンキュ」

なんか、俺の周りは弁当作ってくれる子が多いな。
皆、優しいねぇ。

「う、うん。じゃあ、これ…」

そんな卒業証書じゃないんだから、両手でかしこまって渡さなくても。
俺は一子から、弁当を受け取る。

「開けていいんだよな」

「は、はい！」

何故、敬語？
おかしな一子を放っておき、弁当を開ける。

中には色とりどり沢山のおかずが入っていた。
ミートボールに動物の串が一個一個刺さっていたり、ナポリタンが小さい入
れ物に小分けにされていたり、人参がハート型に切ってあったりと。
この前の由紀江の弁当は、料理が出来る奴の弁当って感じだったが。

一子の弁当は、なんか全体的に可愛い感じで溢れている。

しかも、なかなかに美味そうだ。

俺が食べようと、ミートボールに手を伸ばすと…

その前に他の手が伸びてきた。

何かと思って、そちらを見ると、一子がこちらにミートボールを差し出してきていた。

手震えてるし、顔が明らかに真っ赤なんだが、大丈夫なのか。

「ほ、ほら、海斗！口開けて、あーん」

「あ、ああ…」

“あーん”って…

恥ずかしいんだったら、無理してやるなよ。

ったく、よく分からん奴だな。

「あー」

「は、はい」

大人しく従って、口を開けると中にミートボールが入ってきた。

「ど、どうかな？」

「うむ、美味いぞ」

「そ、そう？なら良かった」

そう言って、満面の笑みを見せる一子。
その可愛らしい笑顔を見て、一子ってもてるんだろうなー、とか思ってみたりする。
性格もよくて、誰にでも分け隔てなく接するもんな。
そんな一子に好きになられる奴は幸せだろうが、大変そうだな。
ていうか、弁当なんてもらってる俺もあぶねぇんじゃねえのか？

「海斗、もっと食べない？」

「あ、ああ。もらうぞ」

「わかった、……ふふっ♪」

まあ、何故かこんな上機嫌だから、いいんだけどな。
ただ、冷静にこの食べさせられてる状況を考えると…
なーんか調子狂うんだよなぁ
うーむ…よし

Ｓｉｄｅ　一子

なんか、アタシ、夢の反動ですごい大胆なことしちゃった。
自分から、海斗に…海斗に…、あ、“あーん”とか、しちゃったり！
もう自分がどうにかなっちゃいそう。

海斗も美味しいって言ってくれたし。
頑張って、研究したかいがあったわ。

もっと、この幸せの時間を味わっていたい。
そう思って、また海斗に食べてもらおうとすると…

「一子、お前も食え。ほれ、口開けろ」

「へ？」

目の前の状況が飲み込めない
目の前に差し出されるミートボール。
うん、これはアタシが今朝、作ったものだ。間違いない
そのミートボールに刺さったウサギの串。
うん、海斗が動物好きだってことを考えて、アタシが用意したものだ。これ
も間違いない
で、その串を持っている手が海斗ので……って！

え！？海斗がアタシにミートボールを差し出して、食べさせようとしてくれ
てるってことじゃない！

どどど…どうしよう！
いや、答えなんて出てるんだけど、頭がパンクしてて…

「ほら、一子の作った奴美味いだろ？」

「ん……」

だけど、体は正直らしくて、無意識で口を開けてたらしい
確かにとっても美味しい。
だけど、これはアタシの腕っていうよりは…ね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その後も、海斗と一子は時間ぎりぎりまで平和な時間を過ごしていた
もっとも、一子からすれば、平和というよりは戦いだったのだが。
無事、勝利を収め、褒美まで献上された少女は終始、笑顔だった。

だが、平和とは長く続かないものだ。
平和を乱す影は動く。

「流川海斗か…」

31話　「愛の形」（後書き）

ありがとうございました
この小説の主成分は妄想ですね
今回それが爆発してます
正直、手が止まりませんでしたから
そして、なにやら不穏な空気…

32話　「重すぎる愛」（前書き）

毎回、感想をくれる方、本当にありがとうございます。
自分が毎日更新を続けられているのは、そのおかげです。
この場を借りて、お礼を申し上げさせていただきます。
では、どうぞ。

32話　「重すぎる愛」

平和な昼休みはもう終わり、一人帰路についていた。
今日は美味い昼飯も食ったことだし、晩飯代節約しようかな
そんなことを考えながら、橋を渡っていると。

む？
前から、何か気配を感じる
少数の不良だったら、軽くひねりつぶしてやるのだが。
前から感じる気配は数も多ければ、いつもの雑魚というわけでもない。
ちょっとばかし、強い不良でもいんのか？

面倒だが、仕方ない。
今歩いてきた道を引き返そうとすると…

後ろからも同じような気配を感じる。
囲まれたか…
なんだなんだ？今までの奴らの復讐にでも来たってか。
だが、報復なんて面倒を回避するために一瞬で仕留めてきたはずなんだが。

流石に適当な相手へのかつあげには数が多すぎる。
明らかに狙っての行動だってことは分かりきっている。
まあ、ポジティブに食後の運動だとでも思うか。

そう腹をくくる。
そして、だんだんと俺を囲む輪は小さくなっていき、敵の姿が視認できるよ

うになってきた。

だが、その目に飛び込んできたのは、釘バットなんかを持ったひどいセンス
の服をまとった目つきの悪い不良などではなかった。

持っているのは、銃のようなもの。
アクセサリーなどの類はなく、その身は整った軍服？のようなものに包まれ
ており、服装の乱れなんてものは見当たらなかった。
いや、まあ目つきはそんなによろしくないが…

これはもう大変なことになってきたんじゃないか？
だってねぇ、皆さん眼光がぎらついてるもんなー。
しかも、そそがれている先はこの俺一点というね。
もう完全に俺がターゲットなのね、はいはい

そんな野郎どもの中から一人の女が出てきた。
左目には眼帯。紅い瞳に紅い髪、それは弱い者など軽がる飲み込むような印
象を与える深い紅蓮だった。
服装も他の奴らとは違い、大量にいる同じ軍服の男どもの中で一人だけ突出
しているというか、そんな印象を受けた。
まさに紅一点だな
…はいはい、面白くない面白くない

「貴様が流川海斗だな」

「悪いが、人違いだ」

「嘘をつくものではない。こちらで調べはついている」

「じゃあ、聞くなよ」

「形だけの確認だと、分かりなさい」

随分と偉そうな態度だな（↑自覚なし）
とりあえず、話も通じない奴ではないか。

「見たところ、軍人か何かか？」

「いかにも。私は軍の少尉である、マルギッテ・エーベルバッハだ。ここに
いるのは、誇り高きドイツ軍の我が部隊だ」

「その誇り高い軍人が一般人に大量の銃を向けてんのは、一体どういう了見
だっての」

「安心しなさい。それは強力な麻酔銃だ。殺傷能力はない」

「いや、安心する要素なんて無かったんだが。そうじゃなくて、俺が聞いて
んのは、何の用だってことだよ」

「貴様、お嬢様に何をした？」

「は？」

「何をとぼけている、貴様の卑劣な行為は今更、隠せるものでもないだろう」

「いや、待て。色々、なんか誤解もあるようだが、まず、まずはだ。そのお
嬢様っていうのは誰だ？」

「当然、クリスお嬢様のことに決まっている」

「あん、クリス？あいつって、軍の関係者なのか？」

「クリスお嬢様はドイツ軍中将フランク殿の娘だ」

「へぇ…で？なんで俺が軍に狙われてるんだよ」

「お嬢様に手を出しておいて、何故だと？おかしなことを言う」

「は、もしかして俺がクリスと友達だってだけで、狙われてんのか？」

どんだけ、溺愛してやがんだ、その親父は。

「友達だと？とぼけるのも大概にしろ。あのお嬢様の様子は……チッ。一体、
どんな手を使ったんだ、催眠術の類か？それとも、弱みでも握って

脅迫でも
したか？」

「言ってる意味が理解できん」

もしかして、あの決闘がばれてんのか？
そうだとしたら、娘を敗北させられて、お怒りなのか。
それでこの軍を呼んじゃうわけか。

めっちゃ甘やかされて、育ってきたんだろうな。
薄々感じていた、空気の読めなさにも合点がいった。

「お嬢様から手を引きなさい。そうすれば、酷い目にはあわせない」

「だから、あっちから話しかけてくるんだっつーの」

「どうしても拒否するということらしいな」

全然、俺の言い分、聞いてくれねぇよ。
こりゃ、言うだけ無駄か。

「ならば、体で分かってもらうしかない」

「おいおい…軍事力を何に割いてやがんだ」

「構え！」

一斉に無数の銃口が俺に向けられる。
その方向はまさに四方八方、死角なしの全面攻撃だ。
まあ、麻酔銃らしいけどな。
なんにも嬉しくないが。

「この状況でも気持ちは変わらんか」

「・・・・・・・」

「だんまりか。よろしい、ならば、その身をもって味わいなさい。
…撃て！」

俺は引き金が引かれようというその瞬間、立っていたその場から跳躍した。

連続した射撃音が耳に響く。
無事に一発も当たらなかったようだ。

全方位攻撃といっても、いや全方位攻撃だからこそ、その弾道は予想できる。
囲まれているということは流れ弾が確実に誰かに当たってしまうのだ。
すると、相手の足の方を狙うのが、ベストということになる。
跳弾しないようにする弾なんて、作ろうと思えば作れるだろう。
それに殺傷性はない麻酔銃だって言ってたしな、そもそも跳弾の心配なんて

ないか。

着地すると同時に一番近い軍人に走って向かう。
当然、相手はこちらに撃ってくるが…

今度は弾をしっかりと見ることが出来る。
弾だろうが、パンチだろうが、見えれば大差は無い。
避けるスピードを少しあげれば、いいだけのこと。

俺は最小限の上半身の動きだけで弾をかわすと、その軍人の腹部に当て身を
見舞う。
悪いな、手刀とかスマートなことをしてる余裕はねぇんだ
そいつから、銃を強奪した。

俺は手にした銃で、一発一発確実に軍人を気絶させていく。
勿論、相手の銃撃には絶対当たらない。
あくまで、避けることの方が優先だ。

てか、強力な麻酔使ってやがんな。
軍人がバタバタ倒れていきやがる。
即効性ありすぎだろ。
さぞ、充実した軍なのだろう。
指揮している奴に問題がありそうだがな。

撃っては避け、避けては撃つ。
あとはその作業の繰り返しだ。
弾数がなくなったら、また他の奴から銃を奪い、また弾数だけの相手を殲滅。
地道だが、確実に。

数分後、俺の周りには遺体のように軍人たちが転がっていた。
いや、俺は何も悪いことしてないからな。
絵面だけ見たら、そりゃ誤解されてもおかしくないけども。

そりゃ、銃を持って、倒れている大量の軍服の中に、立っているんだからな。
想像したら、かっこいいとか思うだろうが、大間違いだぞ。
完璧に大量殺人犯にしか見えないからな。
悪人でしかないわ。

まあ、無傷だし。文句はないか
後半は作業だったな、なんか前やったゲームのようだった。

「とりあえず、ステージクリアってことで」

そう呟いて、肩の力を抜く。

「……フフ」

だが、ゲームは終わらない。
海斗は第二ステージに行かなければならないのだった。

32話　「重すぎる愛」（後書き）

ありがとうございました
なんていうか、海斗が普通じゃないことは
もう明らかって感じですね。
武器ありとはいえ軍を1人でやっちまいましたからね
次回はどうなってしまうのかと。

余談ですが、暇な方は活動報告も見てくださるとありがたいです
たまになんかほざいてるので（笑

33話　「狩る者と…」（前書き）

今更すぎますが、R－15ってどこからなんですかね。
血が出たら?身体的に破壊されたら?
なんか、基準が分からないんですよね。
これからもつけなくて大丈夫かなぁ…

33話　「狩る者と…」

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

ふっ、流川海斗、面白い
フランク中将の命令であり、クリスお嬢様を守るためと思って、あまり気が
乗らない、ひ弱な野うさぎを狩りにきたんだが…

思わぬところで獣は発見できるものだ
麻酔銃という強力な武器があるとはいえ、あの大勢の精鋭部隊に、この短時
間で勝利してしまうとは。
しかも、銃弾をかわすときのあの動き…
まるで見切っているかのような無駄のない回避だった

受ける印象は完全に弱者のそれだと思っていたのだが…
“人は見かけによらない”なんて、一度たりとも信じたことはなかったが、
こいつに関しては信じざるをえないな

こいつなら、あるいは少しは楽しめるだろうか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「この銃って、結構軽いんだな」

流石、良い武器は違うといったところか
1つくらい持って帰っても、罰はあたらないだろうか

「じゃ、帰ろっかね」

帰るのを邪魔してた軍人さんもお休みのようだしね
そして、橋を進もうとするのだが。
目の前に立ち塞がった、あの女少尉が。

「なんだ?まだ、何か用なのか?倒したんだから、帰っていいだろ」

「まだ私が残っている」

「お前もそういうタイプなのね…。悪いけど、俺は別に自ら女の子に手を出
そうなんてことはしねぇんだよ。銃なんて向けるかっつーの」

「お、女の子!?貴様、馬鹿にするのもほどほどにしなさい。私は軍人であ
り、戦いのプロだ。言葉に気をつけなさい」

「いや、職業がどうだろうと、関係ないだろ。まあ、誇りがどうこうっての
は分からんでもないが…つってもなぁ」

「私と勝負して勝利する。それしか、貴様が家に帰れる方法はない」

「おいおい、勘弁してくれ。俺はさっきの戦いでヘトヘトなんだよ。限界な
わけ、分かる?何を勘違いしてるかは知らんが、今の俺と戦ったところで面
白くないぞ」

「ふ、何を言うかと思えば…。貴様の状態がどうであろうと、現時点での全
力をもって、戦いに臨めば、私はそれで満足だ。貴様がどれだけ疲れていよ
うが関係のないこと」

(微塵も疲れていないようだがな…)

こいつ、俺が疲れてないってこと、見抜いてやがるなだが、何を言ったところで無駄と判断し、この対応。

はあ、まったく疲れる相手だクリスといい、こいつといい、なんで軍の関係者はことごとく俺の演技を見抜いてくんだか…。やりにくいこと、この上ないな

「鬼だな。流石軍人ってとこか?強引過ぎやしないか」

「強引だろうがそんなのは私の知るところではない。私は貴様と戦うことで
戦闘欲を満たす。ただそれだけだ。貴様からはただの野うさぎとは

違うにおいがする」

（私と同じ狩る側のにおいがな）

「おいおい、軍人がバトルジャンキーなんて、色々と問題があるんじゃないのか？よくクビになってないな」

「それだけ実力を買われていると理解しなさい」

「ん～、しょうがねぇな。俺だって自分の命の方が大事だからな、相手が女の子だろうと、必要とあれば、銃を使うのもやむなしだ。どうしても、俺の邪魔をするっていうなら、ここら一帯に転がってるお前の部下同様、眠ってもらうが、どうする？」

そう言って、麻酔銃の銃口を相手に向ける勿論、引き金を引こうという気持ちなんて、これっぽっちもないがな。

ただの脅しだ

俺が素人とは言っても、さっきの戦いを目の前の女軍人は見ているそう、俺が一発も銃弾を外していないこともだ

脅しは十分な効果を持っているだろう

「もしかしなくとも、私は脅されているのか？」

「そんな滅相もない。俺は今日は体調が優れないから、帰らせてくれって、
言ってるだけだぜ」

「随分と態度のでかいお願いだな」

「ま、そういうことだ。今日のとこは大人しく…」

次の瞬間、拳がとんできた
その動きを見る限り、銃の脅しなんて全く効果がないようだった

「なっ、あぶね！」

「やはり、回避能力だけは本物のようだな」

「そりゃ、どうも。痛いのは嫌だから、こっちは必死なんだよ」

「それにしては無駄のない動きだがな」

「気のせいだっつーの、偶然だ偶然」

こいつ、本当に見透かしてきやがる
もうほとんど、何言っても無駄な気がするが、一応返しておく

「ならば、これは避けられるかな？」

そう言うと、相手はどこからかトンファーを取り出した
なるほど、それがお前の愛用の武器ってところか
警戒レベルを上げといた方がよさそうだな……って！

ヒュン

トンファーが鼻先をかすめる
こいつ、段違いにスピードが上がりやがった
武器でリーチも長くなっているのは分かるが、拳のときとここまで違うもん
なのかね。
おそらく、トンファーの扱いは幾度もの戦場での経験によって、仕上げられ
たものなんだろうな
少しも気は抜けないな

「よく今のをかわすことが出来たな」

「いや、身の危険を感じて咄嗟にね…。っていうか、お前は一般人の命を奪
うつもりなのかよ」

「この期に及んで、一般人などとはよく言う。心配せずとも、気絶くらいで
済むから、命の心配はない」

そう言って、次々と縦横無尽なトンファーの攻撃が繰り出される
縦、横、横、ななめ、横、縦、ななめ、ななめ、縦
規則性なんて、全くない連撃が襲ってくるが、焦ることはない
1つ1つをしっかりと目で捉えて、対処していく

避け続けていれば、相手も疲れてくると思ったのだが、どうやら違うらしい
時間が経つ度に、攻撃の密度や激しさは増していった
普通の奴なら、何事かと、心を乱されるだろうが…
攻撃のパターンに慣れてきた俺には今更速くなろうが、強くなろうが関係の
ないことだった

落ち着いて、相手の隙を探す
どんなに速く攻撃を行ったとしても、その攻撃間の隙というのは絶対になく
すことは出来ない
…ここだな
俺はその隙にカウンターを入れる

「なっ！？」

相手が驚いて、後退する
まあ、そうだよな、戦闘中にデコピンされれば、誰でもそうなるだろう
極めて正常な反応である

「どうやら、馬鹿にしているようだな…」

あれ?もしかして、怒りでも買っちゃったか

「ならば、こちらも本気を出そう」

そう言うと、おもむろに眼帯を外す
てっきり、戦場で目に傷でも負ったのかと思っていたが、中身は綺麗なもん
だった

「Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｄ！」

「な！？」

馬鹿だった。迂闊だった。油断していた。
相手はきちんと“本気を出す”と言ってくれていたのに。

次の瞬間の攻撃は、明らかにさっきのが別人と思わせるような変容ぶりであ
った。
威力もあがっていたりするのだろうが、何より迅い
しっかりと、もっと大げさに警戒していれば、反応できただろうが、そんな

いきなりの攻撃に俺は回避行動をとる暇がなかった
そして、俺は咄嗟に…

バキッ

体に凄まじい衝撃がはしる
おー、これはやばい威力だったんじゃないか。

「なん…だと…」

目の前には呆然とするマルギッテ。
その手には無残に折られたトンファーが握られていた

「危なかったぜ、銃を持ってなかったら、やばかったな」

「馬鹿な…、このトンファーはドイツの高価な木材で作られている
特別製の
ものなんだぞ」

「所詮、木は木だったってことだろ。鉄の方が硬度があったってだけだ」

「ありえない…」

いや、なんかそんなに落ち込まれると罪悪感が…。
え、もしかしておばあちゃんの形見とかじゃないよね。

やめてよ、そういう取り返しのつかないのは。

「まぁ、そのなんだ。お前みたいに強い奴が俺みたいな逃げ腰の奴を相手にしてたら、自分の品位を下げるだけだぜ」

「慰めてでもいるつもりか…」

「いや、俺が女の子を泣かしている最低野郎だと思われないための、せめてもの自己防衛だ」

「く…！また、女の子などと。それに泣いてなどいないだろ！」

「いや、言葉のあやって奴だよ」

「・・・・・・・・」

そんな目で睨まないでくれ、頼むから本当に俺が泣かせたみたいになるだろう

「まあ、怪我はないよな。トンファーは悪かったが、経費かなんかで落としてくれ」

「逃げる気か」

「お前はまだ言うか…。そんなのはまた今度な。あー、それとそのホットドッグだかなんだかに言っておけ。俺は誰に何と言われようが、クリスと友達でいることをやめるつもりはないってな。俺を縛れるなんて、思わないことだな」

「ふん……。フランク中将だ、馬鹿者…」

「じゃあな」

銃を放り投げて、俺はやっと家へと向かう
今日はなんか凄い濃い一日だった

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

はあ、完敗だ
眼帯をとった状態で、手も足も出なかった
そして、勝負に負けた挙句、女の子扱いされて、優しくされるなど…。

トンファーも粉々に砕かれた
だが、おかしい
演習のときもあんな銃くらい軽々と壊せたはずだ

それなのに…

そこへ流川海斗の放った銃が目に入る
これに私は負けたのか…

む？
何か違和感を感じる
そう、その銃は弾が減っていること以外、新品のように綺麗だった
傷一つついていないのだ
仮にトンファーがこれに壊されたとしても、ぶつかり合って、傷一つないの
は、どう考えてもおかしい

「どういうことなんだ？」

考えても考えても、なかなか疑問は解決しなかった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「へっくしゅん、ああー、手いてぇ」

33話　「狩る者と…」（後書き）

ありがとうございました
海斗の強さ、一瞬だけ片鱗が見えましたね
本当にあくまで一瞬ですが…
さて、これからどうなることやら

PS
活動報告にコメントくださった方はありがとうございます
キャラ紹介についてはもう少し考えます。
作るとしても、？ばっかりになりそうですが（笑

３４話　「八つ当たり」（前書き）

今回からまた日常編ですかね
ここのところ戦い続きでしたから。
ダラダラに付き合っていただけると嬉しいです

３４話　「八つ当たり」

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

「中将殿、申し訳ありません」

「少尉、まさか君でも敵わなかったとは…。見たところ、他の堕落した日本
人と何も変わらぬ、脆弱な人種だと思っていたのだが。私もそこまで能天気
ではない。少尉の実力はこれまでの功績からも認めている。そして、どんな
に簡単な任務でも手を抜かず、必ず成功させる。ましてや、クリスの姉代わ
りでもあった君が力を出し惜しみしたとも思えない。それでも、負けたとい
うことは、本当にその流川海斗という男にはそれ相応の実力があると見てい
いのだろう」

「はい、負けた自分の意見など言い訳にしか過ぎませんが、あの流川海斗の
実力は本物です」

「少尉にそこまで言わせるとなると、こちらも胡坐をかいている場合ではな
さそうだな、もっと本腰を入れなくては」

「中将殿、もう一つご報告したいことが…」

「む、なんだね？」

「私の所持しているトンファーを破壊することは可能ですか？」

「そうだな、実力を持っている少尉には頑丈なものをと思って、あれが最適だったと考えたのだが、流石に重火器での攻撃までは耐えられんだろうな。まあ、めったには壊れないだろう。どうかしたのか」

「やはりそうですか…、実は流川海斗にそのトンファーを砕かれました」

「何！？確かに人間の手で作られた物だ。絶対に壊れないということはありえないが、あれを砕かれただと…、どうやってだ。相手は何か強力な武器を持っていたのか」

「それが、相手の所持していたのは我が軍が使っていた強力麻酔銃のみ。壊されたのも一瞬すぎて、手段は判別できなかったしだいです。本人は銃で攻撃を防いだように振舞っていましたが」

「当然、眼帯を外していたのだろう？」

「はい、その直後でした」

「ふむ…、その状態の少尉でも見抜けない速さ。しかも、あの麻酔銃は麻酔
こそ強力だが、その本体は軽量化を目指して作られ、耐久性などないはずな
のだが」

「そのことなのですが、私が確認したところ、その銃には傷一つ付いていな
かったんです。本当に傷一つ…」

「ならば、銃で防いだという線はなくなる。嘘と思った方がいいだろうな。
先程も言ったように、耐久性がないのに無傷だというのは、使っていないと
考えるのが妥当だろう。しかし、それならどうやって…？」

「中将殿、これは憶測なのですが、流川海斗はこれを素手で破壊したのでは
ないかと思われます。にわかには信じがたいですが…」

「まあ、それはそうだろう。だが、その結論に至った根拠を聞きたい」

「はい、最初に申しましたが、トンファーは砕かれていたのです。焼け跡や
薬品の痕跡は勿論、刃物類での切り口も見当たりませんでした。乱雑に不規
則に外から強い衝撃を与えられて大破した典型のようでした。武器でこんな

ことが出来るとしたなら、ハンマーといったところでしょうか。ただ、言う
までもなく、そんな武器を隠せるはずもありませんので、自ずとその手段は
拳での打撃ということに」

「ふむ、何も知らない者が聞けば、納得してしまうような理にかなった推測
だった。しかし、あの武器の強度を知っている私からすれば、やはりすぐに
は信じられない話ではあるな。しかし、その説を否定すれば、また真相は手
がかりなしの状態に逆戻りか。非常に難儀なことだ…」

「すみません、私が見極められなかったばかりに」

「いや、少尉が全力で取り組んでそれならば、少々甘く見すぎていたこちら
のミスだ。とにかく、次はもっと人員を割かなくては。全ての銃撃をかわし、
五十いる軍隊をたった一人で潰してしまうだけで只者ではないしな。なめて
かかるのはもうよそう。これも我が愛しき娘、クリスを守るためだ」

「中将殿、そのことなのですが、流川海斗はお嬢様への危害にはならないか
と…。本人もただの友達だと言っておりましたし…」

「それを信じられるというのかね」

「い、いえ、そういうわけでは…」

「少尉に限って、心配はしていないが、これは一応任務だ。あの男に情けな
どかけて、全力を出せないなんてことはないように」

「はい。出すぎた真似をしました。私が口を挟むところではありませんでし
た。申し訳ありません」

「いや、いいのだ。少尉には期待させてもらっている」

「は、光栄です」

「報告はこのくらいでいいだろう。一応、戦闘任務のあとだ。しっかりと体
を休めたまえ」

「では、失礼します」

そう言って、部屋を出る。

やはり、中将殿も驚かれていた。
それはそうだ。
無数の銃撃をかわしたときは、出来る奴だとは感じたが、まさか眼帯を外し
た状態で、一瞬で勝負をつけられるとは思っていなかった。
また、それだけの強さを持ちながら、全く他人に気取らせることがない。

あと、中将殿には言わなかったことがある。
流川海斗はまだ本気を隠しているような印象を受けた。
これは戦った感触というか、所謂第六感のようなものなので、確証も何もな
いから伝える必要はないと考えた。
まさに未知の強さ。
本当に世界は広い。

それにしても、何故自分は流川海斗を庇うような物言いをしてしまったのだ
ろう。
あいつはただの友達だと言っていたが、確かにそれを信じるに値する要素な
んて、何も持ち合わせてはいなかった。
それなのに、私は何を考えて、あんなことを言ってしまったのか。
ただでさえ、分からないことだらけだというのに、自分自身のことまで、理
解できなくなりそうだ。

まあいい。
今、そんなことを考えても、仕方がない。
もうアイツの強さは十分に身に染みた。
次のときは、最初から全力で潰してやろう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

はぁ。
溜息をつきつつ、通学路を歩く。

昨日はみすったなー。
咄嗟にトンファーを破壊してしまうとは…
銃で壊したなんて、いつばれてもおかしくない嘘だよな。
めっさ軽かったしな、あの銃。

昼飯の分の軽い運動だったはずが、運動量オーバーもいいとこだろ。
でも、結局晩飯は食ってないし。
あぁ、でも昨日のは久しぶりに楽しか……じゃなくて、退屈しなかったな。
たまになら、ちょっとした刺激もいいのかもな。
毎日じゃねーぞ、あんなのは身がもたん。

「あー、腹減った」

「いなり寿司でも食べるか？」

いつの間にか、クリスが横に並んで歩いていた。

「じゃあ、もらうわ」

「ふふ、自分に感謝するのだな」

隣で満足そうに微笑む少女。
そういや、こいつのせいで俺は昨日大変な目にあったんだよな。
そんなに恨むほどではないが…

「なんだクリス、その食べ方は」

「ん？おかしいか？」

「おかしいも何も、食べる前に稲荷の神に感謝の礼を述べなきゃ駄目だろ」

「海斗、そんな話は聞いたことないぞ。自分を騙そうとしても無駄だ」

「何を言う。“稲荷”とは諸説あるが、その語源は“担い”から来てるとされていて、それは稲荷の神が幸福を担がせてくれることに由来しているんだぞ。だから、その幸福を逃がさないように、油揚げで全体を包んでいるという今の形状になったんだ。また、稲荷の神は豊作をもたらしてくるともされていて、“稲を荷う”というのが、そのまま名前になったという説もあるがな。日本ではこんなの常識だぞ」

まあ、こんなもの今思いついた根も葉もないでっちあげなのは、言うまでもないが…

「そ、そうだったのか。知らなかった」

純粋なクリスは見事にひっかかってくれた。
いやー、からかい甲斐があるな。

「ああ。分かったら、この方角を向いて、お礼を述べてから、食べるんだ」

「了解した。えー、美味しいいなり寿司を食べさせて頂いて、本当に感謝しております。今までは知識がなかったため、お礼を言えなかったことをお許しください」

俺が指した何もない方向に向かって、なんか喋り出した。
これ、知らない人が見たら、完全に変な人だろ。

「クリス」

「なんだ、海斗。海斗も一緒にやるか？」

「ちなみに言っとくと、さっきのは嘘だ」

「・・・・・・・・」

おーおー、顔が真っ赤になっていく。
自分がどれだけ恥ずかしいことをしていたか自覚したらしい。

「かーいーとー！！」

そのあと、怒ったクリスをなだめるのは大変だったが、昨日の八つ当たりは
無事に完了した。
ご馳走様。

３４話　「八つ当たり」（後書き）

ありがとうございました
会話が異常に多い回でしたね
たまにはこんなのも新鮮かも？
次回からもこんな感じで緩くいくんで、よろしくお願いします

35話　「水上体育祭」（前書き）

活動報告にも書いた気がするんですが、
前書きでネタコーナーでもやろうかと思う今日。
本編で出番のない松風とか使おうかな～と
そこら辺まで考えました、そこまでです（笑

35話　「水上体育祭」

クリスを存分にからかって、登校した後のこと。
教室ではＨＲが開かれていた。

「そういえば、２－Ｓに転校生が来たらしい」

「たぶんマルさんのことだな」

クリスがそんなことを言う。

“マル”さん？
なんか、クリス関係でそんな名前の奴をつい最近、具体的には昨日あたりに
聞いた気がするんだが…
マルギッテ・バッフェルベルカノンみたいな名前だったっけか。
あれ？なんか名曲っぽくなってしまった。
いや、これでも前半は結構自信があるんだが。

「それはそれとして、今年の体育祭は水上体育祭に決まったぞ」

教師がそんなことを言う。

水上？何、水の上でも走っちゃうの
伊賀なの？甲賀なの？

そんな超人同士の競技はお断りなんだが。

「「「いいいやっっっほおおおおおおおおう！！！」」」

突如、教室に大爆音が響き渡った。
主に発生源は男子どもの口からなのだが…

「女子の水着だぁぁぁぁぁぁ」

「学園長のじーさん、グッジョブ」

はー、なんとなく理解したぞ。
水上体育祭とは水辺で行われる体育祭というだけらしい。
まあ、おそらくはプールや海ってところか。
それにより、女子の水着が見れると思った男子のテンションが急上昇と。
なんという単純思考回路…

んで、女子どもの反応はというと…

「まあ、暑いしちょうどいいんじゃない」

「そうだねー」

こちらも好評らしい。
まあ、男子の不純な動機と一緒にするのもどうかと思うが。

そして、何気なく一子のほうを見てみると…

んなっ！
なんか物凄く負のオーラを放っている。
誰に聞いても、今の一子を見て、気分が浮かれているなんて言わないだろう。
むしろ、逆も逆、落ちるところまで落ちているようだ。
うーむ、こういう運動系の行事は好きだと思ったんだがな。

Ｓｉｄｅ　一子

運動会、体育祭、他にも色々言い方があるのかもしれない。
ともあれ、アタシはそんな運動のイベントが大好きだ。
その競技の種類による区別なんてない。
陸上競技、球技、水泳、どんな種目も等しく好きだ。

いや、今となっては好き“だった”。
決して嫌いになったわけではないんだけど。
今年から、気が乗らない種目が増えてしまった。
いや正確には、“海斗に恋をしてから”。

それまでは体を動かせれば、満足だった。
だけど、前にも思った。
恋をすると、見える世界が変わる。
それは当然、自分の意識が変わってるってことで。

今まで人に見られる姿なんて、気にしていなかった。
水着だって、泳ぐためのユニフォームであり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

でも、今は違う。
自分が見られると意識してしまう人がいる。
見て欲しい人がいる。

運動しやすくて、不自由に思ったことなんてなかったけど、今はこの身体が恨めしい。
学校指定の水着なんて絶対に身体のラインがでちゃうわよね。
京とかは胸大きいし、うらやましい。
はぁ～、憂鬱だわ。

…今日から豆乳でも飲もうかしら。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「場所は勿論、海で行うぞ」

それにしても、スポーツ大会ねぇ。
海でやる競技って言ったら、やっぱ水泳とかか。
あとは、ビーチバレーにビーチフラッグ、…スイカ割りとか？
いや、とりあえず水につかろうか、海に入ろうか。
ったく、海なんて行ったことない奴の想像なんてこんなもんだぜ。

一応、聞いとくか。
何も知らないで行くより、遥かに良いだろう。
かといって、クリスも転校してきたばかりだしな。
やっぱり、あのいかにも精神不安定な一子に聞くしかないか。

「おーい、大丈夫か。一子」

「胸……」

むね？
よく分からんが、なんか旅に出ちゃってるようだ。
帰って来てもらわんと。

「一子、もどってこーい」

そう言って、ノーガードの頬を人差し指でつつく。
む、なかなかの柔らかさである。

「わっ！」

どうやら気づいてくれたらしい。
だが、この柔らかさはなんというか、癖になる。
やめられない、止まらない。

「海斗、海斗！も、もう気づいてるから。ねぇ」

「うむ、分かってる」

ふにふにといじくってみる。
その度にいちいち“ひぁっ”とか反応するので、ますます面白い。
表情も随時更新される、なんか可愛いな。

「わ、分かってるなら、そのほっぺの指を…」

（あ、でも、これって海斗に触れてもらってるんだよね。それなら、このまま
の方が幸せかも…。）

あれ、なんか顔が赤くなりだした。

あ、そういや、俺、体育祭のこと聞きに来たんだった。
夢中になって、すっかり忘れてたぜ。
本来の目的に戻るため、指を離す。

「あ……」

「あ？」

「い、いや、何でもない。何でもないの」

「ならいいが、ちょっと一子に体育祭の種目を聞きたくてな」

「えーっと、それはちょっと分かんないわ」

「ん？どうしてだ」

「それがこの学園って何やるかなんて、ほとんどその年によって、違うから
参考になるようなものがないのよ」

「まあ、確かにあの学園長はそんな感じだよな」

「一応、水中玉いれとか、そんなのがあったみたいだけど、今年もあるかは
分からないわ」

「結局は、あいつの気分次第ってことだな。はぁ」

まあ、いいか。
ぶっつけ本番でも、自由にやらせてもらうことにすっか。

「か、海斗！」

「ん、どうした？」

「あ、あのね…、海斗は大きいのと小さいのどっちが好き？」

いきなり意味不明な質問をされた。
大きい？小さい？
え、動物の話か？
俺は基本チワワから、セントバーナードまで何でも愛せるが…
どっちって言われてもなぁ。

「俺は特に大きさとかは気にしないな。サイズとかよりも、もっとそいつ自
身の魅力とかの方が重要だと思うぞ」

「そっか…、そうなんだ」

そう言った一子の表情は下を向いていて見ることが出来なかった。
ただ、何故かその言葉からは嬉しさが表れていた。
なんか、俺、そんな喜ばすようなこと言ったっけか。

見事に噛み合っていないのに会話が成立している二人だった。
よもや、自分の胸のことをチワワとされているなんて、一子は思ってもいな
いことだろう。
ともあれ、これで一子が元気になったことは言うまでもない。

―水上体育祭
２―Ｆだけじゃなく、全校にその開催を伝えられた。
海でのこのイベントがまた何を引き起こすのだろうか。
まさに“波乱”の予感である。

35話　「水上体育祭」（後書き）

ありがとうございました
結構悩んだんですが、体育祭は水上にしました。
ルート的には京でしたっけね。
別に水着最高とか、そんなんじゃないですからね！

36話　「海斗ＦＣ」（前書き）

松風「よぉ、みんな、特に前書きに書くこともないらしいから、
オラ参上したぜー。なんかコーナーをオラ一人で担当するんだー
え？一人じゃないって？いや、何言ってるんだＹＯ！
オラの意志で喋ってんだぞ、後ろには誰もいないぜぇ」

海斗「由紀江、そろそろ本編始まるぞ」

松風「・・・・・」

36話　「海斗ＦＣ」

ここは一年教室。
一年の教師陣はなにか大切な会議とかで席を外している。
所謂、自習という状態だ。

今ここで一大イベントが開かれていた。
それは…

「皆さん良いですね。反対はないですか？」

その場にいる女子生徒が頷く。

「では、ここに“流川海斗先輩ファンクラブ”を設立します！」

わーわー
パチパチパチパチ

その一帯は拍手や歓声で異様な盛り上がりを見せていた。
所詮、自習などこんなものだ。
真面目に勉強をしている方が少数派である。

そして、ここにもその話に興味津々な少女が二人。
黛由紀江と大和田伊予である。

「まゆっちは行かなくていいの？」

「い、いえ、私はその…」

「おいおい～。それは愚問だぜぇ、まゆっちは海斗公認の友だちなんだから
なー、焦る必要はないのさ」

「あー、そっか。いいなぁ、まゆっち」

「いや、違うんです！こら、松風何を言っているんですか。私はですね、そ
のあんな楽しそうなグループに私なんかが参加してもいいのかなと…」

本当に変なところで遠慮がちな少女である。
とらえ方によっては謙虚という日本人の美徳でもあるが…
この少女はそのせいで友だちが出来ないのに気づいていない。

「なら、私と一緒に行こうよ。まゆっち」

「え？」

「別にまゆっちに気を遣ってるわけじゃないよ。私も流川先輩に助けてもら
って感謝してるっていうか、入りたいなーって思ったから、まゆっちも入ら

ない？って誘ってるだけ」

「伊予ちゃん…」

そう、かつて伊予も海斗に不良から助けられた。

自分のピンチに颯爽と現れて、助けてくれた男の人に好意を抱いてしまうのは、これはもう女の子としては仕方がないことだろう。

勿論、伊予も例外ではなかった。

だが、それを感謝の気持ちだと友だちの前でごまかしてしまうのも、やはり女の子ゆえだろうか。

「いや、やっぱり興味あったら、形から入らないとね。野球だって、まずは試合を見に行かないと始まらないし！」

「そうですね、行ってみましょうか」

そうして二人の恋する少女もまた、その集まりに加わったのだった。

「えー、流川海斗先輩ファンクラブとは、ご存知川神学園２－Ｆに在籍している流川海斗先輩に対して、憧れ、好意、思慕、どんな感情からでも構いま

せん、先輩に興味がある、先輩を見ていたい、先輩のことを応援したい、ひいては先輩に恋をしている人でも歓迎の、自由度が高い団体です。」

「お互いにそういう個人の目的に突っ込んだり、咎めたりなどということはせずに流川先輩のことを思うという共通の目的を持った仲間として、情報などを共有していこうといったり、先輩のことを話し合える人との交流の場というのが、このファンクラブの主な存在意義となるでしょう。」

「ちなみに、さっき自由度が高いと言いましたが、普通のファンクラブとは異なり、会員番号などといった序列は全くありません。新しく入った人と作られた当初からいる人の間にも、差はないです。」

「勿論、本人に迷惑をかけたりする行為は禁止となります。盗撮やストーカーなどに準ずる行為は言語道断です。イベントごとでもないときは写真を撮るときは許可をとるのが望ましいです。」

「今言った、最低限の決まりを守っていれば、流川先輩を食事に誘ったり、手紙を送るのは自由です。抜け駆け禁止なんていうことは一切ないので。」

委員長のような人がすらすらと読み上げていく。
昨日今日で計画されたことではないことが明らかである。

「なんか、思ったよりもすっごいしっかりした感じだね」

「はい…、それにも関わらず、とても柔軟で不満も出にくいと思います」

由紀江の言うとおり、周りの女子たちも黙って、頷いており、反対意見などは1つとして、出ることはなかった。

「では、皆さんよろしくお願いします」

そう言って、説明は締めくくられた。

すると、集まっていた女子生徒が早速話し始めていた。

「あ～、流川先輩ってほんとにかっこいいなぁ」

「ていうか、なんか年上オーラが出てるって感じ。頼りがいありそうだし」

「それにタッグマッチとか川神戦役でも見たけど、あの強さでしょ」

「前に不良から女生徒を守ったなんてのも流れてたもんね」

「私も守ってもらいたいなぁ」

「あと、あの川神戦役のときの料理！」

「あんな感じなのに、家庭的な一面もあるとか、ギャップで反則だよね～」

「料理部の人の話だと本当に美味しかったらしいよ」

「一回でいいから、食べてみたいよね」

「それにもうすぐ体育祭だし」

「また流川先輩の活躍する姿が見られるのかな？」

「先輩泳ぎも得意なんだろうなー、もうスポーツ万能って感じ」

「それに水着姿ってことだよね」

「これは新聞部とかに期待しないと、しっかり良い写真を撮って欲しいね」

というように次々と海斗についての会話が行われていたのだが…

二人の少女はなかなか輪の中に入っていけなかった。

守ってもらった少女と料理を教えた少女の二人は。

こんな感じで一年生での海斗の人気は凄まじかった。
だが、それも全員というわけではない。
良く思っていない者も当然いたのだ。
そんな少女の代表がここに一人…

Ｓｉｄｅ　小杉

今、１年生の話題は一人の男に持っていかれていた。
どこを歩いていても、“流川海斗”“流川海斗”と、同じ単語ばかりが耳に
入ってくる。
聞けば、エリートクラスでもないというあの男。
そいつがプレミアムな私よりも目立つなんて我慢ならない。
せっかく、一年生を制圧したっていうのに、話題にもあがらないなんて、こ
れほどまでに腹立たしいことはない。

確かに川神戦役を見ていて、ある程度出来るのは認めよう。
弓矢も一発で命中させてしまうし、正直あれは見事だった。
だけど、所詮は凡人が集まるクラスの中で頭ひとつ出ているというだけの話。
プレミアムな私が劣る存在ではない。

しかし、この人気。
人を惹きつける能力があることも認めざるをえないだろう。
だけど、それはもう逆に好都合だ。

プラスに考えれば、それだけの人気者より上だということが証明できれば、
これほど大々的な宣伝方法はない。
相手の地位を落とすだけでなく、自分に人気が流れ込む可能性だってあるし。
まさにプレミアムな作戦ね。

だけど、正面から当たるには少し危険だわ。
作戦を立てないと…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

色々な意味で一年の話題を独占の海斗だった。

36話　「海斗FC」（後書き）

ありがとうございました
これ書こうとは思ってたんですが、
ほんの小話程度に入れようだったのが、なんと1話の長さに。
いやはや、1年生に大人気の海斗でした

PS
前書きたまにああなります、気が向いたらです。
意外といつもより時間がかかるという（笑

37話　「金欠とはこれいかに」（前書き）

なんかすごく眠いです。
週末の疲れってあなどれんです。
皆さんはしっかりと身体を休めてください。

37話　「金欠とはこれいかに」

「はぁ〜、金がない。とにかく、金がない」

もう思ってるだけにとどまらず、とうとう口に出てしまった。
そうなのだ、この俺、流川海斗は絶賛金欠中である。
誰に絶賛されてんねん。

“お金がなくても、僕の君を思う気持ちは誰にも負けないよ”

“お金よりも大切なものってあるだろ?もっと幸せに生きようぜ”

とか言っている奴らに一言物申したい。
金って結構大切だぞ。
そりゃ綺麗ごとを言ってしまえば、“お金じゃ買えないものがある”とか、
言ってるよ、言ってるけども、その後に“買えるものはマ◯ターカードで”
って言っちゃってるからね、あれ。
否定の後の肯定だよ、後半の文を強調するという対比表現だよ。
意見を述べるときに説得力が出ちゃうやつじゃん。

結局のところ、世の中、マスターカ…じゃなかった。
世の中、金だよ
いや、悪人みたいなこと言ってるけど、マジマジ、真剣な話。
素敵なレストランでのデートでも、幸せな家庭を築くための新築マンション
だってな、有料なんだよ。

愛なんかじゃ、いくらあっても、買えないわけ、お分かり？

その他、自分の将来の夢を叶えるための勉強、大切な命を救うための治療、
エトセトラエトセトラ。
要するに金がなくては、物事まわらんのだよ。
夢がない話だなーって思うけども、その夢もお金で買ってるわけだからね。
もうわけわからんね。

いや、そんな大切な金が足りなくなっているのは大問題なわけだよ。
それもこれも全てはこいつのせいなんだがな…

“勤労にゃんこ”

噂の勤労〇〇シリーズの２ｎｄエディションだ。
第一弾の“勤労わんこ”の大好評につき、さらに新コスチュームも追加で、
種類を増やして帰って来た今回のこれ。

第一弾は存在すら知らなかったのだが、試しにひとつと買ってしまったのだ
が、それが失敗だった。悲劇の始まりだったのだ。

～

食品玩具、いわゆる食玩の一種なのだが、もはや立場が逆転して、

メインで
ある小さいラムネの方が付属品と化している典型的な現代のお菓子。
なんか、グッズだけ取って、お菓子を捨てる子どもまでいるらしい、
勿論、
俺はそんなことはしないがな。
まあ、そんなことは言いつつも、俺も中に入っているマスコット目
当てで買
っているのだが…

そして、箱を開けると、中から敬礼をしているにゃんこが出てきた
よく見たことある制服をまとって、これは“警察官”か？

ていうか、待て。
落ち着け、冷静になれ、皆の衆、殿中でござる（↑お前が落ち着け）
このつぶらな瞳。
ちょうどよいデフォルメ具合。
チャーミングなひげ。
帽子におさまりきらず、はみだした耳。
なんだ、この可愛さは。犯罪か、警察官が罪を犯していいのか。
まあ、俺がもう捕まえてしまったがな！はっはっは！（↑誰か止めろ）

あまりの愛嬌に悶えてしまって、周りから冷ややかな視線をあびせられたの
は、言うまでもない。

〜

いや、まあその1個を買ったがために、ものの見事にはまってしまい、金の
浪費につながったというわけだ。
というか、ボリュームアップだかなんだか知らないが、種類が多すぎるんっ
だっつーの。
集めても集めてもきりがないっての。

「はぁ～」

そりゃ溜息も出るさ。
まあ、過ぎたことを気にしたところでどうにもならん。
現在の問題は俺のこの寂しい財布だ。
だけど、短期のバイトなんて、そんな簡単に見つからんしなー。
さて、どうしたもんかね。

「おい、今日も行くか？」

「また、儲けようってか？いいね」

あん？儲けるだと？
二人の男子生徒が前を歩いていく。
どうやら、金が手に入るところに向かうらしい。
一応、見るだけ見てみるか。
そう思い、俺はその二人の後をつけていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

トンネルを抜けるとそこは雪国だった。
間違った。
後をついていくとそこは１つの教室だった。
全然違うじゃんとか、言うな。自覚あるから。俺も思ったから。

その教室では数人が集まって、何やらやっているようだった。
その固まりの１つに雀卓を囲んでいる集まりがあった。
ああ、理解したぞ。
さっきの儲けられるという話、そして今のこの教室の様子を照合するに、ここはいわゆる賭場、もしくはギャンブル場ってことか。
納得、納得。

よし、そうと分かれば、俺もここで一発大儲けするか。
特に得意とかではないが、最初に目に入ったし、麻雀でもやることにしよう。

「おい、俺も参加するぞ」

「げ、流川…！」

「む、こやつは…」

雀卓には着物を着た少女“不死川心”と、２－Ｆの軍師“直江大和”が既に
座っていた。
今から、大和は心を負かしてやろうと思っていたのだが、そんなことを海斗
が知るはずもなく…というか、知っていても、気にしないだろうが。
何の遠慮もなしに海斗も位置についた。

「注目をあびて、調子に乗っておる２－Ｆの山猿か。よい、ならば、こなた
が二匹まとめて、潰してやろう」

「いや、俺はやめておく」

唐突にそう言って、大和は席を立つ。
試合自体を放棄するようだ。

「なんじゃ、戦う前から逃げるのか。んほほほ、高貴な此方に恐れをなした
か。山猿は猿らしく尻尾を巻いて、逃げるのがお似合いなのじゃ」

「どうとでも言っておけ。お前こそ偉そうにしていて、そのやってきた山猿
に負けたりするなよ？」

「此方に限って、ありえない話じゃ」

（正直、流川とだけは戦うのは避けたい。こいつの思考だけは読めないから
な。京がこいつの目には注意しろって言ってたし、いかさまを見抜かれる可
能性がないってわけでもないからな。不死川に色々と言わせておくのは、多
少むかつくが、ここは様子見に徹しよう。）

「まぁ、俺は結果を見させてもらうさ」

（こいつなら、勝ちそうな気がするしな）

「ふーん、ほほぉ」

俺は麻雀牌を手にとって、眺める。
なんか、今時のって良く出来てんだなー。
昔は紙とかで出来てたっていうし、今のは凄いよな。
よし、特に問題なしっと。

「おい、流川。お前は麻雀上手いんだよな？」

「まあ、役くらいは一通り知ってるつもりだが、やるのは初めてだな。ドキ
ドキワクワクだぜ。」

「は！？待て待て、お前やったことないのか？」

「いや、だからルールは知ってるって」

「お前、なんでよりにもよって、麻雀やろうと思ったんだよ…」

「目に入ったからとしか、言いようがない」

「はあ～～」

なんか凄い溜息つかれた。
俺そんな悪いことしたか？

（流川海斗、こいつは本当に意味が分からん）

大和のそんな気持ちなど全く気づきもしない海斗であった。

37話　「金欠とはこれいかに」（後書き）

ありがとうございました。
まあ、大切ですよね、お金。
果たして海斗は稼げるのか。
次回はそんな感じです。

38話　「駆け引き？」（前書き）

松風「ついにオラもアニメになるんだなー。これじゃあ、
　オラのファンがまた増えちゃうぜー。楽しみだぁ」

海斗「てか、どっちにしろ静止画じゃね？」

松風「・・・・・」

38話　「駆け引き？」

「にょほほほ、まさか初心者が此方に挑んでくるとは。流石に猿の考えることは理解できんわ。大人しく今から負けを認めて、謝罪しておくことをお薦めするがの。どうじゃ？此方は別に構わんぞ」

「んぁー、いいからいいから。早くやろうぜ。ま、それだけ言っておいて、初心者の俺に負けたら、面目丸つぶれだな。頑張れよ」

「く、なんじゃその態度は！ならよい、徹底的に敗北を味あわせてやるのじゃ。今から後悔したところでもう遅いわ」

「おっけ。じゃ、早速やりたいんだけど、1人抜けちゃったから、人数が足りてないんだよな。どうするか」

そうなのだ、あのストラップくれた奴が急遽、戦線離脱をしやがったために雀卓を囲んでいるのは3人となっている。これでは勝負できないことくらいはルールブックで予習済みだ。

「心配するな。俺が入る」

そう言って出てきたのは丸坊主のハゲ。
いや、意味が重複してるな。
ともかく、そのハゲ坊主がどうも代わりにするらしい。

「久しぶりだな、流川」

「え、俺？」

やばい、なんだ、相手は俺のこと知ってんのか？
いや、言われてみれば、初対面ではない気がする。
だが、こんな特徴的な頭だったら、はっきりと覚えているような気がするんだけどな。

「おい、なんだその反応は。まさか、俺のこと覚えてないとかいうんじゃないよな、流石にそれはないよね。一応、知り合いの範囲には入ってると言っていいレベルだと思ってたんだけど！？」

「いや、覚えてるって。あれだろ、あのほら、この前コンビニに夜食買いに行ったとき弁当コーナーの前にいた…」

「それもはや、他人だよね。知り合いというカテゴリには間違ってもはいら

ないよね、それは。」

「いや、落ち着け。冗談だって。あれか、この前、テレビ番組かなんかで、
“Ｒｕｎｎｅｒ”歌ってたよな、うん」

「もう、それ頭だけで判断してるだろ。だって、上を向いてるもの。視線が
全てを物語っているからね。もう少しだけ、視野を下に広げてみようか。新
しい世界が見えるから。サングラスなんてかけてないってことを確認できる
から！」

「はあぁぁ」

「何その大きな溜息。え？もしかして、そういうスタンスなの、俺が悪いこ
としてる感じになってるの？“溜息つきたいのは、こっちだよー”的な発言
すら許されないのか？」

「……チッ。
あー、もうあれだろ、教科書で見たことあるわ、お前」

「おいぃぃぃぃ。舌打ちとか、しっかり聞こえてるからね。何もう、考えた
くないなら、無理に言わなくていいから！もう真面目に考える気ないんだろ、
なんだ、教科書で見たことあるって。遂に断定されたよ。ツッコミ

の余地す
らなくされたよ。ちなみに言っとくと、教科書載ってないからね。
たぶん、
お前が見たのは鑑真とか、正岡子規だから。俺、関係ない！」

いや、俺だって、頑張ったんだ。
だけど、それでも思い出せなかった。
そのうえ、ひねり出した案を否定されるんだぜ。
な？ムカつくだろ？

「ハゲー、かっこわるー♪」
「あ？」

そうして、坊主の後ろに現れた少女。
この白髪少女は確か…

「あー、タッグマッチのとき、戦った女か」
「いえーい、だいせいかーい」
「おい、そこまで思い出したら、分かるだろ。頼むから！」
「あー、そういや隣にこんなハゲいたな」

「やっとか。ったく、なんで俺のときは時間かかったのに、ユキを見たら、
一発で思い出すんだよ」

「え？言っていいの、それ」

「お願いします。言わないでください」

だよな。
良かった、早まらないで。
結構、厳しい言葉を連ねる自信があったからな。
印象が薄いとか、影が薄いとか、髪が薄いとか、記憶に残らないとか…

流石に俺でもそんなことを真正面から言うのには罪悪感がある。
少し楽しそうだなんて、全然これっぽっちも微塵も考えてないから、そこ、
誤解のないように。

「此方を放って、何を馬鹿な見世物をしているのじゃ。ハゲもさっさと席に
着け。」

「だそうだ、ハゲ。さっさと着席しろ」

「ハゲ～♪」

「俺、立ち位置的には絶対被害者だと思うんだが…」

こうしてメンバーは揃った。
あとの1人は最初からいた名前も知らない3年生だ。

「じゃ、始めますか」

ジャラジャラジャラジャラ
麻雀の牌を音を立てて、混ぜる

「いやー、俺これ一回やってみたかったんだよな」

「本当にやったことないのか…」

今はなんか全自動で混ぜて、並べてくれる自動卓なんてのもあるらしいが、
やはり、麻雀といえば、これだろう。
こっちの方がなんか良いよな。
皆で勝負してるって、感じだしな。
これは勝負へのモチベーションも変わってくるってなもんだ。
ていうか、自動卓だったら、勝負なんてやらんぞ、俺は。

「こんなもんでいいだろ。ほら、お前も並べてけ。」

「ふーん、山にして並べてくのか」

「ああ、初めてだったか。ま、そーゆーことだから。ちゃちゃっと、やってくれや」

「誰が並べるとかは決まってないのか？」

「あ？こんなもん、誰が並べたって一緒だろ。別に面倒くさいとも思わんが、好んで並べたがる奴なんかいねぇよ。公式は当然違うだろうが、学校の賭場なんてこんなもんだぞ。」

「…ふーん」

やはり、実際にやってみないと分からないことは多い。勉強になるなぁ。

「ほれ、何をしておる。さっさと始めるのじゃ」

「いや、その前に賭け金の設定しないと」

「お前、初心者なのに、いきなり金賭けんのか」

「だって、賭場だろ、ここ。儲けのない勝負やって何の意味があんだよ」

「ふん、泣いて後悔するのが容易に想像できるがのぅ」

「どーするよ、初心者もいるし、レートはテンピンくらいにしとくか？」

「いや、ウーピンでいこう」

瞬間、場の空気が凍った。

「おま…！馬鹿か、それはいくら何でもないだろ」

「ここまでの阿呆だと、言葉もでんわ」

「別にいいだろ、こんなのちまちまやるのは性に合わねぇんだよ。損をするときも、得をするときも、どうせなら大きく派手にしようぜ」

「まさに蛮勇と断ずるにふさわしい愚かさじゃ」

「まあ、お前がいいんなら、いいけどよ…」

そうそう、大人しく聞いといてくれよ。

俺は手早く、金増やしたいんだからな。

Ｓｉｄｅ　大和

流川海斗。
こいつは天才か、馬鹿かの二択だな。
ルール知っているとはいえ、やったことない奴がウーピンなんて、冒険にも
ほどがある。
賭けのことを少しなめてるんじゃないだろうか。
まあ、負ける恐ろしさを知らないからこそ、出来るとも言えるだろう。
こいつもそうなのだろうか。それとも…

だが、この勝負どちらに転がろうと見る価値はありそうだ。
全く根拠はないが、これだけのマイナス要素が目の前に並んでいるのに、こ
いつからは勝ってしまうのではないかと感じさせられる。
それはタッグマッチであんな奇抜な作戦で優勝したからだろうか。
キャップとの勝負でありえないセンスを発揮して、無敵だと思われた俺たち
のリーダーを倒してしまったからだろうか。
分からない、本当に分からない奴だよ。

まあ、お手並み拝見だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「じゃ、ゲームスタートといこうか」

38話　「駆け引き？」（後書き）

ありがとうございました
なんというか、準は使いやすいですね、重宝してます。
そして、実は麻雀にはそこまで詳しくないので、
今回と次回、おかしいとこがあったらごめんなさい。
役くらいは知ってるんですが、点数計算とかわけわからん（笑
次回の海斗はどんなことをしてくれるのか

39話　「いや、賭け引きだ」（前書き）

若干、自分の私生活の方が忙しく、毎日更新が相当危ないです。
なんとか、毎日更新のまま、完走したいんですが、
微妙になってきてしまいましたね。いやはや

39話　「いや、賭け引きだ」

教室に牌を切る音だけが響く
むー、なかなか揃わんもんだな

「リーチじゃ」

「おいおい、マジかよ」

ん？もうリーチか、早いな
まあいい、安全牌でやり過ごそうと決めてたしな。
そんな感じで進み、流れるかと思ったのだが…

「ツモじゃ。リーチツモタンヤオドラ2」

運のよろしいことで。
ツモは流石に防げないからな。

だが、あがってもらうのは好都合だ。
俺は着物女の手牌の配置を観察し、記憶しておく。
これは参考資料1だな。

「んじゃ、また混ぜるか」

そして、牌を混ぜる作業に移る。
やはり、この作業は基本どうでもいいみたいだ。
皆、参加こそしているものの、牌の混ざる様子をじっと見ている奴なんて、
1人もいない。いや、俺を除いてな。

ちょっと試してみるか。
そう思い、俺はちょろっと明らかに自分のテリトリーから外れた相手に近い
牌の入れ替えを行ったりしてみた。
自分的にはわざとあからさまにやったし、何か言われるだろうと思ったのだ
が、ほんとに誰も興味がないようだ。
この分なら、慎重にやれば、気づかれないかもな…。

そして、山を積む作業。
これも本来、一人一人が自分の目の前に山を積んでいくのだが、これまた、
全くやる気が見られない。
試しに他の奴の山を作るのを少し手伝ってみた。
案の定、普通に受け入れて、お咎めはなかった。

というものの、これは若干怪しいな。
ハゲも最初“？”みたいな顔したし。
それに比べて、この着物女は全く警戒していない。
まるでやってもらうのが当然のようにしている、さすが金持ち。
完全にこいつをターゲットにしたほうがいいな。
幸いなことに位置は俺の左。

最後にサイコロだ。
これは流石に介入できるものではないのだが…
まあ、練習でもしとくか

「へぇ、そのサイコロちょっと貸してくんね？」

「あ？なんでだ。まだお前の親じゃないだろ」

「いや、サイコロって振ったことねえから、どんな感じか興味あんだよ」

「お前、サイコロも振ったことないって、どういう人生歩んできたんだ…。
まあいいけどよ、振りたいんならやってみろ」

「さんきゅ」

俺はサイコロを受け取る。
重量、硬度、材質、全てを考慮したうえで軽く振ってみる。
机とプラスチックがぶつかる音がする。
今ので“２”か。そして、こっちのは“５”と。
なら、これで。
先の結果を踏まえて、再び振ってみる。
よし、狙い通り。
サイコロの問題もクリアだな。

「へぇ、サイコロって結構軽いんだな」

「そんな感想言う奴、お前だけだよ」

そして、二局目。
またもや…

「リーチじゃ」

着物女がリーチをかける。
そして、当然のように、

「ツモ。リーチツモイッツードラ1」

2回連続あがりか。
あいつとしては、当然思い通りになって、嬉しいことだろう。
だが、これは俺にとっても良かった。
今の手牌、参考資料1と合わせて、こいつの癖は分かった。
こいつは、ピンズ、ソーズ、マンズ、字牌の順で置いてるな。
それが分かっただけで、収穫だ。

―三局目
テンプレのように着物女がリーチしてくるもんだと思ったのだが、

「リーチだ」

リーチしたのは、ハゲだった。

いや、だが少しおかしい。
この着物女、口角が少し上がっているし、目もなんかそわそわした感じがする。いや、本当にかすかなもんだが。
だが、リーチは行わない。
これはそれほど良い役ってことか、下手すりゃ役満。
俺が当てられるなんてことはないが、役満なんて出されて、得点を持っていかれるのは非常に面倒くさい。
ならば…

「あ、ロンだ。リーチ一発ピンフだ」

比較的弱いであろう、ハゲのロンをわざとくらう方がいい。
ハゲの手役なんて、牌の動きを見ていれば、大体分かる。

そして、局は進んでいき…

「高貴なるツモ！」

「んー、それロンだ。トイトイ役牌だな」

「ロン。タンヤオドラ1だ」

遂にオーラスを迎えた。
俺は結局ハゲのあのロン以外、打撃を受けることはなく、しょぼい役でせこ
せこ稼いだ結果、初期点数より少し下くらいの点数に落ち着いていた。
順位的には三位か。

「ほほほ、やはり此方の圧倒的な勝利は決まっておったのじゃ。やはり、猿
は猿じゃな、劣等種に変わりないわ、にょほほほ」

さて、やっと親が来たよ。
準備は万端だ、俺は集中力を高める。
結構な量がある麻雀牌。
だが、決して覚えられないほど多いわけではない。
要は難易度ＶＥＲＹＨＡＲＤの神経衰弱だとでも思えばいい。

そして、適当に混ぜている奴らの目を盗み、着々と進めていく。
いじるのは、着物女のと俺のだけでいい。

そして、サイコロ。
机からの高さはこれで、このくらいの強さで振れば…

「自５だな」

全ては上手くいった。
表面上は今までやってきた局となんら変わらない配牌。
だが…

ニヤリ

自分の手牌を見て、思わずそうなってしまった。
これぱかりは笑みが堪えられない。
あまりに上手くいきすぎだ。
これも散々相手を見下して、勝負をおざなりにしてくれたおかげだよ。
はあ、本当に油断って最高だな。

「何を笑っておるのじゃ、遂に頭でも狂ったか」

「天和　国士無双　ダブル役満だ」

「な、なにぃぃぃぃぃぃ！？」

教室中が騒然となった。
周りで観戦していた生徒たちは拍手や驚きの声を上げ、雀卓を囲む当事者たちは凍りついたような顔をしている。

「いやー、運が良かったな。俺って実は強運の持ち主なんじゃね」

まあ、当然のごとく、嘘なわけだが。
俺が狙って配置しただけのこと、サイコロで出す目も狙えば、問題などなかった。

「じゃ、金はきちんともらうぜ。次があれば、よろしくな」

「くー、悔しいのじゃ！」

「くそ、魍魎の宴のための重要な資金が…」

よし、搾取完了したところで、おさらばすっか。

「お待ちください」

教室を出て行こうとすると、呼び止められた。
そこには眼鏡をかけた優男が立っていた。

「先程の戦い、見させていただきましたが、お見事でした」

「そりゃどうも、運だけどな。で、誰だお前？」

「ああ、すみません。私は葵冬馬と申します、そこにいる準やユキ

の友達で
すよ。学園内では結構有名だと自負していたのですがね」

そう言って、ふふっと笑う。
すると、周りの二年女子からきゃーと歓声が漏れる。

こんなのが女子にはもてるのか、分からんな。
まあ、そんなことをもてない奴が言ったところで負け惜しみにしか聞こえん
のだがな、はいはいお疲れさま。
確かに顔は美形?なのか、まあハーフっぽいけどな。
人気があるんだと言われれば、へぇーとなりそうだが…

「それで?その有名めがねが俺に何か用か?」

「おやおや、冷たい反応ですね。」

「暖かく迎える理由はどこにもないと思うが。」

「ふふ、その通りですね。どうです、私と勝負してみませんか、流川君」

長い休み時間はまだ続く。

39話　「いや、賭け引きだ」（後書き）

ありがとうございました。
もはや予想できた方も大半のこの展開。
やっぱり覚えちゃうという力技できましたね。
そして、登場してきました。
次回も続きます

４０話　「天才と奇才」（前書き）

季節の変わり目というのでしょうか。
自分で上着を羽織るなどして、温度調節をしっかり行わないと、
簡単に風邪をひいてしまいます。
皆さんも気をつけてくださいね。

松風「馬や鹿だって、風邪はひくんだぜー。作者はその代表なのに、
　見事に体調崩したからなー」

40話　「天才と奇才」

「私と勝負してみませんか、流川君」

あー、もうさっきの麻雀で十分儲けたしな。
今更、はした金が入ったところで、あまり嬉しくないな。
適当に流すか。

「俺もう結構儲けたから、1万円くらいじゃないとやる気になんねぇんだ。
悪いが、他をあたってくれ」

「いいですよ。賭け金1万円で勝負しましょう」

そうそう、素直に諦めてくれ……ん？

「今、なんつった」

「ですから、勝負しましょうと。1万円を賭けて。」

「え？お前もしかして、出せんの。そんな大金」

「一応、医者の息子ですので。お金には困りませんよ」

はぁー、今時の高校生はすげえな。
１万円を軽々出すのか、医者の息子は。
１万円って、お前あれだぞ、う○い棒１０００本買えるぞ。
１０００本も欲しいと思ったことはないが。

ていうか、今日はラッキーすぎんだろ。
割とさっきの収入でも満足してたのに、このうえ１万円追加か。
また、新しいにゃんこが増えるな…
いや、同じ過ちを繰り返してどうする。
ちょっと贅沢でもするか、ハー○ンダッツとか。

「何の勝負をするんだ？」

「そうですね、時間をかけても仕方ありませんし、これで決めませんか」

そう言って、めがねが取り出したのは、１つの箱。

「トランプか？」

「そうです。ギャンブルで使われるといえば、カジノでもおなじみのこれでしょう。何よりシンプルですし」

「まあ、構わないが。なんだ、ポーカーか、ブラックジャックか？」

「ふふ、それもとても面白そうですが、生憎と時間もありません。

どうです、
ここは単純なお遊びで決めませんか？例えば、この一番上のカードを当てる
なんて、どうでしょう」

確かに単純だとは思うが…

「それって、完全な運じゃねぇのか」

「たまには、そういうのも面白いと思いまして。それに運も実力のうちと言
うくらいですから。それとも、ただの運に１万円を賭けるのは流石に気がひ
けますか？」

「いや、逆にそれだけで１万円を手に入れられるんなら、こんなに得な話も
ないだろう」

「ふっ、とても前向きな考え方ですね。分かってるとは思いますが、これは
賭けなんですから、あなたも負けたら１万円を払っていただくんですよ。そ
れだけはくれぐれもお忘れにならないように。」

「心配すんな、大丈夫だ」

負けなければ、いいだけの話なんだからな。

Ｓｉｄｅ　大和

あーあー、受けちゃったよ。

麻雀で勝ったときは本当に驚いた。
しかも、オーラスでダブル役満なんて、狙ってたとしか思えない、どうにも
出来すぎたシナリオだ。

そう、そんな派手なゴールに辿り着くためには、険しく長い道を走っていか
なければならない。
当然、対戦相手も観客もその姿を見ているわけだ。
いや、対戦相手は少し適当な感じもしていたが、俺はしっかりと観察してい
た、あいつの様子を。
だが、あいつは苦労して走る素振りなんて見せずに、ゴールに到着しやがっ
た。
それは自転車を使ったとか、近道をしたとかそんな次元じゃない。
言うとすれば、瞬間移動。
自分でも馬鹿げた例えだとは思うが、これが一番適切だ。
コースを走ることもなく、歩いていると思ったら、気づいたら既にゴールに
いた、まさしくそんな感じ。

イカサマを使っていたわけでもない。
いや、違うな。
あんな手は小細工をしないと、絶対に来るわけがない。
つまり、俺が見抜けなかっただけのこと。
目を離さなかったにも関わらずだ。

つまり、こいつは狙って、完璧な勝利を収めやがった。
なーにが、“運が良かった”なんだか。
見抜けなかったこちらは文句を言うことすら出来ないな。

今更ながら、キャップが負けたというのも、頷ける。
流川海斗、キャップ以上に異常な男だ。
優れているとは少し違う、“奇才”ってとこか。

だが、そこに絡んできたのは“天才”。
テストで常に1位を取り続ける男、葵冬馬。
流石に一筋縄でいかないことは分かりきっている。

ていうか、普通相手が提案してきたゲームをためらいなくOKするか？
どう考えても、マジックカードとか使ってるだろ。
変なところでぬけてるんだよな。

まあ、始まるからには見させてもらうか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「一応、カードが揃ってるか見せてくれ」
「どうぞ、確認してください」
カードを見る。
ちゃんとジョーカーを抜いた52枚が入っていた。
「問題ないな」
「はい、もしぴったり当てなくても、数字が近いほうの勝ちとしましょう。
AとKはつながっているということで」
「構わない」
「では、始めましょうか」
「ああ」
「うわ、本当に受けちゃったよ」
「ほんと、トーマ君に勝てるわけないのに」
周りからそんな声が聞こえてくる。

やれやれ、一発かましとくか。

「おい、めがね」

「はい？なんでしょう」

「先に言っておくが、俺はカードに触れることでカードと対話することができる。降参するなら今のうちだぜ」

「ふふっ、意外にロマンチックなことを言うのですね。」

「信じてないのか？全部当てちまうかもしれないぞ」

「どうぞ、触ってください。表を見なければ、私は何も言いませんよ。存分にカードと会話なさってください」

「は、後悔するなよ」

「あいつ何言ってんの」

「頭おかしいんじゃない？」

おい、ひどい言われようだな。

別にファンの対戦相手のアンチになる必要はないだろ。

大人しく好きな奴の応援だけしてろっての。
そうこうしてる間に相手がシャッフルを始めた。
そして、カードの束を俺に差し出し、

「どうぞ、シャッフルしてください」

俺も何回か適当に切り、机に置く

「では、私は…4あたりにでも」

「さてと、俺は」

そう言って、カードの上に手を置く。

「分かった。俺も4だな」

「流川君、それでは勝負になりませんよ」

「でも、対話の結果、4なわけだしな」

めがねがめくると、勿論4だった。

「次から同じものは駄目にしましょうか」

「それなら、俺から先にやらせてもらうが」

「それは不公平でしょう」

「じゃあ、じゃんけんで順番でも決めるか？」

「いえ、遠慮しておきます」

くそ、じゃんけんだったら、絶対勝てたのにな。
警戒心の強い奴だ。

「まあ、とりあえずやろうぜ」

「はあ、そうですね」

だが、言うまでもなく結果は同じ。
二人とも7を宣言し、勿論正解も7だった。

「これじゃあ、埒が明きませんね」

「なら、上から二枚目のカードを当てるって言うのはどうだ？」

「な…」

（この発言はやはり、マジックカードだということを見抜かれているのでしょうか。分かりにくいものを使ったつもりなんですが。そのうえで完全な運の勝負に持っていくというわけですか。ここで拒否するのも不自然ですし…）

「いいでしょう、それでやりましょう」

そして、シャッフルされたカードが机の上に置かれる。

（今、一番上にあるカードはK。ならば、一番遠い6あたりでいいでしょうかね）

「私は6にします」

「ふーん、なら俺は…」

そう言って、一番上のカードをどかす。

「何をしているんですか?カードを動かすのは…」

「あ?だって、上のをどかさないと、二枚目にさわれないだろ」

「だからと言って…」

「お前言ったよな。“表を見なければ、何も言わない”って。俺は触ってる
だけで表は見てないぜ」

「な！？」

「口出しされるのは、おかしいと思うが」

（…はめられました。ここで私が無理に不正だと押し通せば、それは裏を見
たら、何の数字か判別できること、つまりマジックカードだということを自
分で言うようなものです。それを見越した上での作戦ですか。確かに彼はた
だ触るだけ、カードと対話をするだけ、そういうことになっているのですか
ら。おかしいところは何もないですね。）

「じゃあ、俺はＪで」

冬馬はめくる前から、分かっている。
二枚目の裏に描かれた模様はしっかりとＪを表していた。

「Ｊだな。俺の勝ちだ」

キーンコーンカーンコーン

ちょうど試合終了のゴングのように休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。

机の上の2万円を取って、海斗は教室を出て行った。

そんななかで冬馬は笑うしかなかった。

「ふふふ、海斗君、面白い人です」

４０話　「天才と奇才」（後書き）

ありがとうございました
前回は完全に記憶力と目の良さで戦っていましたが、
今回は言葉遊びって感じですかね。
頭がいいだけが勝利条件じゃないんですよね。

41話　「世のため、人のため、自分のため」（前書き）

いやぁ、今回は日常編、結構長いですね
いつ本編がすすむんでしょうか。
気長にお待ちください。

41話　「世のため、人のため、自分のため」

Ｓｉｄｅ　大和

「嘘、トーマ君が負けたの、あんな奴に」

「で、でも、ずるじゃないの？あれって」

教室内は騒然となっていた。

予鈴が鳴っているにも関わらず、誰もすぐに動こうとはしなかった。

それもそうだ。

学年一位、医者の息子、エレガンテクアットロの一角、そんな才色兼備であり、天才と呼ばれる男が負けるなんて誰が想像したろう。

葵冬馬が倒されるというのは、それだけのことだった。

俺はファンのように葵冬馬の勝利を信じちゃいなかったが、それでもやはり驚きを隠せない。

まるで子どもの屁理屈のようなもので、そのくせ一切の反論の隙などはなく

して、見事に丸めこんでしまった。

口が上手いにもほどがある。

流川海斗、本当にはかれない男だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時は放課後、とある空き教室にて。
数人の男女が集まっていた。

「さーて、今日の依頼はなんだろうかねぇ」

「今回も俺が競り落とさせてもらうぜ」

その中には井上準と風間翔一の姿もあった。

そこへ二人の教師が入ってくる。

「今日もよく集まっているようでおじゃるの」

「では、早速、今日の頼みごとを発表するヨ」

綾小路麻呂とルー・イーだ。

そう、ここは教師が有志の生徒に舞い込んだ依頼を消化させる、言うなれば、
依頼の競り場のようなものである。
当然、学校側の立場もあるので、報酬は現金ではなく、食券となっている。

「今日の依頼はストーカー退治だネ」

「頼み人が実際に来ているでおじゃる」

「なんでも事情を自分で説明したいってことだったからネ」

ルーがそう言うと、ドアから女生徒が1人入ってきた。

「こんにちは、1年C組の大和田伊予です。実は、私の元にこんな手紙がきてまして…」

「どれ、麻呂が読み上げるでおじゃる」

ゴホンと咳払いをする

「伊予、お前のことが好きで好きで好きでたまらない。遠くから思っている
だけでも幸せだったけど、もうこの溢れる気持ちを抑えられないん

だ。だから、毎日君のグッズを拝借して、なめたりして思いをぶつけているよ。これなら、たとえ話せなくても、僕らの気持ちは1つだよね。伊予も寂しくないだろう？僕の愛が伝わっていることを願ってます」

「もう、それは警察に届け出てもいいレベルの気持ち悪さだな」

準のツッコミも、もっともである。

「グッズというのは、私物のことだネ」

「お願いです、ストーカーを捕まえてやめさせてください！」

「頼み料は上食券５０枚でス」

「奮発するじゃねーか、やってやるぜ！　５０枚だ！」

「４９枚にて候」

「４８枚！」

競りが始まり、その枚数はだんだんと減っていく。

「３８枚！」

「なら、俺は27枚だ！」

「27枚。他にいないカ？なければ風間に落札！」

「やれやれ、またお前が持っていくのかよ」

準もいつものことと、半ばあきらめ気味の様子だ。
そう、百代が暴れたいために翔一は報酬が少なめでも、いつも仕事を持っていくのである。

「20枚だ」

誰もが決まったと思った瞬間、声が響いた。
それはドアの方向。
そこに流川海斗、その男が立っていた。

「流川先輩！？」

「なんだイ？」

「だから、その依頼、20枚で受けるって言ってんだ」

「な、流川！お前がなんで、こんなとこに」

翔一がいきなりの登場に驚きつつ、依頼を持ってかれそうなため、理由を問いただす。
そう、今までは一度も海斗がこの場に顔を見せることはなかったのだ。
疑問を持つのは当然であった。

「いや、なんかここ来たら、食券もらえるとか言われたから、来てみただけだ。どうせなら、今日一気に儲けようと思ってな」

「お前が自分から人のために働くってのか？」

「いや、俺も最初はただで食券がもらえると思ってきたんだがな」

「ならどうして、受ける？」

「別に人のためじゃねぇ。今の話を聞いて、ストーカーを俺が個人的に殴りたくなっただけだ。誰のためでもない自分のために動くってだけさ。それで食券まで手に入るんだから、こんな得なことはねえだろ」

「２０枚より下はいないカ！」

「そこまで言うんだったら、これはお前に託すぜ」

「おう、任せとけ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「流川先輩……」

「さて、早速この手紙を送りつけたストーカーを特定しなきゃなんないわけだが、最初に言っておくことがある」

「は、はい」

「俺じゃないからな」

「え？はい、それは分かってますけど」

「いや、一応な。ほら、推理小説とかでよくあるじゃんか。事件解決のために積極的に協力してくれていた優しい人が実は犯人だったとかな。俺なんていきなり現れたから、疑われてないかなーと」

「大丈夫です、流川先輩はそんなことをするような人に見えませんし、別に私、流川先輩だったら…」

「ん？」

「い、いえ、何でもないです。だいじょぶです」

「そうか？まあ、いいが」

そして、また作戦を考える。
犯人を手っ取り早く捕まえる方法を。

「あ、あの、流川先輩。」

「あ、なんだ？」

「ありがとうございます」

「いきなりどうした？まだ、何も解決してないぞ。それに俺は然るべき報酬
をもらうんだから、お礼は必要ないと思うが」

「いえ、そうじゃなくてですね…。流川先輩、前、私のこと不良の人たちか
ら助けてくれたの覚えてますか？」

「あー…」

そういえば、この子見覚えがあると思ったら、動物ビスケットのと

きの子だ
ったな。
そういえば、それで知らない子からファンレターもらったりしたな。

「私、あのときすっごく怖くて、でも流川先輩が助けてくれて、嬉しくって。
だけど、私あのとき、お礼も言えませんでした。先輩が来てくれなかったら、
どうなってたかも分かんないっていうのに、黙っちゃって、おまけに先輩か
らビスケットだけもらって、何も伝えられませんでした。私、あのときのこ
とずっと考えてました。先輩にはすごく感謝してるんです。だから、今更で
すけど、本当にありがとうございます」

なんか、めちゃくちゃ感謝されてしまった。
でも、怖かったんだから、あれはしょうがないと思うんだが。

「別に気にすんな。あれはただ、あいつらが俺の視界に入って、目障りだっ
たから、掃除したまでだ。結局、あれも今回と同じ、自分のために行動して
ただけっつーことよ。だから、そんな悪いことしたみたいな顔するな」

そう言って、軽くぽんと頭に手をやる。

海斗としては特に意味のない動物好き故の無意識の行動だったのだが、やら
れた方は意識せずにはいられないものだった。
伊予は突然の幸せに顔を赤くしながらも、

「で、でも、私が嬉しかったのは本当ですから。お礼は言わせてください。
助けてくれてありがとうございました。」

そう言った少女は、ずっと胸に引っかかっていたことが取れて、すっきりと
した表情をしていた。

41話　「世のため、人のため、自分のため」（後書き）

ありがとうございました
今まで海斗の並外れた実力にスポットをあててきましたが
今回は海斗の本来の優しさの部分を強調してみました。
人気があるのも頷けるといった感じですね

42話　「ひねくれた愛」（前書き）

松風「オラの担当する前書きコーナーの名前が決まったぜぇー
いえー、ドンドォン、パフパフー！
その名も“言おう！My心”だぜー！！
どうだぁー、勇往邁進⇒ゆおうまいしん、みたいなー
センスに溢れてんだろー、ていうか、名前紹介で
時間がないから、今回はこれでー、ばいばーいきーん」

42話　「ひねくれた愛」

「よし、早速犯人を捕まえるぞ」

「え、犯人分かったんですか？」

「いや、犯人が誰かはこの際問題じゃない。探偵じゃないんだから、証拠を揃えて、問い詰めるなんてことはしなくていいんだ。」

「といいますと？」

「手紙を読むに相手はグッズ、つまりは私物に手を出しているんだ。だが、盗られているものはないと。だから、私物をマークして、現行犯で捕まえち まえばいいのさ」

「あぁ、でもどうやって、マークするんですか？監視カメラとか？」

「まあ、とにかく全ての自分の私物の場所を教えてくれ」

「はい、分かりました！」

俺たちは実際に私物のある場所をまわることにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「まず、ここが1年C組、私の教室です。置いてあるのは、体操着とかリコーダーとか、実技教科で使うものですかね。」

「ふむ、席はどこだ」

「あ、あそこが私の席です」

「オーケーだ、次にいこう」

「ここは1年生の下駄箱です。当然、私の靴や上履きがあるんですが、いつも上履きは帰る時に持ち帰ってます。」

「出席番号からして、この靴箱で間違いないな？」

「あ、はい。私のはそこです」

「了解した、次の場所へ案内してくれ」

「ここは自転車置き場です。私は自転車通学なので、毎日利用させ

てもらってます」

「どの自転車だ」

「そこまで詳しくですか？私のはこれですけど…」

「まあ、必要なことだからな。当然、鍵はかけているよな？」

「はい、勿論です」

「これで全部か」

「はい、私の主な私物の場所はもう回ったと思います」

「じゃあ、ついてこい」

俺たちは全ての場所を確認して、ある場所に向かった。

……………………………………

「あの…、流川先輩」

「ん？なんだ」

「どうして私は、流川先輩の教室にいるんでしょうか」

そう、ここは２－Ｆ。

俺たちしか、教室にはいず、適当な椅子に腰掛けているというのが、現状だ。

「待機するところがここくらいしか思いつかなかった」

「いや、私物の場所を見張ってなくていいんですか？」

「だって、俺らがいたら、犯人が現れないだろ」

「でも、監視カメラとか、仕掛けてる様子もなかったし…」

「まあ、心配するな。確実に捕まえてやるから」

その言葉を最後に俺は意識を集中する。

探るのは３ヶ所。

１－Ｃ教室、下駄箱、駐輪場。

だが、調べるのはそこ一帯ではなく、完全なポイント。

被害者の席、靴箱、自転車、そこだけに集中する。

それらの場所との距離が０になった奴。

つまりは物に触れた奴を探し当てる。

友達でも触れそうなものだが、こんな時間に本人の断りもなく、触

っていた
ら、怪しいことには変わりない。

人気が少ないこの時間は犯人にとっては、狙い目だろう。
実際、俺たちが回ったときも、数人とすれ違ったのみだった。
十中八九、来るだろう。

その時であった。

ん？自転車に近づいてきてる奴がいるな。
見回ったときに、少女の自転車は他から離して置いておいた。
だから、隣に他の奴の自転車があるなんてことはない。
それなのに、その気配は迷いなく、そちらに向かっている。

これはかかったか？
そう思考している間にも、その気配が止まることはない。
黒と見ていいだろうな。

「おい」

「は、はい！」

いきなり、話しかけたから驚いているのか。
だが、今はそんなことを確認している場合ではない。

「今から６０秒経ったら、駐輪場に下りてこい」

「犯人が分かったんですか！？」

「いいから、言われた通りにしろ。俺は先に行ってるから。６０秒経ったら来いよ」

そうして、俺は教室を飛び出した。

階段を使うのも面倒なので、廊下の窓から飛び降りる。

着地と同時に駐輪場の方向へ走った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「フヒッ、フヒヒ、しめしめ、この時間だから誰もいないぞ！」

自転車置き場には明らかに挙動のおかしい男が徘徊していた。

それはもう、何もしていなくても、通報されそうな気持ち悪さであった。

「伊予ちゃんの自転車はっと。あぁ、ウヒヒ、これこれ！」

その男が一台の自転車の前で立ち止まる。

「このサドルに、あの可愛いお尻が！大事な部分が！ハァハァ。フヒ、たまらないなぁ、クンクンクン！」

カシャッ

「え！？誰だぁ」

「今時のケータイって便利なんだな。ほら、証拠写真がこんなにバッチリ」

「人！？見つかった、逃げねーと！」

「だから、証拠があるっつーに」

「な、速……ぅ」

俺は逃げようとするストーカーの進行方向に回り込み、足払いで地に倒す。
その倒れている途中の男の襟首を掴み、逆に引っ張ることで首をしめる。
当然、言葉は最後まで出なかった。
これで逃げる気力はなくなるだろ。

「お前が犯人で間違いないな」

「違うんです。愛が溢れて、どうしようもなかったんです。伊予ちゃんと幸
せになりたい一心で…」

「本人は迷惑だって言ってるから、俺がいるんだよ」

「そ、そんなはずはない！きっと伊予ちゃんだって、僕のことを！」

「これだから、ストーカーは…。まあいい、お前はどうあがこうが職員室で
みっちりしごかれるだろうからな」

「しょ、職員室だけは勘弁してください。僕もただ愛の被害者に過ぎないん
です。恋がエスカレートしただけなんです、しょうがないでしょう？」

「自分は恋をしただけだから、悪くないってか？」

「そ、そうですよ。恋愛は個人の自由でしょ」

「ふーん…」

そこで一旦、言葉を区切る。

「ハハハハ、面白いなー、お前。」

「わ、分かってくれましたか」

「人と真っ直ぐ向き合えない奴に自由に恋愛する資格なんかあるわけねぇだろ」

「ひぃ……！」

笑っていた表情を変え、冷たく言い放った。
相手も相当びびっているみたいだ。

そうだよな。

“人と真っ直ぐ向き合えない奴に恋愛する資格なんてない”よな…。

そこへ伊予がようやく降りてきた。

「流川先輩、その人が犯人ですか」

「おう、現行犯で捕まえた。おい、ストーカー、お前なんか言いたいことあるんじゃなかったのか」

「そうだよ、伊予ちゃん！こいつに僕らは相思相愛なんだって、邪

魔なんて
されたくないんだって、言ってやってよ！」

「ごめんなさい、私、好きな人いますし。こんな迷惑な行為、もう二度としないでください！」

「う、嘘だよね、伊予ちゃん…。僕らは結ばれる運命じゃないかっ！！今になって、僕を裏切るのかい。そんなことしたら、復讐して…」

ガッ

上から、ストーカーの首をおさえつけた。
ギリギリと程よく力を入れる。

「なーんか、お前変なこと言おうとしなかった？あんま、しょうもないこと
ばっか言ってると、喉潰すけど、どうする？」

「ひぃ、ずみません。前言撤回します。もう二度としません」

「よし、なら職員室行こうか。いいよな？」

「はい、あとは先生たちに任せます」

とりあえず、依頼達成だな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

——職員室からの帰り道

「今回もありがとうございました」

「俺のほうこそ、こんなに食券もらったら、言うことないぜ」

「くすっ」

報酬をもらった俺と悩みが解決した少女、二人で歩いていた。
決して気まずいなんてことはないのだが…

「あー…、えっとな」

「はい？なんですか」

「あのことは誰にも言わねぇから」

「あのこと？」

「ほら、好きな人がいるとか、どうこうだよ。当然とはいえ、聞いちまった
しな。あ、それとも、ストーカーを諦めさせるための嘘だったか？」

「あ！あれですか。ふふっ。本当にいますよ、好きな人は…」

「そうか…、まあ忘れるのは流石に無理だが、口外はしないから安心しろ」

（…私の隣にですけどね。）

42話　「ひねくれた愛」（後書き）

ありがとうございました
見事、後輩を救うことに成功しましたね。
これで少しでも海斗の優しさを知ってくれると嬉しいです。
そして、相変わらずのモテ具合。
まあ、こんなに優しい先輩がいたら、仕方ないですね。

43話　「海斗の秘密」（前書き）

これから1週間とちょっとの間、
私生活の方がとても忙しくなるので、
申し訳ありませんが、感想などに返信が出来ないと思います。
ただ、毎日更新は出来るだけするのでよろしくお願いします。
だけど、一応感想は見ているので、返せないのに言うのもなんですが
書いていただけたら嬉しいです。（極稀に返すかもしれません）

43話　「海斗の秘密」

今日の目覚めはよろしい。
昨日、ストレスを発散できたおかげだろうな。

やはり、悪い奴相手というのは、一番やりやすい。
そりゃぁ、勿論、相手が悪の方が、罪悪感がないというのは、あるのかもしれないが、俺の言っている点はそこではない。

ああいう奴らは基本、世間から信用されてない。
自分の行いで、わざわざ周りからの評判を下げているからだ。
だから、そんな奴らが誰に何を言ったところで聞く耳はもたれない。
発言に効力がないとでも、言った方が分かり易いか？

故に“自分がこんなことをされた”、“あいつは容赦なく、あんなことをしてくる”と言ったところで、信じるものなどいないのだ。
所詮はふざけた野郎の戯言だと、無視されるだけ。
これも日頃の行いってやつなんだろーな。

そのおかげで、俺は特に気にすることなく、力を振るえる。
そんなわけですっきりした俺は、いつも以上に早く起きてしまった。
いつもより、時間に余裕があるので、川辺で休憩中だ。

なんか早朝の川って、独特な雰囲気を持ってるよな。
こうして、改めて見ると、心が安らぐぜ。

そう、俺はそのとき、あまりにも安らぎすぎていた。

だから、近づいてくる者に気づくのが遅れてしまった。

「あの…！」

Ｓｉｄｅ　一子

今日も今日とて、朝から修行だ。
ん～、やっぱり朝の風を受けながら、走るのは気持ちがいいわ。
しゅーぎょうって、すーてきー♪

そう、いつもと変わらない朝。
いつもと変わらないトレーニングメニューをこなして、汗をかく朝。

でも、その日はいつもとは違うことがあった。

川辺に座っている人影があった。
別に人がいることは珍しくない。
知らないおじいちゃんが犬を連れて散歩してたりするのは、よくあることだ。

だけど、違う。
グレーのパーカーを着ている、その姿。
アタシはその姿をよく知っていた。

アタシはほぼ毎日、この川沿いでひたすら、修行をしている。
そりゃ、ファミリーの仲間と一緒に登校したり、天気が悪いときは別だけどね、
それでも、ほとんど毎日。
そして、そのグレーのパーカーの人も毎朝見かけた。

アタシが修行をしていると、何回か、川沿いを通っているのを見かける。
たぶん、この辺をコースを決めて、走っているんだと思う。
アタシが来て、修行を始める前に通ることもあった。
もしかしたら、アタシより、もっと早くから始めてるのかもしれない。

アタシは同じ修行仲間として、興味を持った。
フードを深くかぶっていて、顔は見えないんだけど、男の人で間違いない気
がする。
それでタイミングを見て、何度か話しかけようとしたんだけど。
その人はアタシが近づこうとすると、離れていってしまい、その場所からい
なくなってしまう。
偶然とかではなく、近づくと決まってそうなのだ。

一回、アタシもムキになって、全力で追いかけたことがあった。
でも、その人の足はとっても速くて、追いつけるものじゃなかった。
そのうえ、持久力だってあるから、その差は離れる一方で。
結局、アタシがそのあと、何度挑んでも、結果が変わることはなかった。

アタシも相当修行して、足には自信があったんだけど、考えてみれ

ば、この
人もアタシと同じかそれ以上の修行をしてるのよね。
やっぱり、修行ぱわーって、恐ろしいわ。

そんなことを考えたら、もっと話してみたくなって、今度は何度も通ること
を利用して、待ち伏せ作戦をやってみた。
だけど、アタシが待ち伏せをしているときに限って、まるでアタシのいる位
置が分かっているかのように、上手く迂回していく。
気配はアタシなりに隠しているはずなのに…。
悔しいわ。

そんなんで、良い友達になれそうだと思いつつも、結局一度も話す機会なん
かは訪れなかった。

だけど、今、目の前に座っているのはまさにその人。
休んでいるところなんて、一度も見たことなかったけど、今は完全に川を見
て、ぼーっとしているようだ。
なんか、意外なイメージだ。

って、そんなこと考えてる場合じゃなかったわね。
これはまたとないチャンスだわ。
そう思ったら、話かけるのにためらいは無かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あの…！」

まずい、完全に逃げるタイミングを見失った。
油断しすぎだろ、俺。
よりによって、一子に絡まれてしまうなんて、一生の不覚。

いやいや、まずは落ち着け、俺。
焦っても、何も始まらないぜ。
落ち着いて偶数を数えるんだ。（↑既に落ち着けていない）
２、４、６、８、１０…あれ、なんか難易度低くね？
ていうか、俺、０って言ったっけ、なんか言ってない気がする。
あ、じゃあ最初から……じゃなくて！

とにかく、黙ってるのはもっと怪しい。
適当に言葉を返そう。
俺はフードをより深くかぶり、答えることにした。

「な、なんだ？」

「あの、いつもここら辺、走ってますよね！」

「あ、ああ、そうかもしれないな」

「私、何度か話しかけようとしたんですけど、すれ違っちゃって。」

そりゃそうだよ。
だって、俺全力で逃げたもの。

努力なんて、人に見られた時点で終わりなんだよ。
相手の油断を引き出せなくなるしな。

「そうだったのか、気づかなかったなー…」

「ていうか、凄く足速いですよね。アタシ、全然追いつけなくて。
いつも、
どんな練習をしてるんですか？」

そんなに瞳をキラキラさせるな。
直視できんだろーが。
いや、それじゃなくても、ばれないために直視なんかできないが。

「えーと、それは…」

「？　あの、アタシたちって、どっかで話したことありますか？な
んか、よ
く聞いたことのある声のような…」

「ああー、そうだ！俺の修行方法はね、まず空を見るんだ！」

「え？空」

バッと上を指差す。
それに従い、一子が空を見上げる。

「で、どうするんですか？」

返事が返ってくるのが遅いと思い、顔を戻すと…
そこには、もう一子1人しか立っていなかった。

「あれ、いなくなってる…」

周りには人影すら見えないどころか、今の今までそこに人がいたのかと疑う
ほど、気配まで綺麗さっぱり感じられなくなっていた。

一方、その頃…

「本格的に危なかった」

危機一髪で思わず、本気で逃げてしまった海斗がいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

朝こそ大変だったが、今日の海斗は平和だった。

と、そこへ…

「海斗〜、なんかルー師範代が呼んでる」

「あ？」

突然の来訪者があった。

43話　「海斗の秘密」（後書き）

ありがとうございました
この話を現段階で出そうか結構迷ったんですが、
いつまでも謎ばっかなんで、少しだけ秘密を書いてみました
一子の修行する姿を毎日見かけたとかいうあれも
毎朝海斗もいたからこそ、言えていたことだったんですね

４４話　「高級計画」（前書き）

遅くなりました。
変わらず感想を書いてくれている方はありがとうございます。
絶対に一週間ちょっとしたら、返信するのですみません。

４４話　「高級計画」

「おお、来たネ」

「俺に何か用か？」

「実はまた依頼が入ってきてネ。君に持ってきたというわけだヨ」

「ちょっと待て。確かに昨日は受けはしたが、なんで今日も俺のとこに持ってくる？他の奴にまわせばいいだろ」

そうだ、昨日は乗りに乗っていた流れで、仕事をこなしたが、別に食券も若干少ないとはいえ、少しの間はこれでやりくり出来るだろうし、これ以上、進んでやる必要はあまりない。それこそ、昨日競り落とせなかった奴にでもやらせてやればいいだろ。

「それがね、今回の依頼は名指しなんだヨ。流川海斗、君にネ」

そう言って、指を指される。

一瞬だけ、思考が遅れる。

えーと、つまりはどういうことだ。

「は?そんな依頼があんのか、俺限定ってことだよな」

「そうだネ。初めてのパターンではあるけれど、別に禁止もしていないし、
今まで前例がなかったってだけだヨ。さて、どうすル?」

本当なら、ここで依頼内容くらいは聞くもんなんだろうが…。
今更、ちまちま稼いでも、しゃーないしな。

「いや、別にいい。そいつには悪いがな」

「そうカ。非常に残念だネ。上食券１００枚という優良物件だったんだけど
ネ。仕方が無い、依頼人には断る旨を伝えておくヨ」

「おい、今なんつった、１００枚って言ったか?」

「言ったヨ。今回、依頼料は上食券１００枚の大奮発」

「１００って、百鬼夜行のあの１００か?」

「百物語のあの１００だヨ」

「百代の過客の、あの１００か!?」

「川神百代の、あの１００だネ」

いや、そいつは知らんが…。
ともかく、そんなビッグな報酬なら、話は別だ。
１００枚って、一体何日もつんだよ。
いや待て、それだけあったら、他の奴に売ってもいいな。
割安で売れば、簡単にさばけるだろう。

「よし、とりあえず話を聞こうか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

そして、昼休み。
俺は弓道場に来ていた。

「お前が頼み人ってことでいいのか？」

「はい、私が流川先輩に直接依頼させていただいた、１－Ｓ所属の
武蔵小杉
といいます。」

「Ｓ組か。エリートクラスは奮発するな」

「どうしても先輩に引き受けていただきたかったものですから」

「ふーん、それにしても、弓術を見せてほしいだなんてな。普通、弓道部員
が頼むもんなのかね。俺、現役でもなんでもないんだけど」

「風間先輩との決闘のときに流川先輩の腕は見ました。あんな状況の中で、
一発で的の真ん中を捉えるなんて、見事でした」

「いや、でも俺の前にやった女子も、一発で当ててたぞ」

「あー…、流川先輩は知らないかもしれないですが、椎名先輩は弓矢やって
ますから。しかも、その腕はかなりのものです」

「なら、尚更そいつに教えてもらった方がいい気もするがな」

「それじゃあ、意味が……ゲフンゲフン。じゃなくて、それは無理なんです
よ。確かに椎名先輩は弓道部に所属していますが、幽霊部員気味で、とても
教われるような状況じゃないんですよ」

「はあ。まぁ、１００枚もくれるっていうなら、文句無く、やるけどな」

「そうですか！ありがとうございます」

ざわざわ　ざわざわ

「それでさっきから思ってたんだが…」

「な、なんでしょうか。」

「なんかギャラリーが多すぎないか」

「いや～、流川先輩が見れるなんて噂でも流れたんでしょうかねー。検討もつきませんねー。」

「まあ、いいけどさ」

Ｓｉｄｅ　小杉

なんとか作戦の第一段階は成功したわ。
プレミアムに上食券１００枚も用意したんだから、釣れてくれないと困るんだけど。

ともあれ、順調にここまで運ぶことが出来たわ。
１年生全体に噂を流し、弓道場に集めるのも完璧。
そして、この男がこの大勢の前で弓矢を射るのだ。

そんなことをして、成功されたら、もっと人気を上げることになるだろう。
だけど、そんなことは起こりえない。
この男は自分を応援してる数多くのファンの前で失敗をするのだ。

そして、恥を晒した結果、1年生の話題から消えていく。

あの先日の戦いを見る限り、この男、弓道に関しては素人だ。
“小さい頃にやったことある”とかなんとか、言っていたが、あれはただの
ハッタリだろう。
どんなに弓道を極めている人でも、的も見ずに矢を放つなんて、邪道もいい
ところね。
それだけならまだしも、弓を構える前から、目をつぶっているなんていうの
は、どう考えてもおかしい。
つまり、あの時当たったのは偶然か勘でしかない。

もう一度やれ、と言われれば、成功は出来ないだろう。
それでも、成功する可能性がないわけではない。
あの時のことを感覚的に覚えているなんてことがあっては、たまらない。
チャンスは1度だけなのだから。

だから、念には念をと、矢に細工をしておいた。
あの時、使った矢とは、材質も重量も長さも、何もかもが違う。
そのうえ、削ったりして、重心をめちゃくちゃにしておいた。
自分で言うのもなんだが、矢と言えるのかすら怪しい、まさに形だけのもの
となっている。

この矢を使って、素人が的の真ん中に当てられるわけがない。
というか、弓道の上手い人でも無理な気がするわ。
こいつの失敗は確定したも同然。

そして、その後に私が普通の矢を使って、華麗に真ん中を打ち抜く。
それを見ていた1年生は当然、この男より私の方が凄いと理解する。
話題の中心は流川海斗から、そのまま私に。

完璧なシナリオね。
うーん、我ながらプレミアムな作戦だわ。

早くその時が来ないかしら。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「じゃ、とりあえずやりますか」

俺はそこら辺の弓矢を使おうとする。

「あ、先輩！この弓矢を使ってください！」

「ん、別にいいけど、どれ使っても同じだろ」

「それが貸し出し用の物なんです」

「へいへい」

ちゃっちゃと済ませようと弓矢を構えるが…

ん？なんかこの矢おかしくないか。
持った感覚が違うような気が…。
気のせいか？

「おい、この弓矢…」

「さあ！流川先輩、打ち抜いちゃってください！」

「いや、だか…」

「どうぞ、見せてください！その技を！」

なんか、勝手に盛り上がっていて、聞ける状態じゃないな。
しょうがない、これでやるしかなさそうだ。

的をしっかりと見据える。
あの時の感覚を思い出す。
そして、射抜く！

次の瞬間、

「きゃあああああぁぁぁぁ」

矢はしっかりと的の中心を捉えていた。

「な！？どうして」

少し矢の質が、川神戦役のときと異なったが、基本一度その経験があれば、
いくらでも応用は可能だ。
経験に基づき、重量など、異なった条件を方程式を解くように代入していけ
ばいいだけのことだ。
あの重さではこの高度だから、この重さではもう少し上ってな具合にな。

やっぱ、一度見たあの手本が相当レベルが高かったんだな。
基盤がしっかりしていれば、それだけ活用の幅は広がる。
プロ級の弓術さまさまってことだ。
実にいいものを盗めた。

「じゃ、約束通り、食券１００枚はもらっていくぞ」

「な、ちょっとま…」

「あーそうだ。その矢、重心がずれてるから、新しいのに交換することをお
薦めするぜ。ちゃんとしたのを使わねぇと、せっかくの実力も伸びないぞ」

そう言い残して、海斗はその場をあとにした。

「うわー、何今の。素敵すぎる、流川先輩」

「さらっとやっちゃうのが、またカッコイイんだよね」

「こんなことって…」

結局、武蔵小杉のプレミアムな作戦とやらは、海斗の人気に拍車をかけただけだった。

４４話　「高級計画」（後書き）

ありがとうございました。
まあ、タイトルは読んでもらった方は分かると思いますが、こうきゅうではなく、プレミアムです。
はい、どうでもいいですね。
次回もよろしくです

45話　「海」（前書き）

はい、今回からは水上体育祭編です。
なんだかんだで日常編が長かったですね。
やっと結構前から話が出ていた水上体育祭のスタートです。
まぁですが今まで通り、どうぞ、ごゆるりと見てください

45話　「海」

太陽がギラギラと照りつける。

「夏だ！」

「海だ！」

「スク水だあああああああああああ！！！」

真夏の砂浜に男たちの声がこだました。

「はぁ、これだから、男っていうのは…」

「まあ、こんな天気のいい日に1年に1度の水上体育祭なんですから、はしゃいでしまうのは仕方ないですよ。私はお姉さんとして、そんな皆さんをしっかりと見守ります」

そう、今日は水上体育祭当日。

海辺には川神学園の生徒たちが一様に水着姿で並んでいた。

勿論、学校行事なので1年から3年まで全ての生徒が揃っている。

「フフフ…、今回の体育祭は例年以上に楽しいことになりそうだ」

不敵に笑う三年生もいれば、

「ううん、初めての体育祭。なんとしても、ここで活躍して、友達を増やしたいです。目標まではまだまだですからね」

緊張している一年生もいた。

そして…

「へえー、ここが海か。やっぱ、写真とかで見るのとは迫力とスケールが桁違いだな。いい経験したわ、ほんと」

「海斗、本当に海来たことないのね。珍しいわ」

「自分も日本の海はこれが初めてだな。日本の海の波はあのフジヤマを飲み込むほどだという。流石は侍の国だ」

なんか確実に“富嶽三十六景”あたりと勘違いしてる雰囲気がそこはかとな

く感じられるのだが、面白いので放置しておくことにする。

それよりもこれが海か…
想像通りの感じだが、なんか複雑だな。
何もかもを全て飲み込むこの広大な“海”。
空から降り注ぐ雨も、流れてくる川の水もな…。

“お前、名前はなんていうんだ。”

はあ、馬鹿みてー。
何、今更思い返しちゃってんだか。
祭りの前にテンション下げて、どうするよ。

いやー、忘れた忘れた！
今日は楽しもう、なんてったって初海だし。
テンションが上がることには違いない。

それに最近、色々なことがあって、気づかされた。

最初はタッグマッチ、次いで川神戦役。

それでいちゃもんをつけられて、クリスと決闘なんてこともあったか。
そしたら、そのバカ親父の軍がやってきて、マルギッテとかいう強い軍人とも戦って、ちっとばかしハッスルしちまった。
最近では、ストーカー退治や弓道とかの依頼もこなした。

人と関わらないことに固執していた頃からは考えられないくらい、面倒に巻きこまれている毎日だ。
だが、驚くくらい充実している。
退屈からの脱却、求めていた非日常が実現している。

なにより、力を出せる奴らがいるということは良い。
やっぱり独りでの訓練も悪くないが、人との実戦とは別物だ。
なんだかんだで体を動かすのは好きなんだよな。
ずっと何もしないなんて、ストレスだって溜まる。
運動でもなんでもそうだが、たまにはやらないと、腕もなまるしな。

今までは不良とかで我慢してきたんだが、やはり物足りないという感じが否めない。
強い弱いとかの話ではなく、あいつら自分が最強だと思って、常に人を見下してるからな、そのくせ仲間任せだし。
そういう意味では、それこそ真剣の喧嘩でなくたって、よっぽどこいつらの方が楽しめる。
この学校に入ったのは、正解だったな。

…本当にあの頃とは何もかもが違う。

自分が知りたいと思ったから、入った。
だが、いざ来たら、俺は逃げていた。
変わったつもりが、何も変わっていなかった。
結局どこかで恐れていたんだ、繰り返しを。

それでも、あいつは、一子は話しかけてきた。
俺の対応なんて、冷たいものだったはずだ。
それこそ、二度と関わりたいなんて思わないように。
こいつと話そうと思ったのが馬鹿だったと、後悔するように。

だけど、一子は俺の思惑通りには動かなかった。
俺がそんな接し方をしたところで、他の奴のように嫌悪の目を向けるわけで
もなく、ただ笑っていた。

～

「流川君、ウメ先生にあんなこと言っちゃダメよ」

「あ？」

「一応、鞭の使い手で強いのよ。それに大和が年上の人に敬語を使うのは、
“しゃかいつーねん”？だって言ってたわ」

「で？」

「いや、それだけなんだけど…」

「あっそ」

「なんか流川君、疲れてて、今話すの嫌かな？ごめんね、無理矢理話しかけちゃって。また今度、話しましょ」

「いや…」

「疲れはしっかり休んでとらなきゃダメよ。あとは食事も気をつけてね」

「だから…」

「またね、バイバイ！」

～

本当におかしい奴だ。

客観的に見ても、悪いのはどう考えても、俺の方だろ。

なのに、謝られてちゃ、こっちの立場がない。

よくまあ、こんな奴に“またね”なんて、言葉が出てくるもんだ。

少なくとも俺なら、今後は近づかないようにするぞ。

でも、その後もたびたび話しかけてきて、俺も遂に相手の名前を覚

えるまで
に至ってしまった。
そして、タッグマッチのペアに進んでなってくれた。
そのおかげで、由紀江やクリスと知り合い、俺の日常はガラリと変わったわ
けだ。

一子がいなかったら、今頃俺はどんな生活を送っていたんだろうか。
独りで退屈な日々に飽き飽きしていたのだろうか。
そう考えると…

「おーい、海斗！」

「ん、なんだ？」

「なんだじゃないわよ。いきなり黙っちゃうし」

「ああ、悪い悪い」

ちょっと物思いにふけっちまったようだ、俺らしくもねぇ。

「ていうか、今日は暑いんだから、しっかり水分とらないと！はい、海斗、
これ配られてるドリンクだから、ちゃんと飲んでね」

「ああ、俺の分までわざわざ持ってきてくれたのか」

「そんなペットボトル1本持ってくるのも、2本持ってくるのも変わらないわよ」

そう言って、一子がいつもの笑顔で飲み物を手渡す。
こいつ、自分がどれだけのことをしてるとか、人に影響を与えてるとか、全然分かってないんだろーな。
それがいいとこなんだろうけどさ。

「一子。」

「ん？なーに？」

「ありがとうな」

「へ？」

瞬間、一子の顔は真っ赤になる。
その火照りを冷まそうというのか、手に持っている冷えたペットボトルを頬に当てて、目を見開いている。

「い、いきなり、何よ、もう。飲み物運んできたくらいで大げさよ」

「はっ、まあそうかもな」

「まったく…、おかしな海斗ね」

たとえ、何の感謝かは伝わらなくてもいい。
目の前の少女に対して、言葉にしておきたかった。

45話　「海」（後書き）

ありがとうございました
ちょっとは長くなりますかね？
ストーリーよりも日常の方が長いのが定着してますから
次回からは競技が始まる……はず

46話　「借りたら返せ」（前書き）

感想で多数？いただいたんですが、
一子がメインヒロインなのかという件について…
なんか無意識のうちに出番が一番多いんですよね。
あの素直な反応が書きやすいというのもあると思いますが、
やはり愛ゆえでしょうか（笑

46話　「借りたら返せ」

さて、そろそろ競技が始まる頃だろう。
最初の競技が何とか、どのくらいの競技を行うのかとか、プログラムみたい
なものがないので、皆目見当もつかない。
学校として、それは大丈夫なのか？

あの学園長はただ水着見たいだけなんじゃねーのか。
こんなこと思ってるのは、俺だけじゃないはずだ。
一子とかだって、そうだろう。
ていうか、隣にいるはずなのに、さっきから静かすぎないか？

一子のほうを見る。
すると、一子もこちらを見ていて、何か言いたそうにしていた。

「海斗、あのさ…」

「ん、どうした？」

「この前、大きさは気にしないって言ってたじゃない？」

大きさは気にしない？
なんだっけ、それ。
確かにそんなことを言った記憶はしっかりとある。

「ど、どうかな…、アタシの水着姿…」

「ん？水着姿？」

“どうかな”って、どうゆうことだ。
大きい小さいの話はもうどっかいったのか。
それにしても、一子の水着姿ね…

着ているのは勿論、学校から指定されているスクール水着だ。
小柄で明るいイメージの一子にはぴったりな気もするがな。
まさにスポーツ少女といった感じだ。

「似合ってんじゃねーか？」

「いや、そうじゃなくて、海斗がどう思ってるのかを聞きたいなーなんて…」

「健康的で可愛らしい格好だと思うが」

「かかか、可愛らしい…！？」

びっくりすんなよ、そっちが聞いたんだろ。

体は日々の修行で適度にしぼってあり、無駄な肉はない。
かといって、筋肉で角ばった感じなどは一切なく、締まりつつも丸みがあって、一子の小動物的な可愛さを損なっていない。

というか、普段はポニーテールに縛っている髪を下ろしているという日常とのギャップに魅力を感じてしまうのは、男としては仕方ないだろう。

「あ、ありがと。あの、海斗もさ…水着…その、かっこいいと思うわよ……、
ううぅぅ」

そういった一子からは蒸気でも噴出さん勢いだった。
顔も言うまでもなく真っ赤で、ただでさえ暑い陽射しの中、その周辺だけが
最高気温を記録していたほどだ。
もはや、恥ずかしさからのうめき声も、暑さのせいで瀕死の状態になっていて
るようにしか、伝わらなかった。

「だ、だいじょうぶか？一子。」

「だ、大丈夫よ！」

「まあでも、この水着、店員にすすめられたのを買っただけなんだけどな。
そんなに有名な会社のやつだったのか？」

「え…そうじゃなくて、アタシがかっこいいって言ってるのは、その…、水
着自体のことじゃなくて…」

「海斗！」

一子が何か言いかけたときだった。
その間にクリスが割って入ってきた。

「犬ばかりでなく、自分はどうだ」

「ちょ、ちょっとクリ！いきなり入ってこないでよ」

「ああ、似合ってる似合ってる」

「ふふ、そうだろう。海斗に認めさせてやったぞ」

まあ、クリスもいつもとは違った感じで髪を結んでいて、可愛らしいことに
違いない。
だが、みんな何故俺に聞くのだろう。
そんなにセンスがあるわけでもないのだが…。

「もう、クリ邪魔しないでよね！」

「なんだ犬、勝負するか」

「望むところよ！」

「いざ…！」

「はいはい、そのやる気は競技にぶつけとけ」

何故か急に機嫌が悪くなった一子と好戦的なクリスが決闘を始めようとしたので、俺は二人を適当に押さえておいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「では、最初の競技を発表する」

はあ、やっとか。
しかし、海でやる競技って、どんなもんなんだろうな。
流石に泳ぐだけじゃ尺足りないだろうし。

「最初の競技は借り物競走じゃ！」

…………は？
いやいやいや、全然海関係ないんだけど。
なに、海にも入らせてくれないわけ？

せっかく、こんなにも水があるのに、活用しないのかよ。
“水上”でもなんでもないよね、それ。

「まあ、今海と全く関係ないとか思っている者もいるじゃろうが、落ち着きなさい。その辺りはしっかりと考えておる」

ほう。
その考えを是非聞かせてもらいたいもんだ。
今の状態では確実に俺と同じ考えのやつも落ち着けないだろう。

「借り物競走とは、その名の通り、物を借りる競技じゃ。そして、水上体育祭の要素を入れるのは、ずばりここ！借りるものは全て例にもれず、海や水にちなんだ物になっておる。貝殻だったり、水羊羹なんて変り種も入っておる。その難易度は高いものから低いものまで様々じゃ。何を引くのかも運次第じゃが、重要ということになるのぉ。ワシが色々考えたので、難しいものも生徒らの頑張りに期待する」

へぇ、色々考えられてんだな。
まだ、海にまで来なくてもできるんじゃないかという疑問はあるが、大体の

頑張りは認めよう。
海に直結するものだったら、手に入りそうなもんだが、名前だけが水に関係
しているとかいうものだと大変そうだな。
そこら辺は運に任せるしかねぇか。

「よーい、始め！」

一斉にスタートする。
まずは紙をとらないとな。
一番に紙が置いてあるところまで辿り着くと目の前にあった紙をとる。
こんなの悩んでも仕方ないから、さっさと決めた方がいい。
そして、その紙を見ると、

“１年生の水着（女子に限る）”

と書いてあった。

……おい。
確かにドストレートで水には関係があるが、難易度も高すぎないか。
絶対にこれ書いたの深夜とかだろ。
徹夜特有のテンションで書いただろ。
もはや、あのじじいの願望としか思えん。
主にかっこの中とかな。

ていうか、皆着てるものをどうやって借りてくんだよ。
ともかく向かうしかないか。
俺は1年女子の塊に走っていく。

「ねぇ！流川先輩、こっち来てない？」

「ほ、本当だ、なんか借りに来たのかな。私が貸したいな…」

「おい、ちょっといいか。こんなかで水着もう一着持ってるやついないか」

「え？どういうことですか？」

「いや、あの変態が…じゃなくて、指示が1年生の水着なんだよな。だが、
当たり前だが、皆着てるだろ？スペア持ってるやつでもいないかと思ったん
だが、普通いねぇよな…」

「そうですね…」

いや、まず指示がおかしいんだけどな。

「わ、私、先輩のためなら、別に…」

「おい！馬鹿、やめろ」

「きゃ…／／／」

いきなり水着に手をかけた少女の両手を押さえる。
こんなとこで脱がれたら、確実に俺が脅迫したようにしかならない。
第一、行動が思い切りすぎだろ。
もっと自分を大切にしようぜ。

ん？待てよ。

「おい、ちょっと一緒に来てくれるか」

「あ…は、はぃ」

手を掴んでいる少女の目を見て、頼んでみる。
何故か顔はそらされたが、了承してくれた。
うむ、優しい子だ。

そうだ、別に水着単体で持っていく必要はない。
水着を着ている子に来てもらえばいい話だったんだ。
危なかった、危うく一人の少女に心の傷を負わせてしまうかもしれなかった。

そのまま、手を引っ張ってゴールに向かった。
終始、その子は何も話さなかった。
やっぱり少し迷惑だったかね。

「よし、これでクリアだろ」

「うむ、ええのうええのう」

「何を触れようとしてんだ」

「失礼な、手も動かしておらんわ」

「いや、もう目が犯罪者だったから。確認できたんだったら、もう
この子は
元の場所に返してくるからな」

学園長は“もうちょっと”みたいな目を向けてきたが、その目を確
認したう
えで完全に無視してやった。
やっぱ、もろあいつの願望じゃねーか。

はじめっから、カオスな体育祭だった。

46話　「借りたら返せ」（後書き）

ありがとうございました
もはや海斗の人気がよく分かる回でしたね。
脱ぐ覚悟すらあるって凄いですよね。
クリスや一子も自分を見てもらいたいと。
羨ましいかぎりです。

47話　「願い事1つ」（前書き）

活動報告にも書きましたが、溜まってた感想ある程度返しました。
本当にまとめて返信という形になって申し訳ないですが、
皆様の感想は毎日読ませていただいております。
返信がすぐに出来ないにも関わらず、感想をくださっている方々は
本当にありがとうございます。
嬉しくて、非常に励ましとなっております。

47話　「願い事1つ」

次はなにやら一年生の競技らしい。
一年生全体が移動を開始しているのでたぶん間違いない。

あれ？
でも、なんか女子だけしかいないような…
男子は応援席で待機しているどういうことだ。

「続いての競技は1年女子による水上バトルロワイヤルじゃ！自由参加なので、今からでもどんどん参加できるぞ」

「おー、いいぞーー」

「この競技を待っていたんだーー！」

なんだなんだ、この男子陣の盛り上がりようは。
あちこちからこの競技への熱が感じられる。
一体どんな競技なんだ。

「ルールはいたって単純じゃ。海に浮いたビニールの小島の上で参加者全員でバトルロワイヤルを繰り広げてもらう。ルールは1つだけ。小島から落ち

たら、その時点で失格じゃ。最後まで残っていたものが優勝となり、その生
徒の所属するクラスにポイントが入る。ちなみに上位三名までにはポイント
が入ることになっておる。」

なんだ、結構まともな競技じゃないか？
だが、男子の歓声は鳴り止まない。
それに学園長の顔も緩んでるような気がするし…

「一体、どういうことなんだ」

「その質問には俺が答えてやる」

「うぉ…いきなり何だ」

後ろに立っていたのはいつも一子と一緒にいる頭のよさそうな奴。
そういえば、この前賭場にもいたよな。
一子の話に結構出てくるんだが、名前なんていったっけな。
なんかこう、有名な戦艦的な名前だった気がするんだよな。

「大和だ、直江大和」

「わぉ、テレパシー？」

「んなわけあるか。別に人の名前なんて覚えそうにないお前のこと

だし、こ
れからは俺の名前知っておいてくれなんて言わないが、そんな目の
前で必死
に考えてる顔されても困るんだよ」

「おー悪い悪い。で?その大和が俺に話しかけてくるなんて、珍し
いんじゃ
ねーの?」

「まぁな。競技について知りたかったっぽいしな。流石に今回のこ
とは俺も
不憫に思ってるし、気にすんな」

おー、競技について教えてくれんのか。
それはありがたい。
だけど、今回のこと?不憫?っつーのは何の話だ。

「大方、説明された競技の内容と会場の男子の盛り上がり具合が結
びつかな
いから、不思議に思ってるってとこだろ」

「やっぱ、テレパシーか」

「いや、そんくらいは考えりゃ分かる。一応、ファミリーの頭脳担
当だしな」

「そういうもんか」

「で、その肝心の競技だが、アレは去年も行われた競技なんだ。まあもっと
も、そのときの競技名は“ドキッ！女子生徒だらけの水上アイランドバトル・
ポロリもあるよ”なんて、ふざけた名前だったんだけどな」

「……」

「当然一部の男子たちは大喜び。だけど、そんな名前で参加者が集まるはず
もなく、結局一人として参加者は出ずに競技自体がなかったことになったん
だ。それが今回、また開かれることになって、男子の期待値も前年のおあず
けによって高まった結果、こんな状況となってるわけだ」

なるほど、さっきから絶えず叫び続けている男子たちにもだらしのない学園
長の顔にも合点がいった。
そりゃそんな露骨な企画だったら、大コケするに決まってんだろ。
あの学園長は学校行事を何だと思ってんだ。
私物化っていうレベルじゃねーぞ。

ん？でも待てよ…

「じゃあ、なんで今回は普通に開催されてんだ？見たところ、参加してんの
ほぼ一年の女子生徒全員くらいだろ」

「ああ、それなんだがな……。今回は学園長も対策を考えてきたらしくてな、
優勝者には一等の賞品が出るんだよ。」

「へー、……え、それだけ？」

「ああ、それだけだ」

「…どんだけ豪華な賞品なんだよ。こんだけの人数好みもあるだろうに、そ
んな万人受けするもんなのか。やっぱ金とかか」

「はあぁぁぁぁ」

そこで大和は大きな溜息をつく。

「いやまあ、それが不憫に思ったんだけどな。なんか優勝者はお前に願い事
を一つ聞いてもらえるらしいぞ」

「は？お前って誰だよ、シェンロ○か」

「いや、残念だが七つの球を集めるまでもなくお前だよ、流川」

「え！？なんで俺がそんな役になってんだよ」

「やっぱ知らされてないよな…。まあ、なんでって言われたって、

需要があるからなんじゃねーの」

（まゆっち含め、大人気だもんな。そりゃほとんどの1年女子が参加させんのにはこれほど効果的な手はないだろう）

あのジジイめ…！

自分の欲のために俺をなんの断りもなく使いやがって、老い先短いその人生強制終了させてやりたいくらいだ。

餌にされた海斗の意思など尊重されることもなく、水上の小島では物凄いやる気の少女たちが優勝を競いあっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「優勝は黛由紀江じゃ。さて、では優勝賞品である流川海斗にお願いの権利をプレゼントしよう。大事に使うのじ…」

「なーにが、“プレゼントしよう”だ。誰もお前に俺の権利を委託

した覚え
はないわ」

「あ、海斗さん…。その大丈夫ですよ、海斗さんがそんなことを許可してい
るわけないだろうなって思ってましたから。私は別に無理に海斗さんにお願
いを聞いてもらおうなんて考えませんし、迷惑なことは十分承知してておりま
すから。ですから、その、あの…」

「…はぁ。由紀江、ちょっとこっちに来い」

「え…はい」

そのまま由紀江の手をひいて、人だかりから離れる。

「ここまで来ればいいだろう」

「あの？海斗さん」

「確かに勝手にやられたのを俺が軽々承諾してたら、学園長もつけあがるだ
ろうし、気乗りしないがな…。由紀江が頑張ったのは事実だ。それでいきな
り優勝賞品なしなんて、それも十分な仕打ちだしな。いいぞ、願い事くらい
言ってみろ。叶えられる範囲ならきいてやる」

「え、え!?そんなでも…」

「言っとくけど、俺に悪いとかは考えるなよ。俺が決めたことだ。それにこの件に関しては悪いのは全面的にあのジジイだし、由紀江は被害者だからな」

「はい…、でもそんな急に言われてもですね…」

「なんでもいいから、言ってみ?」

「えーと…あ!じゃあ海斗さんにお弁当を作っていくとか…」

「いや、それ完全に俺が得してるから。自分のためのお願いをしなさい」

「じゃあ、えーと…えーと…」

「まぁ、急に言われても難しいか。いいぜ、保留にしといてやるから、願いが思いついたら言いな」

「あ…!え、はい」

「じゃあな」

こうして、少女は大変な権利をゲットしてしまったのだった。

47話　「願い事1つ」（後書き）

ありがとうございました
もう学園長の変態度が増しているのはスルーの方向で。
それにしても、海斗の釣り効果は高すぎますね。
まあ、それだけ嬉しい賞品なのでしょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1374w/

真剣で私たちに恋しなさい！

2011年10月11日06時55分発行